
ゼロの使い魔 異常な力を持った普通な一般人？

ディアズ・R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 異常な力を持った普通な一般人？

【Nコード】

N5336V

【作者名】

ディアズ・R

【あらすじ】

死んでしまった少し異常な主人公！

合法ロリな神によりゼロ魔の世界に転生！

普通とゆう概念をどこかに置いて来た様に人生を謳歌する！

原作？何それ？美味しいの？状態！

どれだけ壊されてしまうのだろうか！

作者にも分かりません！

プロローグ（前書き）

ぶっ飛んでる。

どうしよう。

プロローグ

死んだなう。

「アホか……一応言っておくが、我は神だ」

婆口調合法ロリ神なう。

「……このまま消してしまおうか」

物騒なう。

「よし、消そう」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いい」

「……まあよい」

冗談の通じないロリだ。

「……口にしなければ大丈夫だとも思っておるのか？」

「……それより本題に入ってくださいな」

「……まあいいじやろう、お主には転生し——」

「テンプレ乙」

「……渡す力はなにがいい……3つまでならどんな物でもよいぞ」

ロリが怖いです。

「ドラクエシリーズに出る魔法全部とどんな物でも創れる想像具現」

「どこに行く気じゃ？ 普通の世界に転生させるつもりなのじゃが……」

…」

恐怖政治万歳。

「頭可笑いんじゃないのか？……別の世界に送るか」

「最後の一つは、肉体スペックでたのんまさ」

「……なにもいわんぞ」

「気と魔力を無限で身体能力はなんでもいいや……あ、スーパーサイヤ人？までなれる様をお願いしまっす」

「何故サイヤ人？」

「昨日見たから」

「そうか……うむ、それでよいか？」

モーマンタイ。

「……では、行つて来い」

「逝つてきまっす」

これで転生者の完成です。

プロローグ（後書き）

続き書こうかな、やめようかな。

とりあえず書いてみることにした。

第一話（前書き）

個人的に、スーパーサイヤ人？は、無し派。

貴族に転生か、平民に転生か、使い魔に転生か……使い魔でいいよね？

第一話

転生なう。

「ライナく手伝って」

「あゝい」

ライナ・リユートルー3歳。

将来の夢、料理人。

「相変わらず三歳児とは思えない手際の良さね……」

ちなみにこの世界は、ゼロの使い魔だった。
名前しか知らん。

我が家は中流貴族の中でも上のほうらしい。
母の名は、イルナ・リユートルー。

父の名は、リユーラ・リユートルー。

伝勇伝のライナパパとライナママだった。

魔眼は無かった。

無理矢理付けられるけど。

「じゃあ、これ持って行つてね？」

「うい」

何で能力もらったんだっけ？
正直いらね。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

「おいしいよイルナ、でも、君のほうがおいしそうだね?」
「まあ!ライナがいるのにそんな事言ってはダメですよ?」
「ふふ、君への愛が抑えられなくてね」
「もう、アナタったら!」

仲良いなこの二人。

「「「ごちそうさまでした」」」
「遊びにいてきまゝす」
「「「いつてらっしゃい」」」
「イルナ……愛してるよ」
「アナタ……私も……」

ほんとに仲良いな。

・
・
・
・
・

「ある日、森の中、風竜に会った」
「グガアアア!!」

【ゲーム・オーバー】（バイオハザード風に）

（まだ早いわ!）

念話なう。

（今こそ能力を使うときであろう!?!）
（じゃあ、あれやる）

（あれ？）

右手を前に突き出して、言う。

「これはメラではない、メラゾーマだ！！」

でかい火の玉が風竜に当たり爆発する。

半分炭化した。

火の玉TUEEEEE。

（……逆じゃ）

（ツツコミ御苦労）

（……ではな）

念話切れた。

モンハン気分で剥ぎ取りをすることにした。

ナイフの代わりに聖剣エクスカリバーを使った。

剥ぎ取りにくかった。

「帰ろ…ルーラ」

家に帰ると…はじめていた。

何をはじめていたかは……気にしない方向で……

第一話（後書き）

サイヤ人なる必要なかったんじゃない？

……ま、いいか。

とりあえず、原作開始までフラグやらなんやら建てる事にした。
けして、いきなり原作に介入する場面を思いつかなかったわけでは
ない。

……ごめんなさい。

貴族で、原作開始ごろになったら、呼び出されるとゆう形にしてみ
ます。

どうしても原作から、とゆう人は、言っして下さい。
頑張って、書き直します。

第二話（前書き）

何故か意外と人気だ。

期待が……なんでもないです。

第二話

5歳キタコレ。

「そろそろ魔法の練習をしようか」

「そうね、ライナは一回教えれば何でも出来るからどうなるのかしら？」

さいでつか

魔法ってそんなに難しいの？

・
・
・
・
・

結果だけ言おう。

俺が化け物だと分かった。

あれがそれを見た親のなれはてだ。

「「……………」」

何故こうなったか、説明でもして再起動を待つとしよう。

まずレビテーション。

通常であれば、使用者の頭らへんまで対象の物が浮かぶらしい。

俺が使うことによって、文字通り星になりました。

次にフライ。

普通なら軽く飛ぶぐらいの魔法らしい。

俺が使ったときは、もはや舞。術だった。

もう少して大気圏突破して死ぬところだった。

多分生きてるだろうけど。

最後にやった属性魔法。

火ならファイア、水ならウォーター、風ならウィンド、土ならアース。これらは練習次第で全員使えるようになるらしい、一発で成功する魔法が自分の属性らしい。

とゆうわけで、やってみた。

火…ベギラゴンのな？

水…例えるなら津波。

風…これが…バギクロス！？

土…地震ですね、わかります。

まあ、使うことは無いだろう。

なぜかって？言っただろう、将来の夢は、料理人だと！！

「ライナ…魔法は、あまり人前で使わないように、な？」

「あゝい」

魔法なんていらん。

でも、土系の練成は練習することにした。

ガラス職人もよさそうだから。

「竜狩りにいてきまゝす」

「…いつてらっしゃい」

「…早く帰ってくるのよ？」

「うむ」

とても渋い顔だったとだけ言うておこつ。

・
・
・
・

竜YOEEEEEE。

今回の成果。

成体の火竜と風竜と、あと、バジリスク。

バジリスクがいきなり出てきて睨んで来たから、睨み返したら死んだ。

バジリスクって石化の邪眼的なもの持ってた気がするけど……まあ、いいか。

竜は普通に倒した。
素手で。

「てっしゅ〜」

今回の剥ぎ取りよしのナイフはあまのむくもつつる天叢雲剣でした。

神剣ですね。

とても斬れました。

「おか、え……り……？」

「どうか、し……た……？」

今日も平和だ。

この後、何があったかは、ご想像にお任せする。

（バジリスクが死んだのは無意識にザキを使っただからだろう……邪眼は知らん）

全属性のスクウェアになっただぜ！
やったね！

第二話（後書き）

人間じゃなくなった。

まあ、いいか。

そのうち、ヘキサゴンかペンタゴン（これだっけ？）にするかな。

第三話（前書き）

何故かテンションが上がってる。

頭おかしくなりそ……もう、おかしいかもしれない。

第三話

誕生日なう。

（ラ・ヴァリエール領で、カタレンさん？の誕生会を開くそうです）

（……こちら側からしか念話は繋げない筈なのだがな）

（自分バグみたいですから）

（……もうよい）

これがツンデレか……興味深い！

（誰がツンデレか！！）

強制遮断。

合法ロリがなんのその。

「ライナ、もうつくから起きなさい」

む、寝ながら思考していたようだ。

何時もどうりで何より。

「……すごく……大きいです」

「なんか、エロいぞ、ライナ」

だってここの家でかいんだもの。

ヴァリエール邸内に入ると、高そうな調度品や絵画が並び、金持ちな印象を受けた。

まあ鎧や剣も多かったが。

俺と両親はそのままゆっくりと歩を進め公爵がいる部屋へと向かつ

た。

「どうしよう、父さん」

「ん？どうした？」

「やつちやいそう」

「……あれだけはやるなよ？」

「……あ、あそこだね」

「あれなのか！？」

父さんをからかうのも飽きたのでドアを開ける。

その中では、二人の娘を抱えて頬擦りしているラ・ヴァリエール公
しゃ――

何も言わずに静かに扉を閉めることにした。

「どうしたんだ、ライナ？」

「部屋でも間違えたの？」

「……この前の母さんと父さん見た気分」

二人が赤くなった。

「あ、あれわだな、その」

「こ、ここに、子作りよ！」

「そう！子作りだ！弟か妹どっちが良い！？」

「それとも両方が良いの！？」

「墓穴掘ってる墓穴掘ってる」

ウチの二人はあわあわしてる。

ドアの向こうで、爆音が聞こえた。

リアルカオス、マジキツイ（笑）。

とりあえずもう一度扉を開く。

見事な笑顔でこちらを出迎えてくれた公爵夫人と娘2人。
そして所々痣ができているラ・ヴァリエール公爵の姿を確認。
爆発したのに痣なの？

「ようこそリユートル殿」

「此度は、お招きいただきありがとうございます」

口調は少し硬いがお互いの表情は笑顔で、親交の深さを表している。
母さんは母さんで公爵夫人と井戸端会議的な何かを始めたようだ。
必然俺は残った二人の相手をする事になった。
片や笑顔でこちらをじっと見ているし、片や少し警戒している。
とりあえず話しかけることにした。

「どんな願いも一つだけかなえてやろう！」

空気読め？理由が無いな！

「えっと……」

「……アホらしい」

（何故にドラゴ・ボー。！？）

やっぱロリ神の方がツツコミをわかってるな。

「ライナ・リユートルです。よろしく」

少し不機嫌そうに片方が――

「エレオノール……エレオノール・アルベルティーン・ル・ブラン・
ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール」

嬉しそうにもう片方が――

「カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。仲良くしましょうね？」

と、言った。

エレオノール嬢は10歳、カトレア嬢は今日で7歳だ。
てか、なげえ……

「誕生日おめ」

（軽いわ！？）

「まあ、ありがとう、ライナ君」

（いいのか！？）

ナイスツツコミだ、神よ。

「が、誕生日プレゼントなど用意していない！」

（威張るな！！）

む！？殺気！？何奴！

……ラ・ヴァリエール公爵と公爵夫人が見とる。

「それでは、誕生会で！」

脱兎、それは逃げるウサギの様子。
明日まで生きていられるだろうか。

第三話（後書き）

前書きを書いてて悲しくなった。

何故だろう。

第四話（前書き）

これからどうしよう。

続きが……

第四話

召喚方法は、羽。

「チヨコボすげ〜」

《懐かしい名前だね〜》

《確かに懐かしいな〜》

暇だったから、カーバンクルとユニコーンを召喚してみた。

どんな攻撃も無効できて、死んでいなければどんな状態でも全回復。まあ、俺は死者も生き返らせることが出来るがな！！

両親にはフェニックスの魔石でも持たせとくかな？

羽の方がいいかな？

「ライナ君？」

「あいあい？」

カトウレア嬢やない、どないしたん？

「その子達は、ライナ君のお友達？」

「ん〜どっちかってゆうと仲間かな？」

《まあ、そうだね》

《僕は戦闘以外でも使えるけどね》

「まあ！喋れるお友達なのね！」

《僕、カーバンクルのカールってゆうんだ〜よろしく〜》

《僕は、ユニコーンのユニだよ》

「ご丁寧にどうも、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラ
ン・ド・ラ・ヴァリエールです」

《《長いね》》

あゝ蚊帳の外に出された。
ぐれてやるゝ

「ライナ君？」

《《あらら》》

なんか途中から楽しくなってきた。

俺の周りには、再生の剣、皆殺しの剣、乖離剣エアなどが転がっている。

なんか危ない気がしたから、使ったときの効果を変化しておいた。
魔力を込めると一度だけカーバングルのルビーの光が発動するようになった。

「ライナ君」

「うん？」

「私の部屋に遊びに来ませんか？」

もうすぐ誕生会じゃないのか？
どうでもいいか。

「別にいいよ」

《《マスターがんば！》》

《《僕たちはそろそろ帰りますね》》

「ああ、じゃあまたそのうち」

「ええ、また会いましょう」

創った剣？知らんな。
てか何を頑張るんだ？

カトレア（呼び捨てにするように言われた）の部屋に到着。
これが、アニマル王国。

「ふふ、皆私の友達だから大丈夫ですよ？」
「へ」

む、犬が撫でて欲しそうにこちらを見ている。

撫でる。

はたく。

無視する。

パルプンテ。

よし、パルプンテに――

（アホか！？）

もう少し遅ければ……しょうがない、撫でてやるか。

「かわいいな」（くつろいでんじゃねえよ、この野郎）

「ふふ、気に入られたみたいね」

（考えてることが違うぞ！？）

「あ、そろそろ行かないとやばいんでないの？」（あばよ！）

「あら？もうそんな時間なんですか……それじゃあ行きましょう」

「はいよ」（次はパルプンテを使ってやるんだから！撫でたいなんて思っていないんだからな！）

（御主の方がツンデレであろう、しかも危険だし）

誕生会に続く。

第四話（後書き）

擬人化しそう。

召喚獣が。

烈風のカリンと勝負させようかな？

…… 負ける方法が無い。

第五話（前書き）

勢いつけすぎた。

頑張って追いついて。

俺は追いつけなかった。

第五話

たりいゝ

第六話に続く。

（まだ終わらせるでない！？）

じゃあ、頑張る。

適当な所で、フルウゝトウを食べてる。

（無駄に発音がいいのう……）

いいのか？

あ、これうまい。

ゝ誕生会終了ゝ

（早！？）

特に何もありませんでした。

ずっと食べてるところでいいなら……

（遠慮する）

さいでつか。

「ライナ君」

「あいよゝ」

カトレアだ。
なんかいろいろ持つてる。
なんで？

「折角だから外でお散歩しましょう？」
「あいよ」

ああ、誕生日だっけ。
あれ？俺はプレゼントあげたっけ？

く散歩中く

「ライナ君」
「あいよ」
「私ね、何かの病気なの」

唐突だね。

「ふん」
「ライナ君なら……いえ、ごめんなさい、なんでもないわ」
そう言われると気になるのが人間だぜ？

「とりあえずこれ飲んどけ」

そう言つて、ポッケから一つのビンを取り出す。

「てれててつてエリックサ」

今ならどこでもドアが出せる気がする。

「えりくさー？」

「とにかく飲め、一気に飲め、もう何でもいいから飲め」
「う、うん」

カトレアがエリクサーを使った。

カトレアの体力、魔力、状態異常が完全回復した。
唐突だけど、ラーメンが食べたい。

「え？え？な、治った？」

「我がエリクサーに、治せぬもの無し！」

（スパロボOGのゼ。ガー！？）

斬艦刀創ろうかな。

「……あ、ありがとう、ライナ君！！」

「にゅふよわ！？」

カトレアが泣きながら抱きついてきた。

母や別荘のメイドさん達ぐらいにしか抱きつかれたことがないので
す。

別荘のメイドさん達は何故か皆20歳前後だった。

いやゝ前の世界では、女性がいることすら忘れてたからなゝ
意外と初心な私です。

（意外と余裕じゃな）

きーこーえーなーいーなー

「ライナ君！私お母様達に言ってくるね！」

「わたし……」

カトレアが屋敷に入っていった。
暇になった。
最近どうよ？

（まあ、大変じゃな）

なんかすごい大事になるまで、ロリさんと話していた。

第五話（後書き）

このままだと、どうしてもカリン様と戦闘になる。
勝ってしまう。

勝っちゃいけない筈なのに、勝ってしまう。

どうしよう。

第六話（前書き）

……もう少し強い気がする。
ま、いいか。

第六話

「貴方のおかげでカトレアの病気がなくなったわ……ありがとう」
「私からも礼を言おう……ありがとう」

お礼を言われた。

とりあえず、使い魔欲しい。

（毎回毎回思考が飛ぶのう）

「お礼が欲しくてやったわけではないのよね」

「そう？なら力づくでも受け取ってもらおうかしら？」

「？」

戦闘ですか？

「カリヌ・デジレ・ド・マイヤールが貴方に決闘を申し込むわ」

何故に？

お礼だよね？

お礼なんだよね？

誰かなんか言つてよ。

「ライナ……頑張れ」

「死なないようにね」

「ライナ・リユ・トルー君……諦めたまえ」

「ライナ君、頑張つて！」

「フンッ！」

（ま、御主なら負けんじやろ）

上から父、母、公爵、カトレア、エ、エ、エレ、エレノーレだ。
最後の人、誰？
あとおまけで神。

（扱いが酷いぞ……あと、エレオノールじゃ）

（決闘）

「烈風のカリン、参ります」

「……」（なんかカッコイイ）

（我がつけてやろう、そうだな、殲滅の絶対王者とか、最高の魔法使いとか）

「中二病ですか」

「？」

（やかましいわ！）

「行きますよ！」

竜巻出た竜巻。

バギクロスと同時に3つだと！？
なら俺は――

「マホカント」

（せこい！？）

勝ったもんがちっしょ？

目の前にA。フィールドのようなモノが出てくる。

「なっ！？くっ！」

竜巻増えたぞ？

「マヒヤド」

辺り一帯に吹雪が吹き荒れる。

竜巻凍った。

魔力込めすぎた。

反省はしていない、後悔もしていない。

（図々しい！？）

「ベギラマからのバギマ」

ベギラマの炎が、マヒヤドの氷を溶かす。

バギマの風が、解けた氷の水を吹き飛ばす。

（そこまで操作できたっけ？）

（気にしたら負けだぜ？）

巻き込まれた人達がいるであろう方に歩いていく。
なんて言われるんだろう。

第六話（後書き）

うん、ウチのライナ君化け物だ。

そのうちエルフと戦闘させてみようかな。

ストック切れてた。

更新が遅れるかも。

次回は、旅に出す予定。

第七話（前書き）

まだだ！まだ終わらんよ！

カリン様はリアルチートだと思う。

俺、頑張ったよ？

第七話

「ここまでの力とは……いえ、これは油断ね」

……何故だろう、死ぬ気でやらないと殺される気がする。

（我は、用事を思い出した）

安心しろ、汝と俺の痛覚を共有しておいた。

（何故に！？とゆうか何故そんなことができる！？）

自分も、勢いでやったから。

（……御主を転生させたのは、私の唯一の間違いだ）

……フツ、一緒に逝こうぜ？

（痛いのはイヤじゃああ！！！！）

「あつはつはつはつは！！！！」

「ツ！？なぜ笑っているの！」

……俺知らね。

（……私も関係無い）

ノッテみる？

（やってしまえ！）

許可が出たのでデカイの逝きまゝす。

（我のせいにする気が！？）

無視無視。

「さあ、楽しいショウを始めましょう？」

「……そう、なら一曲、踊ってもらいましょうか！！」

竜巻が……？？

多すぎやでえゝ

他にも見えない刃やらなんやらが飛んできてる。

ギガデインでどうにかなるか？

……無理だな。

ビックバン、ジゴスパーク、マダンテ、どれにするか。

あ、もう時間無いや。

どうする！どうする！？

ここの魔法使えば良いんじゃない？

どこまでできたっけ！？

とりあえず……やってみる！

「火火水風土プラスギガスラッシュの……エターナル・デッド・エ
ンド・ストライク！！」

（はいはい、中二病乙）

幼女が冷たい。

あらゆる魔法を消し去る、光の剣の魔法を振り回す。
微妙に矛盾してるが、気合で何とかなるのよね。

（よいぞ！その調子で勝ってしまえ！）

そんなに痛いのかなの？
ナイフが飛んできた。

「あ」

（あ）

掴み損ねた。
肩にナイフが刺さる。

「イッタアアアア！！！」

（ギニャアアアア！！！！）

痛みのにた打ち回っていると、何時の間にか横に来ていたカリン……
様がレイピアを突き付けていた。

「私の、勝ちね？」

普通ここまでするか？

忘れてるかもしれないけど、俺、10歳にもなってないよ？
カトレア嬢と同じ、7歳よ？

虐待反対！

「はい、負けです」

「では、お礼を受け取ってもらえますね？」

「はい……」

おかしいよね？

お礼なんだよね？

お礼がしたかったんだよね？

(いたいイタイ痛いいたいイタイ！！！)

(やかましいわ！)

(せめてナイフを抜くんじゃ！)

(しょうがねえくな)

肩に刺さってたナイフを抜く。

抜く際少し肩を挟ってみた。

(フイによハにやふよおおおお！！！)

楽しいが、俺も痛い。

「ベホマ」

全快だぜ！

(……………)

返事が無い、ただの屍の様だ。

「では、戻りましょうか？」

「……はい」

ちなみに今まで決闘？をしてたところは、外です。
平原です。

この御方に勝てる気がしない。

第七話（後書き）

カリン様には、勝つてはいけない気がしたんです。

ライナ君の使った中二魔法は、あくまで魔法が消せるだけですから。
殺す気でやれば……どうなるんだ？

てか、何時の間にかヘキサゴンになってる。

次回予告に失敗した。

次こそ旅に出します。

第八話（前書き）

脳内妄想フル活動。

まだ、いける！

第八話

俺は幼女と、旅に出る！

ピカ。ユユユ！

唐突過ぎるが旅に出た。

ここまでのあらすじを回想しよう。

お礼として、カトレア嬢を貰った。

何故？

カトレア嬢もすごい嬉しそうにニコニコしてた。

何故？

俺、逃げた。

今ここ。

俺のヒロインは幼女……は、遠慮しとく。

（何故じゃ！？我のどこが不満なんじゃ！？）

……存在？

（全否定！？）

いや、幼女は面白くていいや。

うん、俺幼女好き。

（それだけ聞くと、ロリコン発言に聞こえる）

もう、ロリコンでいいや。

（ダメじゃろ！？）

カトレア嬢、俺が逃げたときもニコニコしてたな
……いったん戻ろうかな？

（まあ、頑張れ、我は良く考えたら忙しい）

つまらん。

誰か新しいコンビ組んでくれないかな

あ、風韻竜。

しかも幼体か……怪我してる。

「大丈夫か？死んでるか？」

返事が無い。

「なんだ、ただの屍か」

スルーして歩き出す。

風韻竜の屍骸が輝いた。

「し……んで……ない、のね」

「人になった、最近の風韻竜はすごいな」

「うう……痛い、のね」

「ベホマベホマベホマベホマベホマ」

過剰回復。

「うう……い、たくないのね？」

「それはよかった」

うんうん、痛くないのは良いことだ。

「助かったのね！きゅいきゅい！」

「どういたしまして」

「イルククウ！」

「は？」

「私の名前なのね！イルククウ！！」

「あ、そう、俺はライナ・リ्यूートルー」

「ライナなのね！きゅい！」

抱きついてきた。

……こいつ、今、裸なんだよね。

テンパって無いよ？

「は、はは、ははは放せ！？」

「きゅい？」

明日に向かってダッシュする。

「待つのね！」

「くるなあああー！！」

俺はいつでも、クールなんだよ。

淡泊なんだよ。

無関心なんだよ。

だから――

「せめて服を着ろおおおおー！！！」

「そんなもの無いのね!」

父さん、母さん、旅の仲間が、出来ました。

第八話（後書き）

これで、タバサの使い魔フラグが立った！

頑張ったぜ！

……カトレア嬢どうしよう。

第九話（前書き）

イルククウもといシルフィードだっけ？が、仲間に！

使い魔生活……楽しみか？

第九話

イルククウと一緒に笑いのお笑いの頂点を目指すことにした。
カトレアに見つかった。
諦めることにした。

「何故、我が家にいる？」
「女の勘です」

これが噂の女の勘！
すげえぜ……

「……私では、ダメなのですか？」

目をウルウルさせながら言ってくる。
……もう、ロリコンでいいや。

「ダメなのね！」
「む、貴方は誰ですか？」
「イルククウなのね！」
「そうですか、貴方には関係無い、と思うのですが？」
「私は今、ライナと旅をしてるのね！きゅいきゅい！」
「……むう」
「……きゅい」

これが所謂、女の戦い。
何故戦っているかはわからんが。
とりあえず俺は、両親に旅に出る旨を伝えた。
母は、「気をつけてね？怪我しない様にね？」

父は、「ちゃんと帰ってくるんだぞ？わかったな？」
そう言ってた。

嬉しかったから、とゆうわけではないが、フェニックスの魔石の指輪を渡しておいた。

二人のところに戻ってみると……

「それじゃあ、ライナ君のこと、よろしくね？」
「わかったのね！きゅいきゅい！」

仲良くなってた。

何故？

「ライナ君……私、待ってるからね？」
「……あい」

カトレア嬢は、我が家の中に入っていった。

「……行くか？」
「きゅいきゅい！」

レッツゴー！

「あ、妾はイルククウちゃんも入れて最大で5人までだから！」

……アンタは本妻か？
カトレア嬢、病が無くなってから、自由に生きてるな……
むしろ、崩壊してる気がする。
性格とか。

（原作とかな）

あ、久しぶりの幼女だ。

（暇を作った、仕事中に呼び出されたらかなわんからな）

……ホントは一緒にいたかったんだろ？

（……さあ、な）

なんかカッコイイ。

さて、行きますかね。

第九話（後書き）

幼女書いてて楽しい。

……俺はロリコンではない。

第十話（前書き）

ご都合主義が……

カトレア嬢と同じ年設定だったから、原作開始時には24歳じゃないとダメかなと思って。

あ、お構いなく。

第十話

24歳になった。

飛びすぎかな？

ちよつとあらずじ回想。

ガリア王国領内に侵入。

シャルロット・エレーヌ・オルレアンことシャルと仲良くなった。

ハシバミ草が好きらしい。

その母は、シャルを溺愛していた。

娘は可愛い、娘最高！とか言ってるさだったので、逃走。

今どうなってるか知らない。

ド・モンモランシ家領内に侵入。

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ
とモンシーにハイポーションとハイエーテルの作り方を教えた。

モンシーの母親が、俺を殺そうとしてきた。

体にいくつか穴をあけられた。

とても痛かった。

怖いので、明日に向かって走り出した。

これ、人は逃亡という。

ツエルプストー家領内に侵入。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエル
プストーことキュルが、男で遊んだ。

キュルが老公爵と無理矢理結婚させられるところを間違って邪魔し
てしまった。

なんか、もう、いろいろ燃やされかけた。

領外に走り出した。

グラモン伯爵家領内に侵入。
ガラス職人としていけるかと練習していたら、弟子入りしようとしてきた。

グラモン家総出で。

ドラクエシリーズの？から？までの勇者とその仲間達をいろいろな鉱物を使って完全再現したのがいけないのか？

それとも、ヴァル。リー。プロ。アイルの主人公勢をいろいろな鉱物を使って完全再現したのがいけないのか？

俺としては、イセリア・クイーンの完全版が最高傑作。

もちろん逃げた。

アルビオン王国サウスゴータ地方、ウエストウッド村に侵入。

ティファニア・ウエストウッドことティアとイルククウが仲良くなつた。

マチルダ・オブ・サウスゴータことマチさんは、ティアのことを大事にしてるようで、よく追いかけられた。

一番平和な場所だった。

それでも俺は、旅に出る。

デルフリンガーを買った。

意外と面白い奴だった。

一緒に旅をすることになった。

トリスティン王国領内に侵入。

アンリエッタ・ド・トリスティンことアンリにお菓子を作った。

アンリに懐かれた。

アニエス・シュヴァリエ・ド・ミランことアニーに撃たれたり、斬られたり、された。

死ぬかと思った。

またまた、逃走。

アルビオン王国領内に侵入。
ウェールズ・テューダーことウェー君にアンリの事を聞かれまくった。

ジェームズ1世はティアに何か関係があるようだ。
ウェー君がうざいから、また逃亡。

ビダーシャルとゆうエルフに会った。
戦った。

和解した。

良い奴だった。

先住魔法？とゆうのを教わった。

またいつか会おうと約束して別れた。

ロマリア皇国領内に侵入。

ジュリオ・チェザーレことジュオと殴り合いをすることになった。
スーパーサイヤ人化してフルボッコにしてやった。

……初めてのスーパーサイヤ人化がこれって、しょぼ。
何か言われる前に逃げた。

王都トリスタニアのチクトンネ街にある大衆酒場兼宿場「魅惑の妖精」亭で休憩。

ジェシカは良い娘だった。

偶然居合わせたシエスタとゆう子も良い娘だった。

スカロンさんは、うん、遅しかった。

滅茶苦茶気に入られてしまった。

全力で逃げた。

タルブ村で佐々木^{ささき たけお} 武雄と出会った。

地球から来たらしい。

俺とイルククウとデルフリンガーのテンションについてこれなかったようだ。

そのうちまた来ると約束した。

ラ・ヴァリエール領内に侵入。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールことル。ー。ジ……。間違えた。

ルイちゃんに魔法を教えてみた。

ラ・ヴァリエール公爵が吹き飛んだ。

そして、カリィヌ・デジレ・ド・マイヤールことカリン様に殺されかけ……。殺された。

何故かラ・ヴァリエール公爵も一緒に殺された。

公爵と一緒にフェニックスの羽で生き返った。

死ぬ気で逃げた。

カトレア嬢は、偶然いなかったらしい。

……。意外とすきかってしたな。

後悔も反省もしないがな！

「ん？鏡？」

現在一人と一匹と一本で空の旅をしている。

真っ直ぐ行った所に鏡っぽいのが浮いていた。

『あゝアレは使い魔召喚だ』

「へー……。イルククウ、わかってるな？」

「きゅいきゅい！」

『マジか……。』

「突っ込めえ！！！」

「きゅい！」

そして俺達、一人と一匹と一本は召喚された。
幼女のツツコミが無いのが寂しい。

第十話（後書き）

幼女分が足りない。

文字が多い。

無理矢理フラグ。

この数のフラグを実際に立てるとなると……時間がかかる！

もう、使い魔になって良いよね？

第十一話（前書き）

やっと思い魔だああああああああああああ！！！！！！！！！！

……
続きが思いつかん。

第十一話

おふう。

人いっぱい。

ルイちゃんだ。

それにシャルも。

あとキュルじゃん。

おお、モンシーまでいる！

あ、グラモンの少年もいた。

知り合いが結構いるな。

とりあえず……

「よばれました」

「……よんだ」

おお、シャルが俺のご主人様かな？

契約ごときで俺を縛れると思うなよ！

ルールブレイカー
破戒すべき全ての苺で契約破棄しちゃうぞ♪

（少し落ち着け）

だって、久しぶりの人だぜ！

いやっほおおおお！！！！

（……いったん無視しよう）

・
・
・
・

・
・
・

・

「サイト君やサイト君や」

「あ、ライナさん」

ひらが平賀 さいと才人とどうやって知り合ったか？

安心しろ。

しっかりと回想してやる。

↓その後の回想↓

シャルと契約した。

なかなかぷりぷりしていた。

使い魔契約だよ？

他に意味は無いよ？

人がいるときはタバサと呼ぶことになった。

イルククウをシルフィードと呼ぶことになった。

ルイちゃんが、サイト君を召喚した。

サイト君にデルフリンガーをあげた。

デルフリンガーも満更でもない様だ。

キュルが俺の事を狙っているようだ。

燃やされない様にしないと。

モンシーがまた、薬の作り方を教えて欲しいと言ってきた。

……年齢作用薬でも教えてやるか。

グラモン少年ことギーシュ・ド・グラモンことギー少年。

弟子入りしようとしてきた。

面倒なので、ヴァルキ。ー・プロファ。ルのヴァルキリーを透明度と純度の高いミスリルで創ってやった。感動していた。

創ったヴァルキリーは回収しておいた。

ハゲ……ジャン・コルベールさんにいろいろ言われた。
コルさんや……そう焦りなさんな。

トリステイン魔法学院の学院長のオスマン。

俺は狸と呼ぶことにした。

エロ狸と、な。

マチさんもといてロングビルが、俺を追いかけてきた。

全力で逃げた。

結局捕まった。

狭過ぎるぞ、この学院。

ホントの名前は隠すように言われた。

P S ・ マルトーさんの料理、美味過ぎる!!

(ス。エエエク!!!)

く回想終了く

「とまあこんな感じだ」

「何のことですか?」

「気にしない気にしない」

脳内駄々漏れじゃないよな？

（何時ものことじゃろ？）

そういばそうか。

第十一話（後書き）

基本ライナ君に勝てる相手がいない。

カリン様？

抵抗していいとでも？

第十二話（前書き）

エルシャダイネタをやりたい。

あとがきでやってみようと思う。

第十二話

決闘だつてさ。

サイト君が、シエスタを庇ってギー少年と決闘だつて。
サイト君、手が早すぎるよ（笑）。

（笑いながら考えるな、変態）

幼女に突っ込まれる俺。
だがそこが良い！

（ホントに変態になつてる！？）

さて、幼女との絡み合いもほどほどにして、サイト君を探さないと
な。

「お、いたいた……サイトくん」

「あ、ライナさん！」

シエスタと一緒に何してんだ？

……ああ、性欲をもてあましてたのね。

「ごめん、空気読めなくて」

「？何のことですか？」

「気にすんな」

まあ、邪魔しちゃったものはしょうがない。
サイト君からは、リア中の香りがする。
まだ未発達のリア中の香りだ。

将来ハーレムを築くかもしれない。

「決闘だつて？」

「そうです！ライナさんからも言ってください！」

「大丈夫だよ？」

「え？」

なんでサイト君まで驚いてんだよ？

自分から挑んだんだろ？

「デルフリンガー、たしかサイト君の使い魔のルーンって……」

『おう、お前の考えてる通りだよ』

「なら大丈夫だ」

「何の、話ですか？」

「良いからとつと行つて来い……バシルーラ」

「うお!？」

サイト君、星にな……らない。

「な、何してるんですか!？」

「まあまあ……あ」

「え？」

シエスタの後ろを指差す。

シエスタが振り返る。

「何もないじゃないですか……あれ？」

俺、いない。

・
・
・

サイト君TUEEEE。

まあ、一般人としてはだけど。

あの程度なら、魔法無し、身体強化無し、の左手一本で十分だな。
あ、俺右利き。

「ライナさん！俺勝ちましたよ！」

「よかったね」

ずいぶんと興奮してるな。

エロゲーだったらこのあと、エロシーンだろうか？

……想像するんじゃないかった。

（何故わざわざサイトとギーシュをくつつけた？）

なんとなく。

「し、師匠」

弟子にした覚えはない。

が、面白そうなので弟子にしてやる。

モンシーも弟子みたいなもんだし。

「明日の早朝、外に集合な？」

「……は、はい！」

嬉しそうにしゃがって。

「ライナさんって……強いのか？」

『ああ、次元が違う』

「ふーん、でも、メイジってやつだろ？」

『相棒……そんなだと痛い目見るぞ？』

「そうかな……そういえば、バシルーラってドラクエじゃなかったっけ？」

聞こえない様に話してるんだろっけど……

ま、いいか。

それとライナ君、調子に乗りすぎだぞ？

あと、そのとおりだ。

その後。

サイト君がルイちゃんに怒られて、お仕置きされていた。

第十二話（後書き）

「サイト君……そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ！」

『問題ない！』

（二人で一人！？）

「一人と一本は一人なんだよ、幼女」

「幼女って、誰ですか？」

「俺の夫」

「え？」

（せめて妻に……）

「奴等に殺された、だから……オットノカタキヲトルノデス！」

（それがしたかっただけかい！）

……うん。

これ、本編に、出したらダメ、だよな？

第十三話（前書き）

意外と厳しい、ライナ君。

ギー少年、魔改造計画。

青銅のギーシュ…×

蒼銀のギーシュ…○。

第十三話

ギー少年のゴーレムをアイアンクローで粉碎した。
泣かれた。

アドバイスしてやることにした。

「青銅のゴーレム、むいてないよ」
「……」

メツチャ落ち込んでる。
気にしないことにした。

「銀で創れ」

「え？……まだ、そこまで操れないんですけど……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……死ぬ覚悟はしておけよ？」

「……はい」

銀を操れるくらいにはしてやるか。

「……ずるい」

なにがずるいんだ、シャルよ。

「私も……鍛えて」

「ふむ……いいだろう、で？他に用事があるんだろう？」

なんかそわそわしてる様に見える……気がする様な、気がしない様な。

「母様のことで……」

ん？

あの親バカがどうした？

・
・
・

・
・
・

・

……俺にどうしろと？

万能薬でも渡すか？

どこにしまってたっけ？

自分の影に手を突っ込む。

「！？……それ、何？」

「ん？影の倉庫だけ……お、あつたあつた、ほれ」

「……これは？」

「万能薬、それを飲ませれば、治る筈」

「ホント！？」

おいおい、近いよ。

キスするぞ？

……離れてください。

「落ち着け……とりあえず、行くか？」

「?……どうやって?」

首を傾げる姿が可愛い。

マスコットキャラとしての幼女のポジションが無くなるな。

(我はマスコットだったのか!?)

あとツッコミ。

ツッコミをなくしたら……ごめん、俺の口からはとても……

(存在を消される!!絶対に消えたくない!)

じゃあ、ツッコミ頑張れ。

(……はめられたのか、我は……)

人生そんなもんだ。

この幼女との会話は、約3秒。

(みじか!?)

お前に、それ以上の価値があるとでも?

とにかく無視だ。

進まん。

念話強制終了。

「じゃあ、行くぞ」

「?」

とりあえず手を掴む。

あら、可愛い。

「ルーラ」

ガリア王国に飛んでみた。

……犯罪？

知らない。

・

・

・

「おかあ義母さん！俺に娘さんをくだ、グッ！？」

「おかあ義母さんなんて呼ばないで！」

「おま、酷くね？」

いきなり蹴るなんて……俺なんかした？

「シャルロット！」

「お、お母様……」

「いいの、いいのよ、また、昔みたいにお母さんって言っても」

「……お母さん！！」

「ごめんなさい、ごめんなさいね、辛かったよね？苦しかったよね？寂しかったよね？」

親子の感動のご対面。

俺空気。

そういえば使い魔になったこと言わないと。

「なあ、おかあ義母さん」

「義母^{おかあ}さん言うな！」

「俺、シャルの使い魔になったんだ！」

「死ね」

「あぶな！？」

首落とす気で攻撃してきたぞ！？

「使い魔ということは……キス、したんでしょ？」

「……」

「どうだった？」

「……最高でした」

「じゃあ、死になさい！！」

「シャル！逃げるぞ！」

「……行って来ます」

「待てこのクソ虫！！行ってらっしゃい」

俺とシャルで態度が違う！？

「娘は貰っていくぜ！ルーラ！」

……俺、悪役になってない？

（……頑張れ）

……頑張る。

・
・
・
・
・

夜。

「酷いのね！私も行きたかったのね！」

「すまん！存在を忘れてた！」

「酷過ぎるのね！！」

「我慢する」

「おねえさま〜うう……」

そういえばこいつと旅してたんだっけ？

最近ド忘れが激しくてさ。

「しょうがない奴だ、ほら、お前の好きな霜降り肉だ」

「ライナ大好きなのね！きゅいきゅい！」

変わり身の早い奴だ。

「シャルもなんか食うか？よかつたら作るぞ？」

コレでも料理の腕には自信がある。

マルトーの旦那の料理には、勝てると思わんがな。

「ハシバミ草」

「よし、ならサラダとかでいいか！」

意外と楽しい使い魔生活だ。

ただ、鈍るな。

全力が出したい。

第十三話（後書き）

シャルの母が、おかしい。

でも、いいよね？

二次創作だし！

「その原作を、ぶち壊す！」

（どうした？）

「いや、言わなきゃいけないと思って……」

（そう、か……まあ、頑張れ）

「……うん」

第十四話（前書き）

今回は、マチさん回。

ぶっ壊れた。

原作の面影が完全にない気がする。

でも、いいよね？

それが目的だし！

第十四話

マチさんが、何かの計画を練っているらしい。
聞いてみることにした。

マチさんの部屋に到着。

問答無用で扉を開けて中に入る。

「マチ…… ロングビルさん」

「ノックぐらいしてください……ん？ああ、ライナか……今は誰も
いないから好きに呼んで良いよ」

「そう……で？何かするの？」

「……やっぱアンタには、隠せないか」

意外と信用されてる？

追っかけられるのに？

「ここの宝物庫にある破壊の杖を、ね」

「破壊の杖？」

なんかいいな。

……欲しいなんて思ってたないよ？

「……手伝ったりしないかい？」

「すぐ行こう」

「え？」

俺はマチさんの手をとって、創ったオリジナル魔法を使った。

「水水風風とルーラで……風の送り道」

景色が歪んだと思ったら、すでに宝物庫内にいた。

マチさんは、戸惑っている。

俺は破壊の杖を探す。

「は？」

「どれだあ？」

「え？」

「お、コレじゃね？」

「あ、ああ、それだけど……」

「あゝなんだ、いらね」

ロケランかよ。

確かに破壊できるけど。

俺、スナイパーライフル派なんだよ。

「……価値はあるのかい？」

「ん？ いや、使い捨てだし……売ったとしても、そのあと売った相手に追われるだけじゃない？」

「そうか……」

マチさんが落ち込んでる。

ティアや子供達の為だろうなあゝ

「とりあえず戻ろうか？……はい！一名さまごあんなあゝい！」

手を叩いて言う。

マチさんの部屋にいた。

「ホント、反則よね」

「それが俺のアイデンティティ！」

……俺って、反則？

（バグじゃろ）

黙れ口リ。

（何故に！？）

マチさんになんかあげるかな……マチさん受け取ってくれないんだ
よなあ）

むう……どうしよう？

「そろそろ帰った方が良いんじゃないか？」

「そうだな、じゃ！」

よし、決めた！

マチさんの部屋を出て、ネズミを捕まえる。

さて、行くかね？

・
・
・

現在、外で使い魔評定会について話中。

「ライナー！！」

「ん？マ、ロンビルさん」

「ワザとだろ!？」

「よくわかったな!」

「そんなどうでもいい事はいいんだよ!」

どうしても、いい……そんな。

酷いと思いませんか!

(しらん……もう少し、寝かせてくれ)

神だろ?

寝るな。

(せめて、あと五分)

しょうがねえくな

あと五分だぞ?

(飼いならされてる、自分がいる……)

で?なんだつけ?

ああ、マチさんか。

でも、隣にルイちゃんとサイト君とシエスタがいるから気をつけな
いとな。

三人とも空気を読んで三人で話してるけど。

ルイちゃんも成長したな。

昔は、誰と話していようと乱入してきたのに……これが、子の成長、
か。

「あんた、なんで泣いてんの?」

「何故?泣くのに理由がいるのか?」

「まあ、お前のことだから大した事じゃないだろ」

酷え……

「それより！お前だろ！オスマン学園長に私の給料上げさせたの！」

「そうだけど」

「しらはつくれるんじゃない？……今なんて言った？」

「そうだけど」

「……理由は？」

理由？

……気紛れ？

違う……俺らしい理由……そうだ！

「暇つぶしだな」

「……」

何故睨むし。

睨み返してみた。

「ッ！？」

何故びびるし。

失礼しちゃうわ。

……その三人、何故離れる？

「と、とにかく！そんな嘘が通用するだけでも？」

「あ、やっぱ分かる？」

「隠す気、ないのね……」

隠す気はないが、ホントのことを言う気はない。
それが、俺だ。

「はぁ……ま、礼は言っておくわ、ありがとう」

「……それはよかった」

頭に手を置いて撫でる。

「……何してんだい？」

……ここは撫でが希望。

（現実には、そこまで甘くないんだよ）

世知辛いね……

俺は今、風になる！

いつものように逃走。

「待てえや、このドアホオオオ！！」

唐突だけど、今回の使い魔評定会にアンリが来るらしい。
自重、した方がいいかな？

「逃げんなぁぁぁぁ！！！」

よし決めた！

全力全開でやる。

俺も使い魔も呼ぶか。

あ、俺の使い魔20歳頃に召喚したんだぁ〜かわいいんだぜ？
使い魔評定会、楽しみだなぁ〜

「一発殴らせろおお!!」

はしたないぞ、マチさん。

走って追いかけてくるマチさんの顔は……赤かった。
走りつかれたんだろか？

(……お前は、そのままでもいいと思うぞ)

第十四話（後書き）

ライナ君の使い魔は竜の予定。

デカイヤツ。

モンスターを狩るゲームのラオシャ。ンとか。

あんな感じの。

ダメ？

よかったら、なんか参考になりそうな教えてくださいな。

竜以外のもデカければ何でも良いです。

できれば竜で。

第十五話（前書き）

ライナ君の使い魔、合計4体。

今回2体出ます。

戦闘あります。

一瞬で終わるけど。

第十五話

使い魔評定会。

滞りなく順調に進んでいった。

そして、最後のルイちゃんとサイト君のみとなった。

なんだか不評の様だ。

ククク、俺が花を添えてやろう！

「サイト君！」

「え！？ライナさん！？」

「ライナ兄様！？」

「なんでライナ兄さんがこの学園に！？」

「逃げる」

「きゅい！」

「いきなりなんなの！？」

「師匠！？」

「どうしてこのタイミングで！？」

「あ、あのバカなにする気だ！？」

上から俺、サイト君、ルイちゃん、アンリ、シャル、イルククウ、キユル、ギー少年、モンシー、マチさん。

とりあえず、すぐに逃げたアンリ、シャル、イルククウ、モンシー、マチさん……正解だ！

「いでよ！真竜改！」

俺の右の頭上に巨大な魔方陣が現れる。

その魔方陣からアドバンス版FFVの神竜・改を真つ黒にした邪竜が現れる。

「現れよ！ミラージュ！」

左の頭上にも巨大な魔方陣が現れる。

出てきたのは、モン狩りのミラルーツを二倍し、純白色にした聖竜が現れる。

「サイト君！君の全力全開！見せてみる！」

邪竜の黒いオーラと聖竜の白いオーラが反発しあい空間が歪む。
このままだと大変な事になる気がする。

「……デル公」

『……なんだ、相棒』

「死ぬ、のかな？」

『………あいつなら、大丈夫な、はずだ』

「……ルイズ！」

「な、なによ！」

「骨があつたら……拾ってくれ！行くぞ！デル公！！」

『分かったぜ！相棒！！』

なんか、主人公してんなあゝ

羨ましい。

（御主には、それが御似合いじゃ）

俺にはあと、二体使い魔がいる。

この意味、分かるかな？

（御主を転生させたの、やっぱり間違いじゃな）

まずはサイト君！
君の命、貰いよう！

（殺す気満々！？）

名乗り上げるかな？
意外とカッコイイのつけてもらった。
なるべく悪役っぽく！

「さあ！終焉のライナ！それが、お前の最後に聞く名だ！その身に……刻め……！」
「うおおおおお……！」

どうやって收拾しよう。

（自業自得じゃな）

・
・
・

普通にボッコした。

真竜改ことシンとミラージュが、つまらなそうにしていた。
霜降り肉をあげて、今度相手してやる約束をして帰ってもらった。
帰った先は、俺の創った世界、とゆうより固有結界？だけど。

そして、怒られた。

（当たり前じゃろ？）

俺なんか悪いことしたあゝ

（反省の色が無いな）

俺、悪くねえゝゝ

さて、みんなの説教は無視して、空に舞い上がる。
ギリギリ大気圏内で停止。

（人間やめとるのお）

お前が俺をこうしたんだ。
責任……とってね？

（ヤじゃ）

ガキみてえゝなこと言ってんじゃねえゝよ！

（どこのヤンキー！？）

さて、暇だ。

世界征服でもしようか。

（出来そうだから怖い）

そつだ！水の精霊の所に行こう！
学園？

すぐ戻るからどうでもいい。

（説教されるのがいやなだけじゃろ？）

ダマレ♪

お尻ペンペンするぞ！

……セクハラだからやめとく。

(……こちらに来れる事前提じゃな)

行つて欲しい？

(水の精霊の所に行くんじやろ！)

あ、そうだった。

よし、いくか！

急降下。

風が痛い。

燃える。

・
・
・

アンドバリの指輪取られたらしい。

バカじゃねえの？

「バカ」

『グウ……気付かなかったのだから仕方あるまい！』

「うるせバカ」

『か、必ず取り戻す！だからやめろ！』

「黙れバカ」

『うう……私だつてな、私だつて……』

全身水で出来た、見た目だけ美人？が泣いてる。
あの涙……何の水だ？

「まあ、しょうがないか、で？どうやって取り戻すんだ？」
『ああ、湖の水を増やして……イタ！？なにをする！？』

バカな事を言つたので、殴っておいた。
何故殴れるか？

殴る瞬間、痛覚だけ追加してるだけだが？

（普通は、それが出来ないんじゃないかな……）

幼女ちよつと黙ろつか？

（……了解した）

うん、いい子だ。

「おい、バカ」

『……』

「俺が、どつかのバカの代わりに取り返してきてやる」

『本当か！』

「その代わり！」

『な、なんだ？』

「これからバカと呼ぶ」

『！？』

「じゃあな！」

飛びます！

……シャルが呼んでる気がする！

『待つてくれ！お願いだああ！！』

幼女の次に面白いヤツだ。

またからかいに来よう。

（鬼じゃな）

人それを、外道と言う。

（自分で悪くした！？）

幼女がツッコミ

シャルが呼んでる

そして俺は、飛んでいる

第十五話（後書き）

幼女と水の精霊書いてて楽しいわ。

幼女可愛いよ幼女。

水の精霊萌えゝ

……頭おかしいな。

第十六話（前書き）

北花壇騎士団としての仕事編。

幼女つながりでエルザを出したかった。

外伝の幼女。

きつとツツコミになる。

断言できる。

第十六話

「呼ばれて飛び出てライナくん!!」
(ネタが古い!?)

とりあえず、ドアを蹴破ってシャルの前に立つ。
ドアは、手を振れば元に戻ります。
すごいだろ?

「仕事」

「仕事?.....ああ!北花壇騎士団か!」
「そう.....一緒に、行ってくれる?」

相変わらず首を傾げる姿が可愛いな。
本格的に貰おうかな。

「別にいいよ」

(軽くないか?)

重いよりましだろ?

(.....確かにな)

幼女も納得したし、ルーラ使うか。

「ほい」

シャルに手を差し出す。
近ければ大丈夫だけど、あの手、柔らかいんだよ。

ハアハアハア！

（変態だ！？変態がいるぞ！！）

冗談はさておき。

（冗談……なのか？）

「イルククウはどこだ？それとも、いらない子か？」
「外にいる」

シャルが、俺の手を掴みながら言う。

おいてっちゃダメ？

……ダメだよねえ」

シャルをお姫様抱っこする。

（唐突過ぎる！？）

ピッタリだろ？

シャル、一応王族だし。

窓から外に出る。

ここまで、お互い無言。

心なしか、シャルの顔が赤い気がする。

「二人で何をしてるのね！」

ナニをしてるって言っちゃダメ？

(いろんな意味でダメじゃろ?)

ですよ〜

「お姫様を抱っこする勇者ごっこ」

「なんか楽しそうなのね!」

「……」

あ、シャルの顔が一瞬嬉しそうになった。

俺は、知っている。

シャルが幼い頃から読んでた、「イーヴァルディの勇者」の様に勇者に助けられる囚われのお姫様に憧れている事を。

まあ、本人から聞いたんだがな。

期待した目で、「勇者になつて!」と言われた時の事は良く覚えて
いる。

無理だ、と言った後の失望した目と溜息の方が記憶に根付いている
が。

あれ、目から心の汗が……しょっぱい。

・
・
・
・

「久しぶり!」

「……誰だ?」

「だろうね」

現在俺は、ガリア王国の国王、ジョゼフ1世と話している。

シエフィールドが、俺を殺そうと動く。

なんで名前知ってるか?

幼女に教えてもらった。

（干渉したことになるのか？干渉は禁止されているのに……）

今言うことじゃないと思うけど、シャルとイルククウは、おかあ義母さんに会いに行った。

（おかあ義母さんって言うな！）

……俺には、何も聞こえなかった。

「まあ、まあ」

「……はい」

「で、何用だ？」

「シャルの……あ、シャルロットなの？父親から手紙を預かってんだよ」

「なんだと！？」

そんな睨まんといてえなあ

どこに仕舞ったわけ？

次元に穴を開けて探す。

「貴方、何者？」

おお、シェフィールドが話かけてくれた。
少し嬉しい。

「今は、しがない使い魔だよ……お、これこれ」

次元の穴から手を抜いて、一通の手紙を取り出す。

次元の穴は、自動で修復された。
今更だけど、俺、おかしくない？
いや、おかしくないな。

（いやいや、おかしいからな？）

気にすんな。

俺は、手紙を投げて渡す。

「……」

この手紙、何時渡してくれとか言われてないんだよねえ
まあ、俺は、あの人そんなに信用できないからなあ
いろいろやつてるし、本心隠すんだもん。

「じゃあ、しっかり渡したからな？」

踵を返して出て行く。

マント欲しい。

バサア！ってやりたい。

「タバサ……いや、シャルロットに伝言を頼めないか？」

「……ヤダ」

「何故だ？」

怒ってるわけではない様だ、ホントに疑問なのだろう。

「シャルは、そこまで弱い子じゃない……シャルは必ず、あんたの
前に立つよ……せめて、その時まで、悪役でもしてろ」

「……そう、か……分かった、その時になったら、自分で伝えよう」

「ああ……あ、シャルの母親は、もう元に戻したから干渉すんなよ？じゃあな」

とつととルーラで、シャルの所に行く。

最後にジョセフが、「お前ホントに何者だああ！！！」と言つていた気がする。

意外と明るい奴だな。

さすがシャルの伯父さんだ。

・

・

・

「どこ行つてたの？」

「シャルの知り合いの所」

「そう……危ない事しないで」

あらま、誰の所に行ったか分かったみたいだ。

でも、俺にとって危ない所は、母と付く種族のいる所なんだがな。

「了解、マイ・マスター」

そついえば仕事ってなんなんだ？

第十六話（後書き）

ジョセフぶっ壊してやったぜ！

自重？何それ？美味しいの？

第二の幼女、待ってるよおおお！！

……俺自重。

原作とかキャラクターとか以前に俺がぶっ壊れてる。

気のせいだよね？

気のせいだって言ってるよお！！

「お前はもう、壊れている」

（ネタ乙）

「折角の出番じゃん……コレからなくなるんだから」

（ボソリとすごいこと言っただな！？）

「ほら、もうすぐ幼女出るし……体の出る幼女」

（しょうがないだろ！？幼女幼女言われてるけど一応神だぞ！？えらいんだぞ！？）

「へーすごいねえーえらいえらい」

（すごいめんどくさそう！）

「折角だから次回予告言ってみよう！」

(む、むう……しよぅがあるまい)

「新たな幼女！幼女、出番が取られる！幼女、世界の中心で出番を欲する！の三本です」

(幼女が多い！？しかも私の出番が！！)

「では、また次回！See you again」

(英語の発音がさらに良くなってる！？)

俺はこれからも、ぶっ壊れ続ける。

第十七話（前書き）

ご都合主義。翼人編……一話かからなかったな。

ライナ君頑張って。

第十七話

「それじゃあ、義母^{おかあ}さん、ペルルン、行って来ます」

「とりあえず死んで来い」

「ペルスランです」

シャルの母が酷い。

あと執事。

どこぞの借金執事並みの能力にしてやった。
結構強いぜ？

「早くする」

「ライナ遅いのね！」

俺の扱いが酷くなることに――

・
・
・
・
・

意義あり！

（遅い！）

ここまで来るのに一時間。
溜めてました。

「それで？仕事の内容はなんなんだ？」

「ゲルマニアとの国境近くにあるエギンハイム村に出た、翼人討伐」

「へー翼人？」

「知らないの？」

「いや、知ってる……知り合いに翼人いるから気になってな」
「そう……」

それは、誰？とか聞いてくんないの

寂しいわ

ライナは、寂しいと、世界を壊しちゃうんだあ

（規模が違いすぎるわ！せめてウサギぐらいにせんか！）

ライナは、寂しいと、神と一緒に、死んじゃうんだあ

（巻き添え食らった！？）

もういいや。

ご苦労。

（……憎いが、嫌いになれんな）

ありがとう。

「きゅいきゅい！」

「もうすぐ着く」

「了解」

討伐だろ？

辺り一面焦土に変えてやんよ！

（やめんか！）

・
・
・

「とりあえず、連れて来た」

「は、離してください！」

幼女の要望で、亀甲縛り。

（我はそんな事言っていない！？）

みんな、そう言うんだよ。
村の住人が集まって来た。

「翼人だ……」

「今すぐ殺せ！」

「気をつけろ！なにをしてくるか分からないぞ！」

めんどくさいな。

「アイーシャ！」

「ヨシア！」

アイボ？ヨ。シー？知り合いか？

「やめてください！彼女は、何もしてません！」

「だってさ」

「……好きにして良い」

マジで？

はあ……久しぶりに悪役になりますかね？

「何もしていない、か……そうだな、なら村人達はどうか？このまま生かしておいて良いか？」

「そんなの決まってる！」

「殺せ！」

「そうだ！殺せ！」

だるいぜ。

村人が、どんどん詰め寄ってくる。

アイーシャと呼ばれた翼人の少女は、恐怖で顔が青くなっている。

「皆、やめてくれ！」

そんな中、ヨシアと呼ばれた少年が立ち塞がる。

「ああ、そうだ一つ言って置く事がある」

そう俺が言つと、村人がこちらを向く。

「その少女を殺した後の事は、一切責任を持たない」

「？当たり前だろ？」

「何言つてんだ？」

それは、思うだけで口にしてはいけないんだよ。
へこむぞ？

「つまり、翼人が報復に来て、助けないという事だ」
「な！？」

「ふ、ふざけんな！」

「なんだ？報復されるのが怖いのか？良いじゃないか、一人を集団で囲めば怖くないんだろ？」

「そ、それは……」

「こ、こっちは依頼してんだぞ！」

殺し……足りない。

（言い換えられてないぞ）

うつせ。

「そうだった！翼人討伐が依頼だったな！よし、殺すか」
『え？』

俺の手に、ギロチンの刃が現れる。
そのギロチンの刃を振り上げる。

「ま、待てえ！？」

「やめろおおお！！！」

「きゃあああ！！！」

ため息一つ。

「はぁ……止めるぐらいなら、共存してろ」

ギロチンの刃を消す。

「争うな、共存しろ、それが嫌なら……戦争でもしてろ……行こうか、シャル」

「ん」

コレでダメなら、本気で消すか。

・
・
・
・

あの村に居辛くなったので、ガリア南東の片田舎と噂のサビエラ村に来了。

仕事の事で、タバサは特に何も言わない。

過ぎた事は気にしない事にする。

宿が無いので、村長宅。

「何も無い村ですが、どうぞごゆっくり」

「ありがとう」

「感謝するのね！」

「御苦労！」

誰が誰だか分かるよな？

（最後がお前だ）

さて、寝るか。

（無視か！？聞いというて無視か！？）

はいはい、強制遮断。

ん？気配が……

「……お兄ちゃん、誰？」
「幼女、だと!？」

5歳ほどの金髪の美少女。
よし、お持ち帰りだ。

「お兄ちゃんと一緒に来れば、良い物をあげよう!」
「ホント?」
「うんうん、あ、でも、吸血鬼にとっての良い物ってなんだ?」

幼女が啞然としてる。
なんだ?は!?!まさか、連れて行こうとしたのがばれた!?

「な、なんで吸血鬼だって……」
「見ただけで分かるだろ?」
「そんなの同じ吸血鬼だけよ!」
「え?じゃあ、俺は、吸血鬼?」
「私が見る限り……違うわ」
「それはよかった……一緒にお笑いしようぜ!」
「会話してくれない!？」

良い感じだ。

コレは、脳内幼女と違った楽しみが……

「とりあえず寝ようか?」
「何なの貴方!？」
「魔眼王、悪魔王、ライナ、好きに呼ぶと良い!」
「ま、魔眼!?!あ、悪魔!?!」

ちよーたのしーなー

とりあえず、吸血鬼封じの魔法を込めた縄で、縛って一緒に寝た。
中々眠らないので、ラリホーを使って強制睡眠させた。
明日が楽しみだ。

第十七話（後書き）

エルザいいわ。

可愛いよエルザ。

（我の出番がああああ！！！！）

「以上、幼女の魂の叫びでした」

（せめて後書き位はかまっても良いんじゃないかな！？）

「次回、後書きの出番もピンチ！？幼女、後書きに降臨！幼女VSエルザ！どうなる次回！」

（本編の次回予告が無い！？しかも我の出番がさらにやばいことに！？）

「ま、頑張れや……主人公でよかたわあ」

（薄情者！）

「ま、援護ぐらいはしてやるよ」

（お、お主……）

「ツッコミは、幼女の方が上だ」

（とりあえず死ね）

「一気に冷めたな！？」

（絶対に、出番は、やらん！！）

俺幼女派。

皆は、幼女派？

それとも、エルザ派？

第十八話（前書き）

現在前書きは、幼女召喚の儀式中。

（なんじゃコレ？）

「ほら、前回言っただろ？降臨するって」

（本気だったのか！？）

「俺も、限界に挑戦してみる！」

（出来た場合、お主を人間とは認めない！！）

第十八話

吸血鬼幼女と一緒に起床。

シャルに何度も頭を叩かれた。

結構痛い。

イルククウが何も言わない。

なんだ？俺なんかした？

現在俺、シャル、イルククウ（今更だけど、人版ね）、村長、吸血鬼幼女の五人で食事中。
ちなみに、俺が作った。

「そういえばさ……名前聞いてないや」

「今更！？」

「ああ、俺はライナ・リユートルー」

「……タバサ」

「イルククウなのね」

「え、あ、エルザ、です」

「じゃあ、エリザベスって呼ぶな」

「長くなってる！？そういうあだ名って短くするものじゃないの！？」

これは、いい。

ツッコミが冴えてる。

「俺と一緒に来ない？あ、間違えた……僕と契約して、魔法少女になつてよ！」

（やめんか！！）

「今ならおまけで、一つだけ願い事がかなうぜ？」

シャルとイルククウと村長は、傍観者になってる。
村長は、放任主義なのか？

（いやいや、本人が望むなら的な感じだろ？）

なるほど。

「……なら、お父さんとお母さんを生き返らして！」

「……」

「……きゅい」

「エルザ……」

「別に良いけど？」

「……は？」

「まあ、さすがに肉体が無いなら魂を留めとく位だがな」

俺に出来ないことは、基本無い。

（なんで、こんなになって、しまったんじゃろうな……）

お・ま・え・の・せ・い・だ♪

（……）

そろそろ再起動するかな？

「ほ、ホントに！？」

「おう、待ってるよ……偏在を応用して……水水水水風とザオラルとザオリクと賢者の石の……魂の蒐集！」

輪廻転生の輪から無理矢理連れてくる。

俺の目の前に、拳サイズの光が二つ。

「うむ、成功だ」

（……何故出来るし）

《ここは、いった……》

《……エルザ？》

「……お母さん？お父さん？」

再会なう。

眩しかったので、光を御守りの袋に入れた。

《ちよつと！？》

《エルザア！！》

「ああ！何すんのよ！！」

「いや、眩しかったんで、つい……」

周りの視線が痛い。

俺、悪くなくね？

とりあえず、御守りをエルザに渡す。

あと、紙とネックレスを渡す。

「？コレ何？」

「言っただろ？魔法少女になつてくれと……」

「本気だったの！？」

「願いは叶えただろ？その紙に使い方が書いてある」

リリカルな魔砲少女のデバイスのものだよ。

デバイスではない。

的なものだ。

これで、今日からエルザも魔法少女だ！

でも、エルザがくると……幼女のアイデンティティが……ま、いいか。

（よくない！よくないぞ！！）

・

・

・

エルザを誘拐した。

つまり、学園に連れて来た。

「なんで私、ここにいるの？」

「……」

「なんで連れて来たのね！」

「ツツコミが欲しかったただけけど？」

「……あんたなんか嫌いよ！」

「……馬鹿」

「ライナのアホ！！」

俺、なんかした？
くれるぞ？

（あ——）

幼女は喋らなくていいや。
カットカット。

「さて、暇だ」

三人が引き籠もってしまったので、外に行く。
引き籠もった場所は、俺の部屋。

・
・
・
・

数日外で寝ることになった。
だが、意外と気持ち良い。
シャルはキュルと一緒に出かけていった。

ん？ルイちゃんとサイト君？
どっか行くのかな？
着いてくか。

・
・
・
・

で、何故城？
アンリに会いに来たのか？
あ、謁見してる。
なんかしたのか？

（お主がいないうちに何かあつたんだろ？）

……あ、そう言えば……粉砕とかゆう二ツ名持ちが学園に来たらしいな。

サイト君が倒したとか何とか。
おや？何時の間にか、アンリがサイト君に手を差し出してる。

ああ、手の甲にキスをするやつね。

サイト君が手を取って……口にキスしたぞあの子。
バカなの？アホなの？死ぬの？

ウェー君に言っておくか。

あ、アンリが気絶した。

うわ！ルイちゃん！そっちには曲がないよ！

ああ……ルイちゃんもあの人の娘か……容赦ねえ！
うっわ！折れてるよね？関節が逆だよ？

「ライナ？何故ここにいる！？」

やっべ！アニーに見つかった！？

・
・
・

・
・

・

なんとかアニーから逃げ切った。

アニーは何故俺を追いかけるのだろうか？

そして、何故ルイちゃんは平民に化ける？

そのままつけてみた。

・
・
・

・
・

・

噴水で、ロープを着て待機中。

ルイちゃんが、騙された。

お金、全部カジノで使っちゃって……サイト君合流。

何か話してるようだけど……何故だろう、ここにいるとすごい嫌な

予感がする。

ん？あ、あれは！？

「テレビアーン！」

ノータイムでダッシュする。

「まあ、待ちなさいな♪」

「離せえ！！」

「ライナさん！？」

「ライナ兄様！？」

バレタか！

だが、そんなこと気にしてられない！
逃げなくては！

「うつぶん♪久しぶりね♪ライナちゃん♪」
「ギヤアアアアアアアアア！！！！！！」

……穢された。

第十八話（後書き）

「いよっしゃ！成功だぜ！」

「……死んだら、神にでもなるか？」

「あなた誰？」

「む……我は神じゃ！名を――」

「幼女」

「違うわ！」

「可愛いなあゝ幼女最高」

「うっさいわ！ロリコンが！」

「……あなたとは仲良くなれそうにないわ」

「嫌われてやんの」

「お前のせいじゃろ！？」

「ほゝら、高い高い」

「おろさんかああ……！」

「……幼女好きのライナのばかああ……！」

「……え？俺が悪いの？」

「た、高い所なんて嬉しくないからな……勘違いするでないぞ……！」

「いや、俺何も言っていないし」

頑張って原作っぽくしてみる。
全部ぶっ壊すけど。

第十九話（前書き）

ぶつ壊す。
その原作。
ぶつ壊す。

第十九話

魅惑の妖精亭に連れて来られた。
現在俺から魂抜けてる。

「あーライナさん！」

「……」

「……ああ、いつものか」

ここに居た時、よくこの状態になっていたから、この店の子達には理解されている。
それでも、戻らない俺がいる。

（再起動したらどうじゃ？）

だけど、起きたら……スカロンさんが……

（起きないと……大変だぞ？）

え？

な、なんか服を脱がされてる様な……
目を開けてみる。

そこには、店員の女の子達が……

「……皆さんなにをしていらっしゃるの？」
『あ……』

あ……じゃねえよ。
何してんだよ。

俺、パンツだけにされてるよ。

ちなみにトランクスだ！（キリッ）

「で、そちらの子の持つてるフリフリの付いたドレスは誰用のかな？」

「え、あ、その、だ、誰のかなあ？」

「……その化粧品は？」

「い、いや、もうちよつと化粧しようかなあ」と……ねえ？」

「そ、そうそう！」

「やっぱりこういう仕事していると気になっちゃって！」

「……その女物の下着と偽乳は？」

「……」

「つまり、教育……いや、狂育が必要かな？」

『すいませんでしたああああ！！！！』

「素直でよろしい」

この女子達は、俺なんかの女装を見て楽しいのか？

勘弁してくれ。

「いいじゃないのお、ちよつとぐらい手伝ってく・れ・て・も」

「ホント、真面目にやめてくださいよ、スカロンさん」

「いつも言ってるでしょ！スカロンさんじゃなくて、ミ・マドモワゼルって、よ・ん・で」

「キモイ」

「即答！？もういいわ！皆！やっておしまい！」

『はい！ミ・マドモワゼル！』

「ちょ！？やめ……こんなサービスシーン要らないだろ！？何考えてんだ！？ぎゃああああ！！！！」

……

・
・
・

伝勇伝のフェリス・エリスです。

金髪碧眼で女神と見まごう美貌を持っています。

ホントはライナです。

旅の途中で磨いた（強制）変身魔法による、ビフォーアフター。
変身魔法なんで、胸も本物ですよ。

「やっぱり……綺麗」

「美しいです……ライナさん、いえ、フェリス様……」

この子達、目がハートなんだが。

百合か？百合なのか？

……意外と百合も大丈夫な俺がいる。

「本当に……ライナ、さん？」

「今は、フェリスだ」

「ライナ、兄様……大きい」

「……何が大きいかは、聞かないよ」

もう、なりきってやんよ！

かかってこいやあああ！！

「フェリスちゃん♪コレを三番テーブルお願いするわ♪」

「やっぱり無理です！」

「いいから、行きなさい！」

人が、視線が、俺に……私に、集まって、ふあ……えへへへ。

（壊れたな）

「脳内は笑っているだけなので、幼女から視点です」

「注文の品は、以上でいいか？」

「え、あ、はい！大丈夫です！」

「そうか、では、ごゆっくり」

ライナもといフェリスは、その客に興味を無くしたかのように去っていく。

客の方は、フェリスの美貌とそのツンツン？した態度が気に入ったのか、ものすごく興奮している。

「さすがフェリス様！掴みはばっちりですね！」

「そうか？自分では分からないが……お前が言うなら、そうなのだろうな」

「フェリス様……」

話し掛けている女の子と見ている女の子は、顔が赤くなり、少し潤んだ目でフェリスを見ていた。

「なあ、ルイズ」

「……」

「おいってば」

「……」

「ルイズ！」

「！？な、なによ！？」

「……見とれてた？」

「そ、そんなわけ無いでしょ!!」
「……まあ、いいけどさ」

そんな会話をしつつ、二人とも顔が赤くなっていて、フェリスのこ
とをガン見していた。
と、そんな感じで仕事をしていると……貴族がやってきた。

「これはこれは、チュレン又様! ようこそ御出で下さいました!」
「だいぶ繁盛しておるようだな」

面倒なのでカット。

文句があるのか?

我は神だぞ?

「おいこら! 女王陛下の徴税官に酌をする者はおらんのかあ!」

そう言った矢先、二人の店員が近付く。

二人は、空の酒瓶を持っていた。

「頭に響く、少し黙ってる」

「フェリス御姉しゃまの言うとおりりよ! ヒック!」

ルイズの呂律が回ってないな。

そしてフェリス、ホントに酔っ払ってるのか?

「今、五本目を飲んでるんだ、邪魔をするなら、殺すぞ?」

「しょうだしょうだ! ヒック!」

「なんだ貴様らは! ? ん? ? ほう……よし、お前! 私に酌をしろ!」

「ああ?」

ああ、死んだな。

南無。

……神が言っでは、いけないか？

「フ、フフフ……私に、命令……するなあああ！！！」

フェリスの手には、何時の間にか御馴染みの剣が握られていた。その剣で、手当たりしだい切り裂く。

「いいじょ！もつとはれ！」

「ちょ！？フェリスちゃん！？止まって！やりすぎやりすぎ！」

「お、お前達！早く私を助ける！」

貴族が、机の下に隠れて部下に命令する。

部下が魔法を放つが、それすら切り裂く。

「ルイズ」

「ふあゝい！このしゅじょうら、みゃにへいりやりゆりゃ！」

何言ってるかわからんが、王宮の書状を見せる。

以降は、原作通り。

で、その後。

くライナ復活く

……俺は、なにをしていたんだろう。

何も、思い出せ無い。

気付いたら、店が切り刻まれてた。

よく分からないが、魔法で直しておいた。

「さすがに、無理させすぎたみたいね……ごめんね？」

「ホントごめんね」

『すいませんでした』

そんなこと言われても、よく分からない。

ホントに、何も思い出せないんだ。

それと、今始めてジェシカの声を聞いた気がする。

（まあ、いろいろあったんだよ）

そう、か……あ、ルイちゃんとサイト君は、今どこに？

（二階でイチャイチャしてる）

そう、か……学園に帰るかな。

（まあ、ゆっくり休め）

そうする。

とぼとぼ学園に向けて、歩き出した。

その背中が、とても……疲れ切っていた。
ちなみに、変身魔法といってません。

第十九話（後書き）

ライナ君……（涙）

どうして、こうなっちゃたのかな？

ごめんよ。

「元氣百倍！」

「アン。ンマン！」

「やめんか！」

「こうでもしなきゃやってらんねえぜえ！ヒヤッハー！」

「そうよそうよ！私なんて出番どころか、名前すら出ないのよ！汚物は消毒よおお！！！」

「辛いのは分かるが、そのネタはやめい！」

「ピ。リカ・ピリ。ラ？」

「ポポ。ラ・ペーペ。ト？」

「いい加減にせんか！しかも息ピッタリ！？そして古いわ！」

「そんなこと言われてもおゝ」

「わかんないっていうかあゝ」

「もういいわ！次回！あのロリコン紳士が現れる！？サイト、一般人？に弟子入り！？ウェールズの！サイト暗殺計画♪……どうなるんじゃ！？」

「さあ？」

「知らないけど？」

「もう喋らなくていいわ！」

「サーセンwww（笑）」

「笑うなあああ！！！」

第二十話（前書き）

ワルド哀れ。

ウェー君激怒中。

サイト君ピンチ！

どうなるかな？

第二十話

学園に帰ってきた。

ここに来るまで、人攫いやら、賊どもに三十七回襲撃された。全力で、10分の9殺しにしてやった。

それはともかく、部屋に向かう。

その際、俺を見つけた生徒がストーキングしてくる。
なんだ？

（気付けよ）

何にだよ？

まあ、いいか。

部屋の扉を開ける。

エルザがいた。

「誰！？」

「は？俺だよ、オレオレ」

（オレオレ詐欺になってるぞ）

「あんたみたいな美人知らないわ！！」

美人って……

「いくらなんでもその冗談は酷いぞ？」

「冗談じゃないから！」

「はあ……もういいや、ルイちゃんとサイト君は馬車だろうから、もう着いてるかな？」

エルザとの無駄な会話を打ち切り、ルイちゃんの部屋に向かう。

まだ何か言っていたが、タバサに習ったサイレントをかけておいた。

（鈍感以前にバカじゃろ？）

・
・
・
・

・
・

・

「何故アンリがいる？」

「えっと……誰ですか？」

「ライナさん……いつまでその格好なんですか？」

「ん？何時も通りだろ？」

「……」

『気にしちやいけねえぜ、相棒』

「フェリス姉様……」

「ライナ……姉さん？」

皆してなんだ？

おかしいぞ？

（おかしいのは、お前の頭だ）

・
・
・
・

・
・

・

くショートカットで、お送りいたしますく

アンリのお遣いで、アルビオン王国に行く事になった。

暇なので、着いて行く事にした。

なんとなく、剣縛りで戦う事にした。

ルイちゃんの婚約者の笑顔なワールドが仲間になった。

なんとなしにロリコンと言ったら、笑顔の引き攣ったワールドになった。

面白かったので、ロリコンと呼び続ける事に。

ルイちゃんと一緒に、グリフォンで先に行こうとしたので、俺は、空気を蹴って着いて行く。

町に着くまで、ロリコンを連呼した。

楽しかったとだけ言うておく。

町に着いて寝ていたら、何時の間にかサイト君とロリコンが決闘していた。

あと、タバサとイルククウとキュルとギー少年もいた。

タバサに叩かれた。

そういえば俺、使い魔だったよ。

サイト君が当然の様にボロ負け。

まあ、デルフリンガーの力を使ってないなら当然じゃね？

サイト君が弟子にしてくれと言ってきた。

ルーラ使って逃げた。

剣縛り？

そんなのしらねえよ。

で、現在ウエー君と会話中。

（ショートカット終了）

「で、その後サイト君がアンリにキスしたんだよ」

「からかおうとしてます？どうせ手の甲に、でしょ？」

「いや、口にだけど？」
「よし、そいつ殺そう」

ウェー君も、始めてあつた時より随分アンリラブになったな。
あれ？今なんて言つてた？
ごめん、聞いてなかった。

「ところで、なんで女体化してるんですか？」
「……え？」
「……気付いてませんでした？」
「……うん」

そっか……どおりでここに来るまで、賊に襲われたわけだ。
五十二回。
絶望が何か教えてやった。

「とりあえず、僕はその男を歓迎黄暗殺する準備があるので……失礼しま
す」
「ああ、頑張れよ」

王族の鏡だな！
……なんだろう、サイト君の命が危ない気がする。

（サイト！逃げろおお！！）

・
・
・
・

「ルイちゃん及びロリコン到着！」

「なんている！？それといい加減やめてくれ！視線が痛い！」

「あれ？サイト君達は？」

「無視！？無視なのかい！？」

ロリコンうるさい。

「少し黙ってロリコン」

「酷くないか！？」

こいつのせいで、幼女がツツコメないじゃないか！

（こいつ仲間にしない？）

……幼女……そんなに、ロリコンがいいのか？

ごめんよ、気付いてあげられなくて。

（え、あの、何の話？）

変態好きは、治せるから。

ゆっくり治してこうな？

（いやいやいやいや、変態好きじゃないから！勘違いするでないわ
ー！！）

うん、そうだね……大丈夫、分かるよ。

（なんか優しい！？やめてくれない！）

あ、ウェー君。

（スルーですか！畜生め！！）

「ようこそ…… サイトとゆう使い魔はどこに？」

「こ、これはウェールズ様！こんな所にまで御出迎えありがとうございます……」

「そうか…… もう少し準備できそうだな…… まあ、城の方に部屋を用意しておいたから寛いでいてくれ」

「は、はい！」

そう言うと、ウェー君は城に戻って行つた。

サイト君の生存率が、下がっている気がする。
ま、いいか。

寝よ。

第二十話（後書き）

「偶にはツッコミじゃなくボケをするぞ！」

「バッチコイ！」

「暇な時つて、新しい世界を創りたくなるよねえ」

「あゝ分かる分かる」

「……そんで、星と星をぶつけて消滅させたり」

「うん、やるやる」

「……」

「で、言っただよね……星がゴミの様——」

「ボケらないから！？ツッコマざるえないじゃん！？」

「だがしかし！オレのターンドロ——」

「何故に！？」

「ふ、オレの勝ちだ」

「何に勝つの！？」

「幼女のボケを生贄に！いでよ！キング・オブ・ドリームランド夢の王国の王様！」

「僕、。ツキーだよ！」

「何故出したああああ！！！」

「皆で一緒に歌おう！」

「オッケイ！ミッキ。ウスミッキ。ウス」

「ミッキミッキ。ウス！」

「どこから出て来たエルザ！？」

「ミッキ。ウスミッキ。ウスミッキミッキ。ウス！」

「なんだその、お前と一緒に歌うまで続けるみたいな目は！？」

「ミッキ。ウスミッキ。ウスミッキミッキ。ウス！」

「やめる……そんな目で我を見るなああああ！！！」

「ミッキ。ウスミッキ。ウスミッキミッキ。ウス！」

「……」

「ミッキ。ウスミッキ。ウスミッキミッキ。ウス！」

「もうやけくそじゃああああ!!!!」

『ミツキ。ウスミツキ。ウスミツキミツキ。ウス!皆で一緒に!ミツキミツキ。ウス!!!』

ツッコミ不在の為、作者による次回予告。

サイト、命の危機。

ワルド、消えぬ汚名。

ウェールズ、永遠の愛。

後書きが混沌としてきた。

楽しいからいいか。

なんか怖いので、伏字に変更。

第二十一話（前書き）

ワルド、間違えた、ロリコンはギャグキャラ。
また出すつもり。

だって、楽しいんだもの。
エルザが薄くなってきた。

第二十一話

ルイちゃんとロリコンが、結婚式をやるらしい。

ウェー君が司会？神父？役をやるらしかっただけど……毒やら何やらを掻き集めるので忙しいらしい。

というわけで……

「俺が神父です……まさかの真正のロリコンだったか」

「違うから!？」

「催眠術までかけてまだ言っか」

「気付いてんのかよ!」

なんなんだこいつ？

頭おかしいのか？

（お前がな）

「……止めなくていいのかい？」

「？」

「……もういい」

首を傾げたただけなのに、なんだよ？

俺なんかした？

（何もしないのが原因だろうに）

「えゝ誓いの、あれ？始祖ブリミル？ん？なんて言えばいいんだっけ？」

「……永遠の愛を誓いますか？でいいんじゃないのかな？」

（面倒だからカットしたか）

「なるほど……お、主人公のご到着」

「なんの――」

ロリコンが言い終わる前に、扉が勢いよく開けられる。
そこから現れたのは、サイト君。

「ルイズウウウウ！――！」

演出の為、空気中の水分を凍らせてキラキラさせてみた。
ルイちゃんの催眠術が解けたのか、いきなり振り返る。

「サイト！」

「残念だったなロリコン」

「……もう、諦めたよ…… ウェールズもないし、君が目の前にいる…… ああ、運が無いな」

なんか、悲しい奴だな。

とりあえず……

「アンドバリの指輪回収」

柱の陰に隠れていた…… 痩せ男からアンドバリの指輪を奪い取る。
ついでに鳩尾に十八回、拳を叩きつけておいた。

「あゝ降参」

ロリコンが、手を上げる。
が――

「俺の辞書に…… 降参の二文字は、無い！」

「それはあんたの辞書だろ！？」

顔を思いつきりぶん殴った。
きりもみ回転しながら地面落ちる。

「反射的に殴ってしまった……まあ、ロリコンだからいいか」
「い、や……よく、ないだ、ろ……ぐふう」

ルイちゃんとサイト君が、イチヤイチャしてる。

（あの二人も、慣れてしまったか……）

・
・
・
・
・

城内にて、ウェー君に説明中。

「そうだったのか……あ、サイト殿だけは飲んでいいですよ」
そう言つて、ウェー君がサイト君に紅茶を差し出す。
少し紫色になつてゐるね。

「……なんか怖いんでやめときます」
「そうかい………チッ」
「今、俺舌打ちされた!？」

仲が良くて何よりだ。

（お前の目は節穴か？）
「さて、サイト殿処刑の件ですが……」

「「え？」」

「あ、すいません、間違えました……ワルド殿とオリヴァー・クロムウェルですね」

ん？なんか言った？

紅茶、意外と刺激が強くてうまいぜ？
ピリピリする。

「……さすがライナさん、ドラゴンが一滴で死ぬ毒薬を一瓶入れてある紅茶を平気で飲むなんて」

「……俺に飲むように勧めてなかった？」

「あんた、ウエールズ様に何かした？」

折角だし、後でロリコンにももって行ってやるか。

（ワルドオオオ！！）

「難しい話は、任せた！あと、廊下に配置する兵の数多くね？」

「この部屋に賊がいるかも知れませんか！」

「なるほど」

「あ、アンリエッタに言って下さい！君を汚す者は、全て消すと！」
「了解」

それだけ聞いたなら、リレミトで城外へ。

シャルとイルククウとキュルとギー少年に出会った。

「……」

「痛い！？無言で叩くなよ！」

「きゅい！」

「なんだよお前ら！？」

シャルが、何故か怒っていて、杖で叩いてくる。
イルククウもドラゴン状態で、俺の服を引っ張ったりする。
俺がなにをした！？

「あんた達……仲良いわね？」

「師匠！御活躍聞きました！流石です！」

一気に騒がしくなった。

まあ、悪くないな。

・
・
・

・
・

・

「……………飲めと？」

牢屋の中で、啜り泣きが響いた。

第二十一話（後書き）

「ワルドは飲んでないぞ？」

「ロリコンがどうした？」

「なんでもない」

「そうか」

「私の出番が減ってるんですけど！」

「エルザは、もともと居ない筈何だからしょうがなくなる？」

「納得できない！」

「べつに、よいでは、ないか……プツ」

「今笑ったなあ……！」

「お前はそのままフレームアウトしてればよいではないか？」

「自分が出てくるからって……許さない！」

「フツ、神である我に挑むか、いいだろう！一瞬で蹴散らしてやるわあ……！」

「……次回、サイト君の、アイ・キャン・フライ！……二人とも、良い感じになってきたな」

「神如きがぁ……消え失せろぉ……！」

「滅せよ！吸血鬼……！」

「そつえば、外にいた時にサイト君の悲鳴が聞こえたんだよ……なんだっただろうね？」

「さあ？偶然賊と間違えられたとかじゃないですか？」

「なるほど、まあ、とりあえず」

「……また次回で……！」

「……シネエエエエ……！」

第二十二話（前書き）

「俺今日の後書きお休みね」

「は？主人公が出ないでどうするんだ？」

「助っ人呼んでおいた！三名ほど！じゃあな！」

「あ、おい！……誰が来るんだ？」

第二十二話

水の精霊に指輪返還。

「ほら、拾え」

地面に投げ捨てる。

『……………』

無言で拾う水の精霊。

（ドSか）

ツッコム少女。

……幼女って久しぶりに言った。

「今度は盗まれんなよ、バカ？」

『分かった、分かったから、やめてくれ』

「しょうがないな、じゃあ、アホ」

『くそう』

水の精霊ってさ、実はドM？

（お主のせいだな）

反省はしないよ。

楽しいから。

「じゃあな、マヌケ」

『……またな』

（許してやればよかるうに……）

あいつの為にならないだろ？（笑）

（笑いながら言われても……）

・

・

・

「……」

「ぐはあ！？」

帰ったらシャルが問答無用で殴ってきた。
ひでえぜ。

「怒るなよ……ほら、昔みたいに抱っこしてやるから」

「……」

「げふう！？」

喉に食い込んだぞ！？

何すんだよ！？

「シャルなんか嫌いだ！バーカバーカ！」

（子供か！）

サイト君に八つ当たりしてやる！

・
・
・

学園外で、黄昏てるサイト君発見。

「サイト君！」

「え？ライナさ、ぐべ！？」

右ストレートをほっぺに挟り込ませる。

しっかり捻りを加えておいた。

良い感じに飛んでった。

「……いきなり何するんですかぁ！？」

「安心したまえ、ただの八つ当たりだ」

「……うう、ウェールズさんにも何故か殺されかけるし……俺がなにをした！」

「多分だが、そっちは自業自得だ」

ウェー君はサイト君を殺したかったんだ。

驚きの新事実！

（……驚きか？）

とりあえず……

「エター。ル・フ。ース・ブリザー。！！」

「何故ライナさんがそれを——」

俺を中心に膨大な冷気が溢れる。

寒い。

学園外が、氷河期に入った。

サイト君？

マンモスの様に凍っている。

……帰る。

・

・

・

シエスタの故郷、タルブ村に行く事になった。

武ツチ元気かな？

あれ？まだ生きてるよね？

ん？サイト君？

そんな人いたっけ？

冗談冗談（笑）。

ホントは、サイト君とシエスタが二人だけで行こうとしてたんだよ。

「使い魔が御主人様の傍を離れるのは、いかなものかと」

「ライナさんにだけは言われたくない」

「ライナさんは自由な方ですから」

二人とも失礼だぞ？

俺がいつ、御主人様の傍を離れたと？

なんか忘れてる気が……

「……あ、シャルおいてきた」

ま、いいか。

で、何の話だっけ？

(……面倒だから飛ばせ)

いいの？

わかった。

ちなみに、俺は今、魔女の様に杖に乗っている。

コレはコレで、意外と楽しいんだぜ？

・

・

・

シャルに殴られた。

グーで。

痛いっす。

村にある洞窟でルイちゃん、シャル、キュル、ギー少年、モンシー、ハゲ……コルさんと合流した。

シャルが怖くなってきた。

肩車してみた。

大人しくなった。

「ライナさん、楽しそうだな」

「ライナさんですから」

「ライナ兄様……」

「……あんたら仲良いわね」

「なるほど、そういう行動も紳士として……」

「頭ぶつからない？」

「足元には気をつけるんですよ？」

賑やかだな。

お、出口だ。

・
・
・

羽、折っちゃった♪

「ライナさあああん！！！」

「なんてことを！？」

『うわあ…………』

サイト君とコルさんがうざい。

そして皆、なんだそのやっちゃったよこいつみたいな声は。

「俺は悪くない！信じてくれよ！」

「羽の上でジャンプしてれば折れるの分かるでしょ！！！」

「…………てへ♪」

「てへ♪…………じゃねえええええ！！！」

面倒だ。

いったん切ろうと思う。

「では、また次回♪」

「反省しろよ！」

「反省はしない！だが後悔はしている！」

「バカやろおおおお！！！」

サイト君が殴りかかって来た。
いいだろう！

その熱意！

俺が鎮火してやる。

「もっと、もっと熱くなれよおお！！！」

俺の髪が逆立ち、金髪になる。

つまり、スーパー野菜人化。

さあ、地獄行こうか？

第二十二話（後書き）

サイト君は鎮火されました。
当たり前だろ？

そして、スーパー野菜人。
サイヤ人だとダメかなと。

「ライナ君の正妻、カトレアです」

「アイーシャと」

「ヨシアです」

「ああ、お前達か」

「正妻って何の話？」

「貴族として生活してた時のを参考にしてくださいね」

「説明する気は無いのな」

「ヨシア大好き」

「僕も好きだよ」

「黙ってるリア充」

「ええ！？」

「む？」

「ん？」

「あら？」

「……次回予告だ」

「戦争なんか片手で終わり」

「次はライナ君も一緒よ」

第二十三話（前書き）

ハッチャケた。

反省も後悔もしていない。

アニメで言うところ第一期終了？

第二期頑張ります！

第二十三話

戦争するらしい。

トリステイン王国にレコン・キスタが宣戦布告したからだ。

……なんか違う気がする。

（お前のせいだな）

なるほど。

つまり、乱入ですね？

（さて、何分持つことやら……）

「では！行つてきまゝす」

「……どこに？」

「どっか行くのね？」

「ちよつとそこまで」

（散歩か何かか）

・
・
・
・

平原っぽい所で、睨み合つてる様だ。

折角なので、使い魔を呼ぶことにする。

両軍の中心の上空で、使い魔を呼び出す。

「来い！ラピス！」

真下の地面に巨大な魔方陣が現れる。

いきなりの事で、両軍が共に困惑する。

まあ、次の瞬間には驚愕及び恐怖の感情が優先されるだろう。

魔方阵から出て来たのは、モンスターを狩るゲーム略してモン狩りのラヴィエンテで、二倍した様な巨体とルビーカラーの美しい色合いをしている。

「ククク……俺の前に出たこと、死んで後悔するがいい！」

（お前が来たんだろ）

「ラピス！滅ぼせ」

(どこの魔王だ)

幼女は無視して、ラピスが殲滅にかかる。

その巨大な体を使って蹂躞する。

両軍を。

「あ……まあ、いいか」

(いいの！？)

「ンッ！……クク、アーハッハッハッハ！！さあ！絶望しろ！その絶望が俺の糧となる！」

（あくまでやりきるのな……）

「あ、アンリだ」

手を振ってる。

手を振り返した。

手をクロスして、バツにしてくる。

何かをやめて欲しい。

風を操って、この平原一帯に自分とアンリの声を聞こえる様にする。

「ライナ兄さん！やめてください！やりすぎです！」

「え、戦争だろ？俺の知識では、戦争はどちらかが消滅するまで続

くものだ！」

「消滅！？せめて全滅にしてください！」

「それだと、ヌルイじゃない？戦争だろ？そのぐらいの覚悟でやれよ」

「それには一理ありますけど！せめてどちらか片方を攻撃してください！」

「……………」

「なんで何も言ってくれないんですか！？」

「あ、ごめん、あやとりしてた」

「このタイミングで？」

「ん？ああ！今日の晩飯、ステーキじゃん！」

「会話を……会話をしてください……」

「ごめん、爆音がうるさくて……ラピスちょっと止まれ！」

ラピスが暴れるのをやめて、丸く蹲る。

めんどくさそうに見上げてる。

反抗的だな……だがそこがいい。

よく見ると、トリステインの方は三割、レコン・キスタの方は五割程無くなってる。

「で、何か用だった？」

「……出来れば帰って欲しいです」

「却下、ラピス、暴れていいぞ」

「ごめんなさい！嘘です！だからやめてください！」

「どうした？あ！分かったぞ！」

「分かってくれましたか！」

「俺にも戦えと言っんだな！」

「あれ！？違った！？」

「いいだろう！その挑戦！受けて立つ！」

「全軍撤退！！！」

もアンリエッタに手を出したら殺すって……俺、なんかしたのかな？」

（不憫な、主人公になったな）

そうか？

ルイちゃんとも良い感じになってきたし、シエスタとも仲良いみたいだし……

「よ！良い男！」

「どこが！？不幸の手紙みたいな貰ってんですよ！？」

（……今、ライナに分かりやすい好意を持っているのは、カトレア、シャルロット、イルククウ、マチルダ、クソ吸血鬼だ）

クソ吸血鬼って、エルザのことか？……お前ら会ったことすらないだろ？

（む？確かに……だが、本能的に嫌いなんじゃない）

なるほど、でも……

「そこが良いんだろ？」

「どこが良いんですか！？」

……ああ！そういえばサイト君と会話中だっけ！
まあ、いいか。
サイト君だし。

「折角だから、鍛えてあげるよ！」

「……………え？」

「頑張って……避け続ける」

第二十三話（後書き）

「だが、コレも夢だった……」

「変な後付いらんから!？」

「そのほうが楽しいだろ？それにここは後書きだ!」

「うつさいわ!」

「二人は仲良いのね」

「クソ吸血鬼ってどういうことよ!」

「ヨシア」

「アイーシャ」

「そういえば、ライナはなんでこの前いなかったんだ？」

「うん、寝てた」

「二人ともどうしましょうか」

「削ぎ落とす」

「むしろ挟る」

「私はミンチにするかな」

「笑顔が怖いよ」次回、なんか記念にやってみようとして、死
なない為にも……逃げる！アデュー!」

第一回・なんの記念？（前書き）

反省はしている、後悔はしていない。

見ても見なくても大丈夫。

楽しむだけ楽しんで。

名前は頭文字で表示。

第一回・なんの記念？

ラ「俺、参じよ——」

よ「黙れ」

ラ「冷たくね？まあいいや！とりあえず記念っぽいものやってみます！」

よ「何の記念なんじゃ？」

ラ「ん？ほら、アニメで言うところの第一期が終わったから」

よ「こういう記念って、人気が出たらやるものなんじゃないのか？」

ラ「あゝ確かに、他の人達は人気だったからとか、人気投票とかだな」

よ「なら何故？」

ラ「ウチの作者バカだから」

よ「……酷くないか？」

ラ「ホントのことだろ？」

よ「……答えかねる」

ラ「それが答えだ……とまあ、どうでもいい作者の事は置いといて、なにしょ？」

よ「ゲストでも呼んだらよいのでは？」

ラ「来てくれるか？」

よ「エルザとか」

ラ「水の精霊も呼ぼう」

エ「ここどこ？」

み「水が無いぞ？」

ラ「帰れ」

よ「うむ、帰れ」

エ「呼んどいて！？」

み「……最近、理不尽な事を言われるのに、快感を覚えてきた」
ラ「もうダメだな」

よ「もうダメじゃな」

エ「変態ね」

み「……その言葉、いい」

ラ「よし、無視しよう」

よ「そうじゃな、無視しよう」

エ「分かった、無視するわ」

ラ「で、呼んだのはいいけど、どうする？」

よ「しりとりでもするか？」

エ「何の記念なの？」

ラ「気にすんな、おい水、お前も参加な」

み「了解した」

ラ「俺からな、パイルバンカー」

よ「いきなり意味不明だぞ……神」

エ「そんなに神を意識したいの？水」

み「そこは、私の台詞じゃ……頭脳」

ラ「普通だな、ウーパールーパー」

よ「何故に？パイ」

エ「いきなり普通になったわね……椅子」

み「寿司」

ラ「雫」

よ「熊」

エ「鞠」

み「リス」

ラ「墨」

よ「幹」

エ「肝」

み「もずく」

ラ「空気読めよ……屑」

よ「一文字であろうに……砂」

エ「そんなんだから変態なのよ……波」

み「他に無いんだからしょうがないだろ！？都」
ラ「やれば出来るじゃん、駒」
よ「伊達に水の精霊ではないか……繭」
エ「それでいいのよ……弓」
み「……物足りない、蓑」
ラ「そろそろ飽きて来た、蚤」
よ「確かに、耳」
エ「やめる？南」
み「みが多い……岬」
ラ「最後の一周な、霧」
よ「分かった、陸」
エ「最後はんで終わりな……栗」
み「んで終わる？……り、り、り、りん……鱗」
ラ「はい終了」
よ「次は何をするかのう」
エ「何か無い？」
み「ネタ合戦とか」
ラ「ツツコミよろ」
エ「頼んだわ」
み「そういうのは出来んからな」
よ「……結局こうなるのな」
ラ「降臨……」
エ「満を……」
み「持して……」
よ「ピッタリじゃな！？」
ラ「皆大好き幼女のツツコミ！」
エ「つまり、皆口リコン！」
み「この変態どもめ！」
よ「読者が減るぞ！？あと、お前にだけは言われたくない！」
ラ「作者の性癖でも晒すか」

よ「やめてあげて！」
エ「なら好きな歌？」
よ「ここにいる時点でアニソンであるっ？」
み「好きな罵倒」
よ「それは性癖に入る」
ラ「眠くなってきた」
エ「めんどくさくなってきた」
み「干からびてきた」
よ「終わらせればいいんじゃない？」
ラ「それはつまらん」
エ「出番が欲しい」
み「ただの分身だし」
よ「なら頑張れ！」
ラ「カエルピョコピョコ」
エ「ミピョコピョコ」
み「アフセテピョコピョコ」
よ「……やらんぞ？」
三人『……』
よ「……………ミピョコピョコ」
ラ「よし、終わるか」
よ「何の為にやったんじゃない？」
エ「早く帰りた〜い」
よ「帰れ」
み「あ、水が……」
よ「お前は今すぐ帰れ！」
ラ「しめるか！」
よ「や、やつと終わる」
エ「次回予告は？」
み「たり、ない……」
ラ「次回！第二期！……ええ！？」

よ「何故驚く！？」
エ「打ち切りだと思ってたとか」
よ「早々打ち切らんだろ！？」
み「あ、指輪……なんでもない」
よ「伏線張っていきおった！？」
ラ「では、また次回！ドライブイグニ——」
よ「作品違う！？」
エ「あ、私もやる！アナタのハートに——」
よ「だからやめんか！？」
み「……じゃんけんぽん」
よ「精霊！お前もか！？」
ラ「さいなら」
エ「ばいばい」
み「出来れば罵倒して……」
よ「もう、誰が変わってくれ！」
三人『黙れツツコミ』
よ「もう嫌じゃー！！」

第一回・なんの記念？（後書き）

メツチャ楽しい。

またやる。

自重なんかしないよ。

第二十四話（前書き）

アニメで言う第二期！
始まるよ～

第二十四話

手紙が来た。

ウェー君から、「アンリエッタに……会いたい……」とのこと。
返事を書いた、「持って行こうか?」と。

一週間経って、手紙が来た。

「むしろ連れて行ってください」と。
というわけで……

「アンリゝウェー君いる?」

「アンリエッタ!」

「ウェールズ!」

ウェー君を脇に抱えて、アンリの部屋に侵入する。
よくよく考えると、侵入しまくってるな。
やめないけど。

「じゃあな!」

「まあ、待て」

べ、別にアニーがいたから帰ろうとしてる訳じゃないんだからね!

(ツンデレ乙)

「H A H A H A! アニー君、俺は忙しいんだ……だから、その銃を
下げてくれたまえ!」

「今、学園に住んでいるんだろ?」

「? そうだけど?」

「そうか……楽しみにしている」

楽しみ？

何かあったつけ？

どうでもいいか。

「じゃーな」

このとき、もう少しちゃんと聞いておくべきだった。

・

・

・

広場が騒がしかったので、行ってみた。

男子が軍に入るそうだ。

わけが分からん。

寝てたら何時の間にかこんなことに……

あ、ギー少年とモンシーだ。

「ギー少年、モンシー」

「師匠！来てくれたんですか！」

「ライナさん！ギーシュにやめるように言ってください！」

「分かったよ！銀使えるようになった？」

「大丈夫です！」

「よし、行つて来い」

「ええ！？」

モンシーとギー少年のお別れを邪魔するのもアレなんで、ルイちゃんとサイト君のところに向かう。

「ルイちゃん、サイト君」

「ライナ兄様」

「ライナさん！……そうか、ライナさんがいたか……」

なんだ？

……ああ、男子が全員軍に行くから、学園に残る若い男子が自分だけとか、ハーレムじゃんとか考えてたんだな？

相変わらず、欲望に忠実だな……ルイちゃん一筋じゃないのかよ。カリン様に訴えちゃうぞ？

「何あれ？」

「さあ？」

ん？何か来たな……あ！あの竜は！

竜が地面に降り、乗っていた人物が飛び降りる。

その顔は……

「ジュオじゃん！久しぶり！」

「ん？誰………ラ、ライナ、殿………な、何故ここに！？」

「相変わらずイケメンだな」

「ど、どう、も」

ジュオどうしたんだ？

顔が青いぞ？

ん？何か熱気が……

振り向いてみた。

女子達が、ジュオを見てなにやら興奮してる。

流石イケメンだ。

そこに痺れるうー！憧れるううううー！！！！！！

とりあえず寝ることにした。

（意味が分からん！？）

「じゃあな、ジユオ」

部屋に戻って、睡眠をとる。

（ホントに寝おった……）

・

・

・

また広場が騒がしくなった。
滅茶苦茶うるさい。

「うるさいぞ」

「お前は黙ってるライナ」

「……なんでいるし」

アニーとその仲間達がいた。

「ライナ殿！」

「こんなところでお会いできるなんて！」

「ぜひ稽古を付けてください！」

すごい尊敬の眼差しで詰め寄って来る、騎士の皆様。
なんでだ？

「お前の強さは、認めたくないが確かだ……しかも、教えを受けた者は必ず強くなる……何も知らなければ、尊敬もしたくなるだろうさ」

そんなばなな！

俺にそんな役合いません！

サイト君のところに向かう。

「イナ。マ——」

「え？ライナさ——」

「キイイイイク！！」

「ぐばええ！？」

俺の帯電した蹴りにより、バウンドと回転しながら壁に激突するサイト君。

おお、埋まった。

これがギャグ補正か。

「ラ、ライナ殿………今は流石に………」

「んゝあんたミシエルか？大きくなったなあゝ」

「え、あ、どうも」

アンの所にいた時に俺が鍛えた、アンの隊の副隊長のミシエルだ。

何か貴族を怨んでたらしいが、その考えを押し折ってラインメイジなら剣さえあれば勝てるぐらいにした。

まあ、アニーは冷静であればトライアングルに勝てるかな。

「どれ」

「……へ？」

胸を揉んだ。

ホントに大きくなってる！？

「きゃああああ！！！！！！」

「悲鳴なんか上げてどうした？……ああ、今男だからか」

訓練する時は、変身魔法使ってフェリス状態でやってたからな。
だって、剣と言ったらフェリスだろ？

ライナは魔法だし。

しかもあの時は、完全に使いこなせてなかったから、性格とか思考も完全に真似ちゃってたんだよなあ」

記憶だけは残るという、羞恥プレイ付き。

自分で美女美女言ってるんだぜ？

そこで、背後に殺気。

「ライナ……死にたいらしいな？」

「……俺、明日カトレアの所に、行くんだ」

（それは、死亡フラグだ！！）

生き残る為の鬼ごっこが始まった。

「言っ下されば、いくらでも……」

（ライナは意外と、もてるんだな）

第二十四話（後書き）

「変態」

「いきなりどうした？」

「まさか、いきなりむ、む、胸を揉むなんて！」

「ああ、別れ際にまた会えたら大きくなったか確認してくれって」

「それは、器とかの話ではないのか？」

「……あ」

「な、なんだ、ただの勘違いか……て、余計ダメじゃん！？」

「お前らしいな」

「身長と胸の事だと思ってたよ……変身中に毎回毎回胸が大きいです
ねとか、身長高くて羨ましいですとか言ってくんだもん」

「あゝそれはしょうがないか？」

「むう、それ、ライナが変身しなかったらよかったんじゃない」

「……おお！」

「あんた達なんて嫌いだああ！！」

「なんだあいつ？」

「気にてやるな、乙女の嫉妬だ」

「でもあいつ、。。歳だろ？」

「……次回予告」

「？えゝサイト君とジュオの決闘？よし、邪魔しよう」

「最低じゃな」

「ライナアアアー！！」

「やべ、アニーだ……こんな所まで追っかけてくんのかよ、暇人め
！」

「そっついつつ逃げるのな、えゝまた次回」

第二十五話（前書き）

最後の部分は気にしないで。

ただの、文字稼、間違えた、ネタが無いだけだから。

どうぞ。

第二十五話

サイト君がジュオにキレた。
面白そうなので煽ってみた。

「いいぞ！もつとやれ！」

「……勝負しろ」

「よっしゃ！ブチ殺せ！」

「……いいだろう」

二人とも俺を視界に入れないように相對する。
むう……本格的に介入するぞ？

真竜改、ミラージュ、ラピス、そして、後一匹。

出しちゃう？

出しちゃっていい？

（……ダメだと思っぞ）

答えは聞いてない！
が、今回は自重しよう。

（ん？どうした？病気か？すぐに医者に見せるんだ！）

心配は、嬉しいんだけど……納得いかん。

まあ、もう少し待てばデカイ戦がある気がするな。

（……あゝ確かにあるな……今のは独り言だぞ？干渉なんかしてないし、未来を教えるもないからな？）

よくわからんが、幼女が言うなら大丈夫だろう。
あいつには、もう少し待ってもらおう。
なら、どうやって介入するか……うーん。

・
・
・

考えてたら、夜になってた。
部屋に戻って寝るか。
近くで、木を擦る音が聞こえる。
妖怪、木擦りか！？

（そんな妖怪いない！）

水水水風風のインビジブルの魔法で、姿を消して近付く。
視覚情報を誤魔化す魔法だ。
暇潰しに創ってみた。
覗きがしたい放題！
まあ、飢えて無いからどうでもいいけど。
サイト君とアニー？
特訓してる……あ、結局サイト君鍛えてないや。
ルイちゃんも来たし、俺も乱入するか。

「サイトオオオオオ！！！」
「さーいーとーくーんーあっそびーましょ？」
「ルイズに、ライナさん……違う怖さがある」
「ラ、ライナ！？ハッ！これは違うぞ！こいつがどうしても言う
から鍛えてやっただけだ！」

アニーはどうして弁解してんだ？

顔も心なしか赤いし。

病気か？

（お前がな）

「ククク、サイト君……君を一分間だけ狂戦士に仕立て上げてやる
う！」

「やめてください！？」

「君に、拒否権が、あるとでも？」

「壊される！いろいろ壊される！」

「ククク、アツハツハツハ！安心したまえ！痛いのは一瞬だあ！！」

「やめてえええ！！」

逃げ惑うサイト君を少し浮いて、ゲームのラスボスの様に追いかける。

おまけで、黒い翼とか生やしてみた。

「ラ、ライナ兄様……それはやりすぎじゃ……」

「べ、別にそいつが気になるとかじゃなくてだな……」

どうなったか？

楽しかったとだけ言うておこう。

・
・
・
・

「あゝサイト君？」

「……クロス」

「え？」

「クロスこそす殺すクロス殺す」

「……ライナ、殿」

呼んだかジュオ？

サイト君が、狂戦士になってる。

「何を、したのですか？」

「ああ、やりすぎだった♪」

「コロオオオオオオオオオス！！！！！！」

「今のサイト君、一国を滅ぼせるぐらいの力あるから……ガンバ♪」
「アンタって人わああああ！！！！」

おお、ジュオが主人公っぽいこと言った。
羨ましい。
フルボッコにしてやる。

（嫉妬か？）

嫉妬？

違うな！

逆鱗だ！

（嫉妬じゃん）

あいつは、ジュオは、俺の逆鱗に触れた。
それは、罪。
罪には、罰を！

「火水風土とギガスラツシュとギガデインの！テラブレイク！」

十メートルほどの放電している光の剣。

「……ああ、ここで、死ぬのか」

「ガアアアアアアアアア！……！！！」

「ジユオ、お前のミスは唯一つ、シンプルな答えだ」

サイト君が人間やめてるけど、一緒に吹き飛ばせば大丈夫だよね？
ちなみに、生徒は全員避難済み。

「テメーは、俺を、怒らせた」

（マルパクリやん……お前も主人公っぽいぞ？いや、主人公か）

そして、学園は、光に包まれた。

・

・

・

「幼女、締めよろしく」

（……この世界は、原作と似た世界です、どれだけ壊れても、原作に被害はありません）

誰に言っただ？

（画面の向こうの人達だが？）

ああ！ロリコンの皆様か！

あんた達も好きだね！

でも、ロリコンは行き過ぎると犯ぞ——

(終了、終了！終了オオオオオ！……！)

第二十五話（後書き）

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！」

「……ライナが、二人いる、しかも、すごい事やってる」

「片方は偏在じゃな……まあ、こんなネタの為に偏在を使うのはこいつぐらいだろう」

「オラア！！」

「無駄ア！！」

「「……ガフツ！？」」

「……二人とも消えたけど？」

「……あれ？」

「ああよく寝たあ」

「寝てたの！？」

「我が、神である、我が間違えただと！？」

「ん？ああ、対神用の誤魔化し魔法成功したんだ」

「……お前なんか人間やめてしまええええ！！」

「……なんだ、どうしたんだ幼女のヤツ？」

「……次回予告！」

「……ま、いいか、次回！ついに本妻登場！？ライナ、ボケにまわれず！？実はボケてる？の三本だ！……ん？」

「それじゃあ、また次回！」

「あれ？俺のアイデンティティが……」

「はい終了、終了！バイバイ！」

「ちょ、待てよ！俺はまだ——」

第二十六話（前書き）

これの前の次回予告……合っていないかも。

まあ、どうせギャグみたいなものだしいいか。

どうぞ！

第二十六話

ルイちゃんとサイト君の部屋に行ったら、誰もいなかった。

シエスタなら知ってるかと、聞きに行ったら、こちらもないかった。どこに行った？

むう……面白そうな事が起こってる気がする！

（……あ〜なんだ、偶には、その、ほれ、本妻の所にも行ってみたらどうだ？）

ん〜いいよ、行くのめんどくさいし。

（ルーラを使えば、一瞬じゃろ？）

え〜だるい。

（……ほ、ほら、もしかしたら、その、ルイズとサイトがいるかもしれないぞ？）

ないわ。

それないわ（笑）。

（もしかするかもしれない？行ってみるだけ、行っただけでもいいから）

しょうがね〜な〜

でも、どうした？

いつもは、俺がどこに行こうと何をしようと、ツツコンで終わりのに。

（あ、いや、干渉ではないぞ？けしてそんな事無い……おっと！急用を思い出した！ではな！）

んゝああ、また呼ぶわ。

……なんだったんだ？

「ルーラ」

・

・

・

……ん？

なんで水の精霊の所に？

『あ、あのだな……わ、私は悪くないぞ！ホントだからな！』

「それよりなんでここにいるんだよ？」

『ああ、それは私がライナの魔法に干渉して、ここに呼び出したからだ』

「腐っても精霊か……で、何の用だ？」

『……………れた』

声小さい。

始めて会った時の、あの偉そうな態度はどこに逝った？

「なんだって？」

『……………取られた』

「何を？」

まさかな。

いくらこいつでも、二回は無いだろ！

『……アンドバリの指輪』

「死ねば？」

『うう……』

アホだな。

生きる価値が無い。

言い過ぎか。

「はあゝまた俺が取り返してやる……どんなヤツだった？」

『ホントか？……その、お、怒らないでくれよ？』

「怒らない怒らない」

『……この前と同じヤツに』

「消え失せるボケ」

ないわ。

まじないわ。

何の為に考えてるの？

バカなの？

死ぬの？

「目障りだ」

『……すいません』

「はあ……ルーラ」

『だって、二回も来ると思わなくて……しょうがないじゃん……』

……でも、なんかいい』

最後に見た水の精霊の顔は、恍惚としていた。

・
・
・

夜になっちゃったよ。
入れてくれるかな？

「おゝい、誰かいませんか」

見慣れた、デカイ屋敷の扉を叩く。
それはもう、壊れるぐらいに強く。
てか、壊れた。

不可視の刃が飛んでくる。

この鋭さ……カリン様か！？

マトリックスのリローデット避けて、全て回避する。

「危ないですよ」

「玄関を壊すからです」

「サーセン」

扉を黒曜石で創り直しておいた。

うむ、見事な出来栄だ！

個人的には、ミスリルで創りたかった。

「相変わらず早い上に見事ね」

「あざす」

「ライナ君？」

カトレアが現れた。

ライナは逃げ出した。

しかし、カリン様に回り込まれてしまった。
カトレアの抱きつく。

ライナは押し倒された。

「グッ！？……頭打った」

「ライナくくん、会いたかったよ」

「あゝ胸、でかくなつたな」

「ライナ、あなたね……」

カリン様、怖いっす。

杖こつちに向けないでください。

カトレアをお姫様抱っこして、立ち上がる。

「ライナ君……」

そんな潤んだ瞳で見ないで。

お持ち帰りしちゃよ？

「あのゝカリン様」

「どうかした？それとカリンと呼ばないで」

「泊まっていいですかね？」

「……カトレアも喜んでるようですし、いいでしょう」

よっしゃ！

……何の為に来たんだっけ？

それに、シャルにまた叩かれるんだろうな。

まあ、いいか。

第二十六話（後書き）

「普通にボケたな」

「普通にボケたわね」

「よかったよかった、作者の発想力に勝ったぜ！」

「作者バカにしたな」

「作者バカにしたわね」

「それより、最初の幼女はなんだ？」

「い、いや、けして、けして干渉ではないからな！」

「思いつき干渉じゃない？」

「どうでもいいけど、ツツコミが無かったな」

「……つまり、なんじゃ、我のツツコミが無いという事か？」

「作者、次回予告ぐらいちゃんとしなさい」

「そう言うな、作者は何も考えないで書いてるだけなんだから」

「……フォローではないな」

「……フォローじゃないわね」

「どうでもいい作者は置いといて、次回予告！」

「どうでもいいって、書かなくなったらどうする？……メイドと主人の誘惑？サイトとルイズの契り！ライナ、貞操を奪われる！？」

「なにこれ？」

「……帰っていい？」

「ダメじゃろ……」

「また出番が無いかもしれんな」

「ダメでしょ……ライナの貞操……欲しいかも」

「……一生童貞でいいんだが」

「なんて、事を！世の中にどれだけ童貞を捨てたい者がいるか！分からんのか！」

「……」

「そうよ！いつでも童貞を捨てれる環境にいるのにしないなんて！侮辱だわ！」

「……」

「……幼女が童貞って言うのに興奮する奴は、一生童貞だろうな」

「……それは、否定できない」
「じゃ、また次回という事で……ちなみに、作者は――」
「それは言っちゃダメEEEE!!」

後書き、すいませんでした。
眠くて……しょうがないですよね！
なんで、自虐ネタみたいなことしたんだろう？

第二十七話（前書き）

物足りない。

もっとエロイのにしたい。

R15タグ付けようかな？

エロくしていいっすか？

第二十七話

寝ようとする、カトレアが布団の中に侵入してくる。身の危険を感じたので、屋敷の中をうろつく事にした。

「あゝ……ん？シエスタ？」

シエスタが一つの部屋に入っていた。
なんでシエスタが？

「……ルイちゃん？」

シエスタが入った部屋にルイちゃんが入った。
なんだ？あの部屋で何が？
風を操って、音をひろってみる。

「あ、そこは……ん！」

「はあ、いいです、もつと！」

聞かなかった事にした。

うん、人の趣味をとにかく言つつもりはないよ。

でも、サイト君も残念だな。

まさか、あの二人が……いや、この事は、俺の心の中に仕舞って置こう。

離れる為に振り返ると、エ、エ、エレ、エレオルゴールにボコボコにされたサイト君が目に入った。

見なかったことにして、部屋に戻った。

「あ、やっと帰ってきた」

スケスケのネグリジエを着たカトレアが――

「こんなところ、カリン様に見つかったら……殺されるな」

「許可してあります」

「……え？」

振り向くとカリン様いた。

その右手には杖があり、吹き飛ばされた。

「ぐお！？」

カトレアのいるベツトに叩き付けられる。

至近距離で喰らったからかなり効いた！

……ツッコミが無い。

自分ですか。

「俺じゃなきゃ死んでますよ！？」

……なんか違うんだよな。

「貴方じゃなきゃやりません……では、私はこれで」

カリン様が、ドアを閉めた。

多分だが、ドアにロックの魔法をかけられた気がする。

窓は……鉄格子付だった。

逃げ道が、無い？

「ライナ君……ずっと待ってたんだよ？」

「……そっか……うん、どうでもいいけど服を脱がさないでくれる

か？」

「……………てへっ」

てへっじゃねえよ。

いいからその手を止める。

カリン様の魔法、おまけで麻痺付なんだよ。
動けないんだよ。

「むっこの感じ……………周りに女の子が増えてるけど、まだそっいう関係ではない感じね」

俺を下着一枚にして、匂いを嗅ぐカトレア。
なんだこいつ？
こんなんだったか？

「フッフッフ……………いただきまっすっ」

「え、ちょ、マジで！？十八禁になるぞ！？」

・
・
・
・

「あら、おはよう……………どんな感じ？」

「いただきちゃいましたっとってもすごかったっ」

「いただかれちゃいました……………疲れました……………」

よれよれの俺とつやつやしているカトレア。
女って、すごいな。
うん、すごい。

「……もう少し、外歩くわ」

「ライナ、随分やつれてるけど……何回したの？」

「んゝ八回ぐらい？」

思い出したくない。

封印しよう。

……顔洗ってくるか。

・
・
・
・
・

・

顔を洗ってのんびりしてたら、サイト君とルイちゃんがボートでいちゃついていた。

アレを見ると、思い出しそうになる。

柔らかい肌、プリプリした唇、滑らかな足……待て俺。
はぁゝダメだ。

テンション上がんね。

もう一回、寝よ。

第二十七話（後書き）

「出番が……」

「無い……」

「精根、尽きた……」

「ええい！この話はやめじゃ！」

「そうよ！もっと明日を見なきゃ！」

「……これからもっとキツイかも」

「まあ、頑張れ」

「ライナの初めて、盗られたか！」

「あゝ栄養のあるものくれ」

「唐辛子スープでも食べ」

「うわあゝ真っ赤……」

「……意外とうまい」

「飲んでるよ……」

「次回予告じゃ！」

「ベロがヒリヒリする」

「読者の感想しだいで、エロさが変わる！？」

「エロい方がいいか、エロくない方がいいか、感想待ってるぞ！」

「感想の数、稼ごうとしてるだけじゃね？の？」

「それは言わない約束じゃ」

「出来ればエロく無くしてくれ」

「「ではな！」」

「あと、幼女二人のエロ発言に興奮すんなよ？」

「「それは無い」」

第二十八話（前書き）

うん、あれだ、ひよった。

もうちよいエロくしてもよかったかな？

てか、エロイか？

もうちよいいけた気もする。

まあ、これが俺にとってのR15だよ。

楽しんでね？

第二十八話

サイト君達が、逃げる様に学園に帰っていった。
俺は、もう一泊してから帰ることにした。

そして、朝。

目を開けるとカトレアが、俺の上に乗っていた。
全裸で。

たわなに実り、重力に逆らって揺れる大きな乳房。

その胸を何故か俺の右手が、揉んでいた。

何故か、体が自由に動かせず、声も出せない。

ただ見るだけ……きつと夢だろう。

「ふ、ん…あつ、んん！」

カトレアは、声を出さないようにしているのか、必死に何かをこらえている。

それでも我慢できずに、少しばかり艶かしい声が漏れる。

俺の手が動く度に、カトレアの顔が朱に染まる。

妙にリアルだ。

「ライナ、君……あ、あん…ひゃう!？」

カトレアの体が、反応する。

その理由は、俺の左手が何時の間にかカトレアの秘所に伸びていた。
触れば触るほど、ぬるぬるした液体が溢れてくる。

「ふわ、ん…あつ……ひ、んあ…はん……ああ…ライ、ナ」

思考が麻痺してるのか、涎を垂らしながら、恍惚とした表情で俺の

胸元に頭を落とす。

その口からは、甘い吐息が漏れる。

「はぁ、はぁ、はぁ……ん……ライナ……入れて、いい？」

カトレアの唇が、俺の唇に重なる。

軟らかい唇が小さく開き、お互いの舌が卑猥な音を奏でる。

そして――

・
・
・
・
・

「……………ほらな、やっぱり夢だ」

寝台の横にある鏡に映った自分を見る。

目にはクマがあり、少しやつれ気味の頬に、髪は寝癖ではねていて、全体的に見て……搾り取られた後。

そこで気が付く、誰かの寝息が聞こえる事に。

機械の様にギギギと自分の横を見る。

そこには……カトレアがいた。
全裸で。

それと、下半身の方が随分濡れて――

「さて、帰るか」

なかったことにした。

何時の間にか脱げていた服を調べて、魔法で身体を綺麗にする。
そして、何事も無かったかのように部屋を出――

「ライナ、君……」

れなかった。

振り向くとカトレアが、少し辛そうに体を起していた。
布団で身体を隠しながら。

「……なになに？」

「あのね、その……妾の件なんだけど」

そんな件しらん。

正妻はカトレアで決定なのか。

「五人じゃなくて、八人位でもいいからね」

「……何故増やした？」

「えっと……激しすぎて……もたない、から……」

顔を赤くしつつ、恥ずかしさを布団で隠そうとしているカトレアに
……萌えた。

つまり、アレか……俺が予想以上に、滾っていたから……なんだ、
人数が少ないと辛いと言う事か？

……記憶飛んでるから、わかんね。

「あゝまあ、その……善処するよ」

「うん……またね？」

「……ああ、また」

そして部屋を出て、走り出す。

「待たんかあああああ！……！」

「誰が待つかあああああ！……！」

ラ・ヴァリエール公爵が追いかけてくる。
来るとは思ってたが、ここまで全力とは！
恐るべし、親バカ！

「さよならだ！ルーラ！」

……あれ？

ああ！今戦闘中か！
ヤッベ！

窓を突き破って、外に出る。
破壊した窓は、しっかり修復する。
修復した窓を突き破って、公爵が追ってくる。

「ミラージュ！」

ルーラが使えないなら、空を飛べばいいじゃない。
というわけで、ミラージュを召喚して、飛び立つ。

「次会ったら、覚悟しろおおおお！！！」

「その前に！後ろの御方に気をつける！」

「……え？」

公爵の後ろには、カリン様がいた。
黒いオーラを纏ったカリン様がな。
そりゃ、あんなだけ破壊すればああなるわ。
俺？ちゃんと修復しただろ？

「生きてたら、また会おう！」

ニヤニヤしながら公爵に手を振る。
そして、ミラージュに乗って学園に向かう。
公爵の悲鳴は、聞かなかった事にした。

・
・
・
・

帰ったら、杖が顔面を強打した。

予想外の激痛に、地面をのた打ち回る。

「鼻がああ！！鼻がああああ！！！！」
「……遅い」

シャルが、最近杖で攻撃してくるんです。
俺は悪くない！……とは言えないか。
使い魔として、仕事してないしな。

「せめて、事前告知をしてくれないか？」
「……いや」
「そうですか……あゝいつぞやの鍛えてやるって件、今日でいいか？」
「……うん」

少し嬉しそうなシャル。
やっぱ可愛いな。
カトレアとは、違った萌えだ。

シャルの修行中、サイト君が乱入してきたので、スーパー？で絶対的な強者というのを教えてやった。

……幼女どこ逝った？

第二十八話（後書き）

「次回！幼女復活！幼女のツッコミ、世界ーイイイイ！！！！」

「いきなりどうした？」

「テンション上げなきゃやってらんねえよ！」

「ちよつと落ち着いて！」

「H A N A S E！」

「そのネタを使うな！」

「幼女は俺の嫁ええええええ！！！」

「ちよ！？それどういうこと！」

「アハハハハハ！！！」

「我が知るか！」

「パルプンテ！！！」

「それは——！！！」

効果、時間巻き戻し。

「……俺ら、何してたんだっけ？」

「……さあ？」

「……次回予告いつとく？」

「そうだな、次回、幼女のツッコミ復活！」

「学園にヴァリエール三姉妹集合？」

「次回も楽しみにするんじゃない！」

「……幼女、嬉しそうだな？」

「出番があるからじゃない？」

「早速準備じゃ！ではな！」

第二十九話（前書き）

テンションが上がってきた！

ご都合主義＋原作崩壊でお送りします！

どうぞ！

第二十九話

俺は今、全力で逃げている。

俺のことを追っつけてきているのは、アニー騎士団全員、シャル&mp・イルククウ（竜版）、マチさん、エリザベスなどが全力で追いかけてくる。

（だから何度も言ってるだろ！干渉などしていな……え、繋がってる？………んん！久しいな、ライナ………ところでエリザベスって、ああ、エルザか）

久しぶり。

誰と話してたんだ？

（な、何の事だ？我は誰とも話しておらんぞ？）

そうか？んーいや、男二人と女三人の気配を感じる！

（その位置から分かるのか！？）

そんな事より、なんで俺、追われてるのかな？

（………回想でもすればいいんじゃないか？）

………おお！

回想はいります！

～回想中～

女子達の訓練風景をサイト君と遊びながら見ていた。
オセロって、楽しいよな。

「これで、全部白だ!」

「……こんなの、アニメとかだけの話じゃ」

「残念だけど、これ、現実なのよね」

サイト君、弱すぎて話しにならん。

ん?アレは……エ、エ、エ、エタノール?

く少し飛びますく

「カトレア……何故ここに!??」

「ふふ、また会ったね、ライナ君」

サイト君とルイちゃんが、エラールを連れてどこかに行った後……
カトレアが、俺の前に現れた。

「……誰?」

「なんだ?知り合いなのか?」

「こんな所で何やっているのですか?」

「誰だお前!??」

「……ロングビルです」

……覚えてましたよ?

丁寧な言葉遣いだったモンで、つい。

「あら、ライナ君は随分もててるのね？」

「？何の話だ？」

「昔から変わらないね」

「????」

意味が分からん。

俺は変わったぞ？

「……」

「む」

「……へえ」

ん？なんだ？なんかあったのか？

「ところで……これからデートでもない？」

「あゝ別にいいけど」

「勝手に人の使い魔を持っていけないでほしい」

「あら？貴女がライナ君のご主人様？」

……なんだ？ここにいと、ヤバイ気がする。

気配を消し、忍び足で離れる。

「でも、私とライナ君はいろいろした仲だから……それはもう、いろいろと」

「……話がある」

「ああ、私も少し聞きたいことができた」

「ライナさん、少し、お話よろしいでしょうか？」

～回想終了～

うゝむ、わからん。

なんで追いかけてらてんだ。

エリザベスやイルククウに助けを求めたら一緒に追いかけてくるし。

(もう少し、女心を理解しろ)

そんなものしらん。

神だろ？教えるよ。

(……お前……いや、違うぞ！干渉などしていない！ホントだ！)

忙しそうだな。

学園上空に逃げればいいんじゃない？

というわけで、大気圏ギリギリで待機する。

学園はそろそろ夜かな？

ここまですれば、さすがに――

(……あゝカトレアが大変だぞ？)

なんだとお！？

地面に激突しながら着地する。

でかいクレーターが出来たが気にしない。

光の速さを越えて、カトレアの所に向かう。

カトレアの部屋のドアを蹴破る様を開ける。

そこには、変な仮面を付けた女がカトレアの寝ている寝台いた。

「俺の女に何してんだぁ！！……間違えた！俺の知り合いに何して

「んだぁー!!」

（しまらんヤツだな……まあ待て、もう少し、もう少しでいいから！ちょ！確かに今のはそうだが！）

脳内でうるさい会話をしているので、カットする。

仮面を付けた女が舌打ちをして、窓を吹き飛ばして逃走する。

気配と魔力は覚えたので、無視してカトレアの無事を確認する。

「カトレア！大丈夫か？」

「ん〜ライナく〜ん」

寝惚けているのか、抱きついてくる。

まあ、怪我が無いならいいけどさ。

寝息が聞こえる。

ん？なんか、胸の辺りに魔方阵があるな……消しておくか。

「しかし……あの気配に魔力、どこかで……」

このとき、フラグになっていると気付かなかった。

それが、あんな事件になるなんて……思いもしなかった。

第二十九話（後書き）

「犯人、どうしよう……とか作者は今頃考えてんだろうな」

「だろうね……ところで、あの幼女は？」

「んゝ何か今忙しいらしいぞ……たしか、干渉がどうか言ってた」

「そ、そう……あの子も大変ね」

「二人じゃなんか寂しいし、誰か呼ぶか？」

「それいいかも！誰呼ぶ？」

「んゝそうだな……上条。麻」

「まさかの別作品！？」

「強制召喚！」

「なんだここ！？どこだ！？」

「ほんとに出しちゃった！？」

「かみやん、かみやん、アレやってよアレ、不幸だーとか言うヤツ」

「好きで言ってるんじゃないからな！勘違いすんなよ！」

「ツンデレ乙」

「なんだこいつ！？」

「何かすいません、えゝとりあえずこれが終われば帰れますから」

「……しっかりした子だな」

「アレと比べると基本的にしっかりしてると思います」

「火火火火火とベギラゴンとメラゾーマのオメガフレア！」

「……確かに……アレ、こっちに向けてない？」

「急用を思い出したので、私はこれで！」

「え？え？」

「消せるものなら、消してみろおお！！」

「ええええええ！？」

「えゝ次回予告、まさかの犯人！犯人は……お前だ！」

「あゝはっはっはっはっは！！イオナズン！グランドクロス！ビツクバン！ジゴスパーク！ギガデイン！ギガスラッシュ！そして！マ

ダンテだあああ!!」

「不幸だあああ!!!!」

「それではまた次回、ばいばい」

第三十話（前書き）

前回の続き！

ご都合主義と原作崩壊万歳！

最近、後書きの方が長くなり始めてる気がする。

第三十話

「犯人は、お前だ!」

「何言ってるんですか、ライナさん?」

「特に理由は無い!」

今日は朝からサイト君の剣術指導。

女体版でな。

何回か間違えて、首と体にサヨナラして貰う所だった。

ちなみに、夜に起きた事は一部の者にのみに伝えられてる。

「ところで、ライナさんは……カトレアさんに何かした犯人が見つかったら、どうす——」

「指の骨を一本ずつ押し折ってから両手両足の骨を砕いて首以外の間接を全部外してゆつくりと火で炙ってから氷の中に閉じ込めて土に埋めて空気を徐々に薄くしてから限界ギリギリのところまで外に出して罵倒しまくる、かな?」

「……」

サイト君が壁際に蹲りながら、ガタガタ震えている。
どうしたんだ?

(自分が何を言ったか、思い出してみろ)

えー普通じゃね?

昔考えた拷問方法……まあ、魔法が使える分追加してあるけど。

(アレを普通というなら、殺してやる方が善意的だろうな)

そんなわけないだろ？

これだから神の価値観は……

（え？我が悪いのか？）

サイト君も幼女も普通じゃないからどうするかな。

（……それをお前が言うのか？）

犯人でも捜すか。

カトレアに手を出した事……絶望の中で後悔すればいい。

（御主……悪役の方が向いておるな）

・
・
・
・

あの舌打ちの仕方、馴染みのある気配と魔力、中々のナイスバディ。
ここから導き出される答えは……マチさんだ！

「犯人は貴女だ、マチさん！」

「……頭は大丈夫ですか？」

……おかしいな。

間違いないと思ったのにな。

「えゝあゝそのゝ失礼しましたゝ」

エロ狸のいない学園長室の窓から飛び降りる。

畜生！犯人誰だよ！

（意外と身近な人物だったりするかも知れんぞ？）

む、面倒な言い回しだな。

もうちょい調べるか。

・
・
・
・
・

・

あの時、犯人が使った魔法は……風。

アレだけの實力を持った風のメイジを……俺は一人しか知らない。

「何故、あんな無駄な事をしたのですか……カリン様」

「しいて言うなら、もっと親密になってもらう為かしら？それと、せめて様はやめなさい」

カトレアの部屋にて、カリン様と会話中。

カトレアは、ラリホーで眠らせた。

「さすがの俺も、今回ばかりは手加減しませんよ？」

「あなたとやりあうのも、久しぶりね？」

お互い、いつでも窓から外に行ける様に少しずつ動く。

そして……戦争が始まった。

この戦争で、学園の半分以上が消し飛んだ。

カリン様、いや、カリンと一緒にカトレアに説教された。

正座で約二時間。

足が、死ぬ……

（まあ、何時も通りライナが学園を直して終わりだ……ライナもア
レだが、カリンも可笑しいのお）

本気で、足が……逝く……

第三十話（後書き）

「前回の魔方阵はなんだったんじゃ？」

「判らないなら聞けばいいじゃない！教えて！カリン様！」

「魅了の魔法がかかってたんだけど……意味無かったわね」

「流石ライナ！ホントに人間やめてるね」

「俺褒められてる？」

「どうでもよいではないか」

「それもそうだな！」

「じゃあ、私は帰るわ」

「「「ありがとうございました！」「」」

「よし！テンションもっと上げてけ！」

「なにする気じゃ？」

「もしかして、また召喚するの？」

「うむ！で、誰呼ぼう？」

「出来れば他作品のヤツは、呼んで欲しくないのお」

「いろいろ引つかかっちゃいそうだしね」

「そうだな……じゃあ、リリ。ルなの。からフェイトさん！」

「「何故に！？」」

「尺が足りないか……次回に持ち越したな……おまけで魔王も出しておくか……安心しろ！この作品の後書きは、基本幼女やちっちゃいのしか出さないから！子供版の二人が次回の後書きにいい！」

「落ち着け……次回予告！」

「姫と王子の逢引？邪魔はしないよ？見るだけだもの！」

「「また次回で！」」

「ヤベ……ま、いいか」

「「何をミスした！？」」

第二回・唐突に！（前書き）

続きが、思いつかなくなってきたので、つい……てへっ♪
前回のゲストを召喚しちゃいます。

後書きでやるのは、無理があっただんです。

てか、なんで別作品のキャラ出してんだろ。

あとさ、後書きの方が楽しくなりはじめてる、自分がいる。

あ、別に無視していいですよ？

どうぞ♪

第二回・唐突に！

ラ「パンパカパァーン！作者死んどけ」

よ「それは、まあ、しょうがないな」

エ「いきなりだもんねえ」まあ、私は出番ができて嬉しいけど」

み「何故私は、呼ばれるのだろう？」

な「ここどこなの？」

フ「えっと……どこだろう？」

ラ「将来の魔王と露出狂の、A・S版なのはとフェイトの御三方です」

な「魔王ってなんなの！」

フ「露出狂！？」

よ「まあ、似たようなもんだし……ツツコミはいいか」

エ「あゝ出番って素晴らしい！」

み「誰も、かまってくれないのに……なんでいるんだろう」

ラ「はい！カオスになってきたので、クイズでもしましょう！」

全員『このタイミングで！？』

ラ「折角魔法使いがいるので、それらしい問題にするか……第一問！三十歳まで童貞だとなんて呼ばれ——」

よ「それ違う魔法使い！！」

エ「妖精じゃないの？」

み「ただの童貞だと思うのだが」

な「童貞って、何なの？」

フ「えっと……すいません、わかりません」

ラ「人によって言う事が違うのが面白いな……第二問！では、五十歳まで童貞だと？」

よ「な、なんだそれは？」

エ「精霊とか」

み「だから、童貞だろ？」

な「童貞ってなんなの!？」

フ「わからないです」

ラ「答えは賢者だ!ちなみに俺が考えた!」

よ「わかるかわけがないだろ!」

ラ「第三問!八十歳の童貞は!」

よ「知るか!」

エ「天使」

み「童貞」

な「だから童貞ってなんなの!？」

フ「……」

ラ「仙人だ!第四問!100歳ワアアア!!!」

よ「神な気がする!」

エ「神じゃない?」

み「そこまでいけば、童貞神だな」

な「童貞が何かは知らないけど、神だと思うの!」

フ「えっと、神様、かな?」

ラ「……………正解」

全員「すごい残念そう!」

ラ「なんでそこだけ全員わかったよ……………第五問」

全員「やる気無!」

ラ「空を飛ぶには、何が必要だ?」

よ「何もいらなと思うが?」

エ「風ね」

み「私は水だな」

な・フ「デバイスです!」

ラ「……………普通羽じゃね?」

全員「必要だとしても?」

ラ「かく言う俺も空気さえあれば飛べるけどな!面倒なので最終問題!自分の全力の攻撃は!」

よ「バカ!?それはよせ!!」

エ「撤退！」

み「な、なんだ!？」

な「全力全開! スターライト——」

フ「雷光一閃! プラズマザンバー——」

ラ「全魔力を凝縮、固定! 貴様らに、終焉を見せてやる!」

な・フ『ブレイカー——!!!!』

ラ「ブレイク・ザ・ワールドオオオオオ!!!!」

「しばらくお待ちください」

よ「さて、そろそろ終わらせるかの？」

エ「そうね」

み「賛成だ」

よ「まあ、作者が詰まったら毎回やるんだろうな」

エ「でしょうね」

み「責めるなら、私を責めてくれ」

よ「DMが」

エ「この変態が」

み「……いい」

よ「偶には、ツッコミ以外をやりたいのお……」

エ「本編で、出番が欲しい……」

み「もっと、もっと責めて……」

よ「……では、また次回」

エ「……バイバイ」

み「……クسن」

な「師匠と呼ばせて欲しいの!」

フ「私も!」

ラ「だが断る……帰れ」

第二回・唐突に！（後書き）

おまけだし、どれだけ壊してもいいよね？

うん、自分は悪くない。

ウチの主人公が悪いんだ。

童貞のくんだり、気にしないでね？

あと、リリカルな魔砲少女は、そんな感じで聞き覚えがあったからです。

こちらにも気にせずに。

第三十一話（前書き）

時間が、時間が無い。

学校、めんどい。

何もしなくても、生きていける世の中にならないかな？

第三十一話

アンリとウェー君から手紙が来た。

両方とも、デートを成功させるにはどうすればいいか、という内容だった。

静かな場所でのんびりすれば？と返しておいた。

あの時の俺が間違っているとは思わない。

現在、夜にトリスティン王国内の街中で、平民に変装したアンリとウェー君を女体化して……尾行中。

俺の返事に対する返事として、デートがうまくいかなかったらカトレアさんに言う、とありがたい御言葉が書かれていた。
何時カトレアと知り合いやがった……

久しぶりに会ったからか、二人ともかなりガチガチだ。

昔は、もっとアグレッシブだったのにな。

まあ、出会う度にどちらかが裸になるようにしてたからだろうけどな！

……俺のせいかな？

（人の恋路に踏み込むでないわ）

人の恋路は、晒して、邪魔して、嘲笑う。

（外道が！）

お、二人がチンピラに絡まれてる。

魔法は使わないことになってるから、ヤバイかもな。

助けるか？

チンピラを蹴散らそうと、一歩足を踏み出して――

「二つの月が輝く時……月光が悪を照らし出す……」

停止した。

なんだこの名乗り？

中二病がいるのか？

（……大人しく聞いておけ）

当たり前だろ？

こんな面白そうなヤツ、見なきゃ損だ。

「他人の恋路の邪魔をする……不埒な輩に鉄槌を……」

誰だ……誰なんだ！

チンピラ達に加えて、アンリとウェー君もキョロキョロしてるよ。

「魔法少女エルザ！双月に代わって……御仕置きよ！」

屋根の上に乗り、月をバックに懐かしいポーズを決める、エルザも
とい魔法少女型幼女吸血鬼。

フリフリが大量に付いている可愛らしいドレス服を着ている。

……いろいろパクッたな。

（……いろいろとな）

エルザ……最近見ないと思ったら、そんなことを……

これからは、優しくしてやろう……

「さあ！ここ私に任せて、行きなさい！」

「え、あ、ありがとうございます？」

「た、助かりました？」

そう言つて、二人が走つて行く。

このまま見たいけど……二人を追うか。

「さあ、私とOHANASI……しましょう？」

メツチャ見たい。

(……早く追いかける)

・

・

・

「アイーシャ」

「ヨシア」

カップル間違えた。

・

・

・

アンリとウェー君は、噴水の前のベンチに座つて、寄り添っている。
うむ、いい感じだな。

俺に出来る事は無いな。

帰るか。

「こんな夜遅くに、どうしたんだねーちゃん？」

「男でも待ってたのか？」

「へへ、良い体してんな」

あゝ女体化解いて無いや。

ボッコしょ。

剣を虚空から取り出して、何か言われる前に問答無用で、叩きのめす。

悲鳴を上げる間も無く、気絶させる。

その時、横目で二人を見たら……キスをしていた。

その時俺は、無意識にガッツポーズを取っていたようで、ボッコした野郎を上には飛ばしてしまった。

そのまま弧を描く様に、良い雰囲気の二人の前にある噴水に……勢いよく落ちた。

雰囲気ぶち壊しの水飛沫が、二人にかかる。

『……………』

（……………逃げるのをオススメする）

今回の教訓。

他人の恋路に踏み込むなかれ。

全ての罪を野郎どもに被せて、逃げ出した。
俺、悪くないよ？

第三十一話（後書き）

「魔法少女エルザ！毎週日曜の深夜に放送中！皆見てね！」

「そんなアニメやっておらん」

「新しいFateのアニメ見たいわ」

「今言う事か！？」

「ポロリもあるかもよ！」

「……そうだな」

「そこは、お前の体にポロリの要素が何所にある！とかツツコンでやれよ」

「いや、まあ、うん、すまん」

「その優しさが痛い！」

「次回予告じゃな」

「魔法少女エルザ、放送中止……君は、幻の第一話を見れるか？」

「見れるわけ無かるう……やってすらいないのだから」

「また次回……日曜にも会おうね！」

「だから、無理だつてば！」

第三十二話（前書き）

うむ、原作無視してしまった。

まあ、どうでもいいか。

なんか、オリジナルで強いヤツでも創ろつかない……考えとくか。

第三十二話

神殺しの魔法考えたんだけどさ

(マジすいませんでしたああああ!!!)

どうした？

(だって、だって、我、神だし……殺さないで……)

バカだなあゝホントに殺せるわけ無いだろ？

(で、ですよねえ)

せいぜい、神として生きられなくなるぐらいだ。

(殺されるうううう!!!)

幼女をからかうのも飽きてきたし、今の状態の説明でもするか。

誰に対しての説明かは、聞かない約束だ

えゝ現在、マチさんとイルククウと一緒にティアのいる村に来た。
タバサはキュルに連れて行かれた。

なんでも、ルイちゃんの手伝いだそうだ。

そっちに行くのも面倒なので、ティアに会いに行く事にした。
イルククウに乗って、移動中。

「ライナ」

しかし、ティアの胸はどのくらい大きくなったのだろうか？

最後に会った時は、たしか、カトレアより少し小さいぐらいだったか？

うゝむ、想像がつかん。

「……ライナ！」

胸はいいんだよ胸は、それよりも……ティアに会ったら何をするか……
なるべくインパクトのある登場をしたいな……
背後を爆発でもさせるか？
でも、それはヒーロー系限定の演出だしなあゝ

「おい……いい加減にしろよ？」

「……What？」

「……着いたぞ」

何時の間にか、着いていたらしい。

どうしよう……俺には、阿修羅が見える。

これは、余り刺激しない方が……

「マチルダ姉さん！ライナさん！イルククウちゃん！」

一段と大きくなった胸を揺らしながら、こちらに向かってくるティア。
ア。

……で、デカ過ぎる！？

「その胸、貰ったあー！！」

「させるかあー！！」

「グハッ！？」

一瞬でティアの前に移動して、その大きい胸に手を伸ばしたら、同じく一瞬で俺の横に来たマチさんが、俺に回し蹴りを直撃させた。マチさん、強くなったな……ゲフツ。

・
・
・
・

目が覚めたら、マチさんに膝まく――

「起きるな」
「ぎゃ!?!」

・
・
・
・

目が覚めたら、ティアに膝枕されていた。

「あれ？俺、確かマチさんに膝枕されてたはずじゃ？」
「えっと……気のせいじゃないですか？」

拳動不審。

目が泳いでいる。

俺に顔を向けない。

このことから、ティアが嘘をついているとわかる。

まあ、いいや。

何時までもこうしてると、ティアの足に負担がかかるだろう？

「あ………」

起き上がると、何か残念そうな声が聞こえた。
まあ、気のせいだろ。

「さて、なんで俺はここに来たんだ？」

「……私にはわかりません」
(それをお前が聞くでない)

むう……どうしようかなあゝ
ティアになんかさせるか。

「ティア、何か面白い事やって」
「え、あ、その、でも、私、そんな、あの……はい」

爆笑モノであると期待しよう。

(ハードルが高い!?)

「面白い事……面白い事……うう、無いです……」

「じゃあ、暴露話で」

「それなら……私、虚無です!」

「知ってる、次」

「……ええ!？」

なんで驚いてんだ？

ルイちゃんもジョゼフも虚無だし。

「他に無いのかよ」

「あう……その、私、ライナさんのこと……」

「何やってんだ、お前ら？」

マチさんがやってきた。

ティアは、顔を真っ赤にして、ちよつと複雑そうな顔をしている。助かったのと残念と思う感情が読み取れる。

そこから導かれる答えは……性癖の事でも話そうとした？

（その発想、無いわ）

そうかな？

で、これからどうすんだ？

「久しぶりに会ったんだ、ライナ、何か作れ」

「それもそうか、よっしゃ！マルトーさん直伝料理を見せてやる！」

「ライナさんの料理久しぶりです！」

「おなか空いたのね！きゅいきゅい！」

そんなこんなで、普通に家族団欒みたいになった。

俺もそろそろ、ちゃんとした家庭を持った方がいいかな？

・
・
・

～ライナ就寝後の会話～

「ま、マチルダ姉さん……ホントにやるの？」

「おねえさまに怒られるかも……」

「このぐらいしないと、あいつは気付かないからね……それとも、何もなくて良いのかい？」

「……そ、そうだね……私、頑張る！」

「二人だけには渡さないのね！」

「私だって負けないからね？よし、行くよ！」

「うん！」

「きゅい！」

そして三人は、ライナの部屋に入っていた。

第三十二話（後書き）

「俺、どうなるんだ？」

「食べられる」

「むしろ食べるんじゃない？」

「……何を？」

「女」

「……次回予告！」

「逃げた」

「子供は見ちゃいけません！やっちゃったものは、しょうがない！

……俺は、何をしたんだ！？」

「ふ、いつものボケはどうした？」

「つかけ回って来たわね？」

「うるさいうるさいうるさい！」

「くぎゅボイスうま！？」

「お前等みたいな幼女、修正してやるううう！！」

「あ、神殺し」

「私に使ったら、オーバーキルね」

「喰い尽くせえ！！^{ゴッド・スレイヤー}神殺し！！」

「また次かギヤアアアア！！！！」

第三十三話（前書き）

途中からおかしくなった。

炎蛇回、やる？

やると、オリジナルかもしれないキャラが出てくると思う。

第三十三話

体が重い。

しつかり寝た筈なのに。

汗も凄い事になっている。

なのに、服を着ていない。

おかしい。

体は、まるで激しい運動をした後のように暑いのに……何故だ？

上半身だけどうにか起こすと、形の良い乳房が目に入った。

「……俺は、独りで寝てた筈……何があつた？」

前に、此処に來た時に創つておいた豪邸。

その豪邸の中でも、大きめの寝室で、寝台もキングサイズ。

五人は一緒に寝ても平気そうなサイズだ。

その寝台の上に、俺と同じ様に激しい運動をした後の様な状態で、顔は赤いが、かなり満足そうなそれでいて幸せそうな寝顔のティアとマチさんとイルククウがいた。

「……やつちやた？」

（……激しかったとだけ言っておく）

「マジか……まあいいや」

（いいんかい）

やつちまつたものは、しょうがない。

責任は取るさ。

……いつか。

（最後、弱気になったな）

動きたくないし、三人の観察でもしてるかな？

ティアは、その大きな胸を揺らしながら寝息を立てている。

汗で白い肌を、いろいろな意味で濡らす姿は、妙に艶かしい。

マチさんは、健康的で綺麗な体をほんのり朱に染めている。

普段の強気な態度から想像出来ないほど、可愛らしく丸まっている。

イルククウは、羞恥心が無いのか、大の字で寝ている。

毛……草が無い。

（これ以上の表現は、R18か？）

どうだろうか？

限界までやってみる？

（タバサが怒るとだけ言っておく）

……意外と痛いんだよ、あの杖。

どうするか……寝よ。

全ての思考を投げ出して、夢の世界に逃避した。

・

・

・

（起きろ）

なん、だと……それはやめろ！

（夢でも見とるのか？）

神は、言っている……此処で――

（ちょっとストップ……夢ですらボケて来るのか）

我輩は……タマである。

（名前あるんだ！？）

パト。ツシュ……俺に構わず、先に逝け！

（最低だ！！こいつ最低だよ！！）

神がないなら……神になれば良いじゃない！

（規模がでかい！？）

人は、一人では生きられない……ゆえにお前は、俺には勝てない！

（誰かと戦ってる！？）

幼女燃え……なんでもない。

（……身の危険を感じる）

大人、同年代に興味はありません！

この中に幼女、小学生、魔法少女、合法ロリがいるなら俺の元に来てください！

（いろんな意味でそのネタはダメだろ！！）

クララが……立った、だと！？
クソ！これでは計画が……

（どんな計画！？）

夢があるから、人は生きられる。
だから、良い夢……見せてやるよ？

（……誰に？）

胸は、大きくても小さくてもいける派です。

（自分の性癖を暴露したか……）

ちなみに幼女は、半脱ぎが好きです。

（何故知って……ひ、酷い出鱈目じゃな！）

あと、他人が調教されてるのを見て興奮しています。

（それは誰も知らない筈！？……は、はは、こ、こやつ
の寝言は、う、嘘が多いいのお）

それから……隠れシンデレです。

（違うから！）

君の瞳に……メラゾーマ

（殺す気が！？）

ザラキ、ザオラル、ザキ、ザオリク……ククク、死にたいか？

（拷問中！？）

マダンテ、間違えた、ベホマ……すまない、間に合わなかった……

（そんなバカな！？どこに間違える要素が！？）

こんなに、強いなんて……犯人は、猫……

（何故負けた！？）

・

・

・

よく寝た。

（アレで最後！？）

何が？

良い夢見てた気がするな！

（……それは、よかった）

でも、どんな夢を見たか覚えてないんだよね
前は覚えてたのに……おお、あの猫だけ思い出した。

（考えるな、感じるんだ！）

まあ、どうでもいいか。

（どんな猫だった！どうしても気になる！）

あゝそう言えば、この三人どうしよう？

（無視！？無視ですか！？教えてください！！）

とりあえず、布団でも被せておくか。

（猫ってなんだ！どんな猫なんだ！教えろ！！）

さて、水浴びでもしてくるか。

ベタベタしてかなわん。

（御主に勝つ猫ってなんなんだ！教えろお！！）

うるせえな。

黙ってろ。

（冷たい！？でも、気になるんだもん……教えてくれても良いじゃん……）

いじけるな。

教えてやるから落ち着け。

（ホントか！）

ああ、猫って言うのは……

そこで、腹が鳴る。

栄養を取らないと、倒れるかもしれない。

「何か作るか」

（猫は！？）

そろそろ面倒になってきたので、念話を遮断する。

（猫——）

さて、飯でも食うか。

第三十三話（後書き）

「次回予告！」

「早い!?」

「タバサストライク発動！炎蛇？だから何？俺は、俺の道を貫く！
以上！後書き終わり！」

「まだだ！まだ終わらんぞぉ!!」

「今までとは違うのよ！今までとは!!」

「チツ……話す事は、無い！」

「断言した!?」

「じゃあ、寝てる間に何があったか知りたい」

「あ、それ私も」

「……なんかの記念で、第三回とか第四回でやるんじゃないのか？」

「つまり、作者が詰まったらわかると言う事か！」

「作者詰まれ！」

「こいつら最低じゃ！」

「腹減った、早く飯食べよ」

「私も」

「……では、また次回」

第三十四話（前書き）

やっちまった感がある。

続き、どうしたもんかな

何とかなるよね？

第三十四話

日が沈み始めた頃、ティアが起きて来た。

「……お、おはよう、ございます」

「ああ、おはよう」

何やら顔が赤い。

モジモジと言うか、ソワソワと言うか……正直、鬱陶しい。

「他の二人は？」

「え、あ、まだ寝てるみたい、です」

なら、先に帰ってようかな？

イルククウがいれば、いつでも帰れるだろ。

「二人に先に帰るって伝えておいてくれないか？」

「え？………わかり、ました」

残念そうに、肩を落とすティア。

……何か言った方がいいかな？

（自分で考えろ、今忙しい）

仕事モード中は、冷たいな。

「あゝなんだ……その内、また来るよ」

「……はい！」

心なしか、嬉しそうに見える。
俺の気のせいかもしれないけど。

「じゃあな、ルーラっと」

手を上げて、呪文を唱える。

タバサに、なんと言われることやら……

・

・

・

立て籠もり事件が発生していた。

なんだこれ？

どないせえっちゅうねん。

「ライナさん！」

「ん？おお、サイト君……どうしたんだい、これ？」

「実は……」

かくかくしかじか。

超便利。

「へー傭兵どもね……寝てていい？」

「ダメに決まってるでしょ？」

「なら突っ込んでやらあ！！」

「ちよつとま——」

サイト君の制止を無視して、壁を破壊して中に突入する。
中には、女生徒達、教師達、アニー騎士団、話に出てきた傭兵達が

いた。

アニー騎士団は、武器を剣しか持っておらず、かなり苦戦していた。その傭兵どものリーダーであろう、筋骨隆々とした体格と顔の左半分を覆う火傷の跡が印象的な男が、声をかけてくる。

「んん？誰だお前は？」

「そうだな……しがない使い魔だ」

「そうか……なら、消えろお！！」

そいつは、メイジのようで、火球を放ってくる。その火球を右手を払う動作だけで、掻き消す。

「ほう！面白いじゃないか」

明らかに異常な俺に対して、心底愉しそうに、口元を歪める男。一気に終わらせてやるか。

そう思い、一歩前に足を出した。

だが、俺と男の間に、ローブを着た誰かが割り込む。

「おいおい、じゃまだぞ？」

「……アナタでは、勝てません」

「なんだと？……チツ、わかった……だが、ここで殺るなよ？焼きたくなる」

「……一緒に来てもらっ」

なんなんだこいつ？

声からは、男とも女とも見分けがつかない。

身長も、低くもなく高くもない。

とりあえず、言う通りにした方が良さそうだな。

「別にいいぜ？……風よ、かの地に送りたまえ」

その言葉と共に、景色が変わる。

室内ではなく、草原に立っていた。

いるのは、俺とローブのヤツだけ。

ローブのヤツは、驚く事もなくそこに佇む。

「……これは、驚いた」

訂正。

驚いているが、反応が薄い。

「さて、俺と一対一やるんだ……覚悟は良いな？」

「僕に、勝てるんでも？」

僕ってことは……どっちだ？

やっぱ、性別が分からん。

「やってみればわかるさ……終焉のライナ…我が名を、その身に刻め」

「蒼穹のライカ……アナタに、安らぎを」

同時に動く。

妖刀・村雨を創り、斜めに斬りかかる。

ローブのヤツもといライカは、風の剣で受け止める。

「……普通じゃない、何者？」

「それは、こっちの台詞だ」

一旦距離をとり、動きを止める。

俺は、結構全力で刀を振った。

にもかかわらず、こいつは……普通に受け止めやがった。
自慢する気じゃないが、マチさんのゴーレムと違って、力比べで負けない自信がある。

どんな身体してんだ、コイツ？

「……ウインド・ブラスト」

「む……アクア・スプラッシュ！」

風の衝撃波と水の柱が、お互いを相殺し合う。
魔法も互角か……これは、予想以上にキツイな。

「強いね……」

「そつちこそ……」

それだけ言うと、お互いに喋るのをやめる。
本気でやらないと、ヤバイね。

どうしたもんか……ま、どうにかなんだろ？

第三十四話（後書き）

「えー今回は、ライナと幼女がいないので、私と水の精霊で進めたいと思います」

「何故私が……」

「作者のお気に入りの人だから」

「……そうか」

「ライナと同等の敵、出てきちゃったね」

「どうせ勝つだろ？」

「さあ？ウチの作者、テンプレ大好きだし……負けた後に勝つっていうのをやるかもよ？」

「まあ、何かしら考えて……無いんだろうな」

「仕事が忙しいぞ！」

「あ、幼女」

「む、まだやっていたのか」

「いいじゃん……そうだ！あんたなら何か知ってるんじゃない？」

「……言えるわけ無いだろうに」

「もう、次回予告で良いじゃないか」

「しょうがないわね……次回！最強主人公のピンチ！？お前に、最強の呪文を見せてやる！……何する気なのかしら？」

「さあ？」

「まあ、ウチの作者だし……何とかなるか！」

第三十五話（前書き）

全開の続き、です！

眠いのを我慢して、書きました！

うちの主人公に、シリアスは向かないのですよ。
全ては、ギャグに……出来たら良いな。

第三十五話

「マヒャド!」

「エア・トルネード」

「テンペスト・フレア!」

「エアーズ・ストライク」

「ベギラゴン!」

「ウィンド・ウェーブ」

ここで、お互い攻撃を止める。

風のスクウェア、いや、俺と同じヘキサゴンか……

ドラクエの魔法を使ってる分、俺の方が有利な筈なんだけど、強いな。

ふざける事すら出来ない。

「あなたは、何故戦うのですか?」

「戦う理由? 決まってる……そこに敵がいるからだ」

(ふざけてるじゃん)

黙れ。

「そう……今の生活に、満足してるんだ」

満足……もう少しギャグ要素が欲しい。

(意義あり!そこは十分満足出来てる筈だ!)

「だがしかし!俺にはまだ足りない!」

「ッ!?何が足りないというのですか!」

あれ？

（……わ、我は知らんぞ……おっと！急用が出来た！では、さらばだ！）

ちよ！おま！……荒らして行きやがった。

後でたっぷりと言葉攻めにしてやるか。

さて、どう乗り切ろう……俺の魔王魂に任せる！

「この程度で、満足など出来る訳が無い！……もっと、もっとだ！」

このタイミングで来る言葉といえば……アレだ！

「もっと輝けええええええ！！！」

勢いに任せて、手を上に掲げて魔力を解放する。

限界など存在しないと主張する様に、魔力が掌の上に収束されている。

「これは！？バカな！こんな魔力を解放したら死ぬだけだぞ！」

死ぬ？

俺が？

「クク、クク、アッハッハッハッハッハ！」

ただただ、笑う。

心底可笑しそうに、笑う。

「死ぬ？この俺が？ありえないな！俺を、お前と一緒にするなよ」

忘れかけていたが、俺の魔力は無限。

つまり、無くならない。

絶対に。

だからこそ！

「こういう使い方が出来るんだぜえ！！」

収束した魔力に、無理矢理属性を付加させる。

「お前に見せてやるよ……俺の切り札その一！」

「こんなの、ありえない……」

俺の掌にある魔力は、収束した分だけの有限の力。

それでも、今、ここにある。

四属性の理を無視した、第五の属性が、ここに誕生した。

その力は、光。

「さーて、ちとキツイが、光光光火風風のペンタゴンスペルってか？」

「クソッ！ウインド・クラッシュ！」

ライカの焦った声。

その掌から、不可視の風の塊が吐き出される。

「遅い！ライト・ザ・ブレイカー！！」

光が集まって、一本の槍となり、ライカに向かっていく。
不可視の風を貫き、ライカに迫る。

「しま——」

ライカぶつかる瞬間に、爆発する。
少しして、爆煙からライカが出て来る。

「……何故、殺さなかった？」

その声から、問題の答えを知りたがる子供の様な、そんな響きがあった。

「決まってる……お前の顔を見る為だ」

爆発の衝撃自体では、ダメージを食らわない様にしておいたが、その爆風は、校長のかつらすらずらす。
フードが捲れて、ライカの顔を晒す。

男の様な鋭い目つきをしているが、間違いなく女であると分かる顔立ち。

簡単に言えば、めっさ美人です。

「好きです！付き合ってください！」

（どこの男子高校生だ！）

男子高校生以外にもいるだろ！

バカにしちゃいけない！

（大体が、そんな言い方で落ちる女がいるわけ……）

「す、好き！？な、何を、言ってるんだ！？わ、私と、お、お前は敵同士なんだぞ！？」

（あ、落ちてる）

俺の言葉に真っ赤になって、アワアワしだすライカ。
こうして見ると可愛いな。

なんて言えば良いのか……うん、ペットに欲しい。

（この外道が！）

「お、男に、好きと言われるなんて……い、いや、ホントに好きな
のか？空きとかの間違いじゃ……」

「何言ってるんだ？なんだったら、愛つまりラブと言っても良いぞ？」
「ふにゃ！？」

良いキャラだ。

是非とも欲しい。

（さっきまでの、緊迫した雰囲気はどこに……）

「ライカ、俺のモノベツトになれ」

「あ、あう、そ、その、あの、よ、よろしく、お願いします……」

（お願いしちゃったよ……）

いや～よかったよかった。

さて、帰るか。

……なんか、忘れてない。

……あ。

「学園どうなった……」

（原作通りじゃ）

原作がどんなのか覚えてないけど……まあ、何とかなんだろう。

第三十五話（後書き）

「と言うわけで、僕っ子ペットのライカです」

「こ、こんにちわ」

「ケッ！読者に媚売ってんじゃないわよ」

「どうした魔法少女型幼女吸血鬼？」

「……その喧嘩買った」

「……良いだろう……そろそろ決着を付けようじゃないか」

「えゝ二人がどこかに行ってしまったので、俺とライカで進めたいと思います」

「あ、あの、本編のは、その、嘘なんだよな？」

「そんな分けないだろ？ご主人様と呼べ」

「はう！な、なんだこの感じ……よろ、こんでる？」

「どうしたんだ？ほら、言ってごらん」

「は、はい……ご主人様」

「良い子だ……そんな良い子には、ご褒美をあげよう」

「あ、ご主人様……そこは……ああ！」

「放送コードに引っかかりました、しばらくお待ちください」

「うむ、良い反応だ」

「はあ、はあ、はあ……ご、ご主人、様……いいです」

「さて、良い感じに調教できたし、次回予告行ってみるか……一人でやってごらん？」

「はい！次回！コルベールに話しかけた！しかし返事が無い、ただのハゲの様だ！ご主人様！出来ましたよ！」

「よく出来ました……じゃあ、ご褒美だ」

「ふあ……ごしゅじんしゃまあ！！ひゃあーらめえ！！」

「お前らは少し、自重しろ！」

第三十六話（前書き）

オリキャラのライカどうしよう？

ちよつと強くしすぎたかな？

まあ、何とかなんだろ。

第三十六話

学園に戻ったら、コルさんが気絶していた。

どうやらシャルが、仮死状態にしているようだ。

何の意味が？

「ライナさん……見てくださいよ、この綺麗な顔……死んでるんですよ？」

サイト君……生きてるじゃん。

言った方が良い？

「ライナ！お前なら……お前なら、生き返らせることが出来るんじゃないのか！」

「……いや、（死んでないから）無理だ」

「クソ……こんな……」

なんだ、アニーはどうしたんだ？

ま、まさか！？

実はコルさんがアニーの住んでいた村を滅ぼした者であり今までずっと探していた相手だったが今はもう動かない（生きてるけど）コルさんを前にやり場の無い怒りを胸に秘める事になった……とか！？
……出来すぎだな。
ないない。

（この短時間に、そこまで推理できるお前の頭がおかしい）

おかしいなんて言うなよ……照れるだろ？

（褒めてないわ！）

それにしても、なんで起きないんだ？

ハッ！わかったぞ！

仕事がめんどくさくなってきたからどうにか仕事をやめる方法を探していたら偶然傭兵連中が現れたのでシャルに協力を仰ぎ死んだフリをして合法的に仕事をやめる事に成功した……だから起きれないんだ！

うん、これには説得力がある。
間違いない！

（……ないわ〜）

ここは大人の対応として、協力してやるか。
生きてることが、ばれない様にすれば良いんだろ？
燃やせば良いんじゃない？

（いや、死ぬから）

凍らせる。

（永遠に目覚めないから）

決り取る。

（何を！？）

つまらんけど、何も言わないでいいか。

（最初からそれで良いだろうに……何故ボケる？）

そこにツッコミがいるから。

(……そうかい)

この場においても特にする事が無いので、気配を消して部屋に戻る。
部屋には、ライカがいた。

「ラ、ライナだったか？僕はこれからどうすれば……」

コイツにライナと言われると、違和感がある。

「ライナ君って言ってみ」

「え？あ、うん……ライナ君」

「違うな……ライナさんは？」

「ライナさん……あの、何の意味が？」

違っただよな……こう、もっと捻った感じの……そう！

「ご主人様！」

「え？ご主人様？……あれ？」

「これだ！これから俺の事は、ご主人様な！」

「へ？……わ、分かった」

ところでコイツ、なんなの？

(今更！？)

昨日までの俺と同格とか……かなり強いじゃん。
実は俺と同じで、転生者とか。

（御主のいる世界に転生すると可哀想だから絶対に転生しない）

危険人物扱いキター。

ワロス。

「おーい、大丈夫か？」

幼女との会話に夢中になりすぎて、ボーっとしてたようだ。

「考え事してたわ……お前ってさ、結局誰なの？」

「ライカだけど……蒼穹のライカって、名乗らなかつたっけ？」

「そういうんじゃないかって……そう！どうしてそんなに強いのか！」

「ああ、僕はドラゴンに育てられたんだよ……風韻竜の老体なんだけど」

ウチのアレとは違うようだね。

まあ、比べるまでもなさそうだけど。

「そう言うご主人様は、どうしてそんなに強いんだ？」

律儀にも、ご主人様って言うの守ってるよ。

真面目だね

「幼女に貰った」

（言っちゃダメだろ！そういうのは、もっとう、最後の場面とかで……）

「幼女？……最近の幼子はすごいんだな」

（言葉のままに信じた！？何なの！？バカなの！？死ぬの！？）

落ち着きなさい幼女。

あと、そのネタは俺がやるつもりだった。

（知るか！隕石の直撃でも食らって死んでしまえ！）

その程度で死ねると思いますか？

（…… 思わない）

だろ？

なんか、もう、眠いな。

「ご主人様の使っていた魔法……アレはなんなのですか？」

「あゝ幼女に貰った」

「そうですか………どんな幼子なのだろうか？」

幼女に貰った、なんて便利な言葉。

これからも使うか。

妙に眠いな。

魔力の使い過ぎか？

「眠いから寝る……ライカ、俺の枕になれ」

「ふえ？……な、何言ってるんだ！？そ、そんな、は、恥ずかしい事、出来るわけ……」

「とう！」

「ひゃ！？」

ライカに飛び掛り、ベットに押し倒す。

ライカを抱き枕の様にして、目を閉じる。

「はう……こ、こんな……あ、でも、暖かい……うう、恥ずかしいのに……」

枕がモジモジするので、強く抱きつくと大人しくなった。

「おやすみ」

「……お、おやす、み」

おやすみ、愛しの少女。

（うるさい黙れ消えろ）

え？なんで怒ってるの？

あ、女の子の日ですか。

（んなもんじゃないわボケ）

まあ、いいか。

少女だし。

そのうち、いつも通りになるだろ。

枕が動いてうざいな。

第三十六話（後書き）

「ライナと！」

「ラ、ライカの！」

「「お悩み相談！」」

「「うぜえ」」

「幼女二人がぐれた！？」

「私の存在が薄くなってきた」

「私の出番が無くなってる」

「幼女の存在はもともと希薄だろ？」

「代わりに影が濃いと思う！」

「出番はもともと無いだろ？」

「僕のせいで……申し訳ありません、先輩」

「ライナは、相談に乗る気があるのか？」

「ライナだし……無いでしょ」

「相談も終了したようなので、次回予告行ってみよう！」

「わかりました！次回！サイトとルイズ、旅に出る？ライナ、二人を見送る！準備期間、入りました！次回予告は、絶対ではありません！ん！」

「よくできました」

「「えらいえらい」」

「てか、最後の絶対作者のせいで言う事になったろ」

「「「言わないであげて」」」

「そろそろ第三回が来る筈！」

「「あゝ確かに」」

「仲良いですね、次は僕も出ますよ！」

第三十七話（前書き）

久しぶり！

……だよね？

よろしくお願いします。

第三十七話

目が覚めると、俺とライカが裸になっていた。

「…………え？」

記憶では、確かに服を着ていたはず。
なぜ、脱いでる？

「ん……………あ、ご、ご主人様…………あの、その、次は…………優しく、
してくれると、うれしい」

俺は…………なにをした？

（ナニをした）

幼女に茶化された！？
屈辱だ！

（よく思い出してみると良い…………自分が、ホントに無意識にやった
のかを、な）

幼女が、幼女がいじめる！

…………良いかもしれない。

（あ、もうダメだコイツ）

とりあえず、服を着て外に行く事にする。
なるべく布団をめくらない様に。

布団の中がどうなってるか、見たくないじゃん。

「どこか行くのか？」

「……あゝまあ、あれだ、（正妻に）報告しに」

「そ、そうか……（この責任者に）報告するのか……」

（……似た者同士、だな）

・

・

・

カトレアの部屋に行くと、何故か押し倒された。

しかも、一瞬だったが、シャルがいた。

珍しい組み合わせだな。

「ライナ君……知らない女の匂いがするわ」

「お前は犬か……あれだ、お前が正妻だと言うのは認めるから、首に杖を向けるのをやめてくれ……この距離でやられるとヤバイ」

主にカトレアが。

俺？カトレアの魔法なら、多分掠り傷で済むんじゃない？

（……ホントに、人間やめておるのな）

俺はいつか、神になる。

むしろ、神殺し。

（……無理だと言いたいが……なれそうで怖い）

安心しろ！少女には、何もしないから。

幼女には……な。

（転生させてしまった事が……ホントに悔やまれる）

それが、大人つてものだ。

さて、幼女との会話（約五秒）を終了して、カトレアと会話する。

「四人と関係を持った」

「手が早いね」

やった記憶は無いがな。

「ライナ……どういうこと？」

シャルからオーラが出てる様に見える。

冷や汗が、頬を伝う。

「あゝなんだ、俺、カトレアと、婚約？している、あと、他の女と、関係を持った、つまり、エロイことを、した、俺、最低……オーケ
ー？」

「……私とは？」

「……何の話だ？」

シャルがわけの分らない事を聞いてくるので、首を傾げる。
今の会話で、何故シャルが関ってくるんだ？

「そう……諦めない」

「よく分らんが、頑張れ」

「私の前でその発言……宣戦布告かしら？」

カトレアとシャルの間に火花が散っている、幻覚が見える。
コルさん、どうなったのかな？
まあ、どうでもいいか。

「ライナも、若い方が良い」

「若いだけじゃ、ライナ君の相手は務まらないわ」
「年増よりは、役に立つ」

「小さい子供に、何が出来るの？」

……えゝ失礼します。

気配と足音を消して、部屋から出る。

「……サイト君でも、殴るか」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

「風風風風風風の！稲妻蹴り！」

（殴らないの！？）

「なん、ぐふえ！？」

ブラズマを足に纏って、どこからか帰ってきたばかりのサイト君を蹴り上げる。

大体二十メートルほど飛んで、落ちる。
骨逝ったかも。

ベホマをかけようと思ったけど、あえてベホイミにしてみた。
外傷は治っても、骨は治らず。

あと、幼女と痛覚を共有させてみた。

ルイちゃんは、サイト君が落ちる前に何所かに行ってしまった。

「イッ
タアアアアアアアアアア！！！！！！」

(ギィヤアアアアアアアアアア!!!!!!)

「ククク、良い声で鳴くじゃないか、クク、アハハハハ！」

のた打ち回るサイト君を見下ろし、幼女の悲鳴に耳を傾け、高笑いをする。

「ギヤアアアアアアアアアア！！！！！！」

(イダアアアアアアア！！！！！！！)

「アッハッハッハッハッハ！！！」

約十分ほど、そんな光景が続いた。

•
•
•
•
•

•

•

•

•

飽きた。

怪我を完全に治して、サイト君から離れる。

「あ、が、ぎい……カハッ！」

サイト君が、未だにピクピク動くので鳩尾を踏んだ。

相変わらず、暇だ。

幼女？さあ？

「ん？あ……放置でいいか」

返事をしないただの屍になってしまったサイト君を放置して、歩く。

誰かいないかなあゝ

学園内を、ダラダラと動き回る事にした。
暇を潰せるものを探して。

第三十七話（後書き）

「俺！参上！」

「僕！降臨！」

「この二人うざい」

「足が、痛い……」

「今回でカトレア、イルククウ、マチさん、ティア、ライカと関係を持ったな」

「凄く、大きかった……」

「誰か止めて」

「うう、何故我がこんな……」

「まあ、過去を悔いても仕方が無い！」

「正妻のカトレアさんを除くと、妾は後、四人かな？」

「アニエスとシャルロット、後は私ぐらい？」

「……水の精霊とか」

「俺は未来に生きる！」

「「「あるかもしれない」」」

「何が？まあ、いいか！次回予告、だあ！！」

「次回！祭りだあ！俺の歌を聴けえ！」

「ホント、真似するの好きよね、作者」

「我は、横になつてくる」

「「次回も見ないと、後悔するぜえ！！」」

「またね」

第三回・忘れた頃にやってくる！（前書き）

全力で考えた。

笑っていただければ……失笑程度でも……まあ、見なくても……いやいや、見てもらわないと……え〜どうぞ。

第三回・忘れた頃にやってくる！

ラ「チキン作者は置いといて、また来たぜえ！」

よ「なんか、熱血キヤラになってきてるんだが……」

ラ「ちなみに、エリザベスとドMはお休みだ！エリザベスは、誰かが助けを求めているとか言っただけで行った」

よ「本気で、魔法少女やってるんじゃない」

ラ「ドMは……やりすぎた」

よ「何を！？」

ラ「と、言うわけで！今回は俺と幼女の二人だけ！たつぷりと楽しもうぜえ！あと、幼女！」

よ「な、なんじゃ？」

ラ「お前のツツコミ……期待してるぜ？」

よ「……あ！ボケる気満々って事ね！」

ラ「手加減なんてしないからな？」

よ「ゲスト呼ぼう！！」

ラ「却下だ！！久しぶりの二人つきりなんだ……なあ？」

よ「む……二人つきり……ヤバイと思うのは、我だけだろうか？」

ラ「俺、お前の事が！」

よ「と、唐突になんじゃ！？」

ラ「好きだ！」

よ「いろんな意味でアウトオオオオオ！！！」

ラ「チツ……ふられたか……だがかし！俺は執念深いぞ！」

よ「やめて！恥ずかしい以前に怖い！こんな告白ありえない！」

ラ「クク、俺に狙われたが最後、どこにいても見られてる気がする様になるだろう……あ、プライバシーはちゃんと守るぞ？」

よ「お主ホントに人間か！！」

ラ「いいえ、ケフィ。です」

よ「ここでボケた！？」

ラ「俺、ギター弾けるんだぜ！」
よ「どうでもいい！」
ラ「とまあ、ギターは置いていて」
よ「何故言っただし!？」
ラ「もしもシリーズ行ってみよう！」
よ「いきなりどうした!？」
ラ「ゼロ魔の世界以外に行きたいという事だ！」
よ「……さ、作者だ——」
ラ「ウチの作者が、俺に逆らえんでも？」
よ「作者に何をしたああああ!?!」
ラ「別に何もして無いけど？行きたいといったら、幼女の許可があればいいらしい」
よ（丸投げしおったな!）
ラ「行っ方がいいか！」
よ「……壊しすぎなきや、いいんじゃない？」
ラ「よっしゃ！行くぞライカ！」
よ「いたの!？」
ラ「いないけど？」
よ「じゃあ言うな！」
ラ「ノリ？ライカには御使いを頼んだ」
よ「何を頼んだんじゃ？」
ラ「どうでもいいけど、幼女の声ってどっかで聞いたことあるんだよなあ」
よ「無視か!？会話の拒否か!？」
ラ「確か、こう……ブルータス？」
よ「何故に!？」
ラ「Fateのイリヤかな？」
よ「伏字にしないでいいのか？」
ラ「え？あ……Fateのイ。ヤかな？」
よ「ちよつと遅かったね」

ラ「諭された！？屈辱だぁ！！」

よ「酷い！普通に言っただけなのに！」

ラ「なう」

よ「意味わかんないから！」

ラ「帰ったか！ライカもといそうきゅん！」

よ「それはギリギリアウト！！」

そ「ただいまです……可愛らしい女の子ですね？」

よ「一応知ってるだろ……幼女だ………今、名乗るチャンスだった？」

ラ「おお！コイツだよ！」

よ「ん？何を買ってきたんじゃ？」

そ「ハ。橋という物です」

よ「何買いに行かせてんの！？というよりどうやって買ってきた！？」

そ「……そう言えば、どうやって買って来たんでしょう？」

ラ「うまーい！具が大きい！」

よ「知ってる人に失礼だ！」

そ「でも美味しいよ？」

よ「……我も貰おう」

ラ「俺と幼女つて、何の話してたっけ？」

よ「んゝ記憶に無い」

ラ「どうでもいい事か！」

よ「そうだな！」

そ「別世界に行きたいとか言っただけだった？」

ラ「よ」「……あ」「」

そ「忘れてたんだ」

ラ「気にしたら負けだ」

よ「その通り！」

そ「……幼女さんの声……どこかでブルータス？」
よ「お前もか！？」

ラ「唐突だけど、俺の声、聞き覚えない？」

よ「……ライカよ、お主は最近どうしてるんじゃ？」

そ「え？そうですね……のんびりしてますね」

ラ「ほう、無視か？」

よ「あゝほら、好きな食べ物は？」

そ「野菜です」

ラ「いい度胸だ」

よ「よ、よく使う武器とか」

そ「さあ？」

ラ「よし、そこに直れ、殺してやる」

よ「すいませんでした！」

そ「……またね」

第三回・忘れた頃にやってくる！（後書き）

カット！

まあ、楽しんでいただけたかな？

またね～

第四回・連続は無いと思っただろ！（前書き）

こんな事があっても、いいじゃない？

ごめっくり？

第四回・連続は無いと思っただろ！

よ「作者（笑）がすまんの」

ラ「作者なんてこんなもんじゃね〜の？」

よ「他の作者はこんなにならけないであろう？」

そ「それは、どうでしょう？」

三人「……どうでもいいか」

ラ「今回は、寝てる間に何があつたか！気になってる人は……そんなないか」

よ「正直どうでもいい」

そ「じゃあ、簡単に説明しちやいますね〜イルククウ、マチルダ、ティファニアの三人の時は、遍在を使っていたらしいですね……僕の時は、快樂だけを通常の数十倍にする魔法を使つたらしいです」

ラ「あっさり終わったな」

よ「こんなもんじゃろ……あの二人は今日も休みか？」

ラ「……そのうち来るんじゃね？」

そ「あの方が、水の精霊ですか？」

み「何時の間にか新キャラがいる……Sではない、か……貴様に用は無い」

よ「よし、今すぐこいつ消そう」

ラ「物騒なヤツだな……おい、俺の椅子になれ」

み「了解！」

そ「……水の、精、霊？」

よ「世の中こんなもんじゃ」

エ「たっだいま〜ん？誰それ？てか、まだやってたの？」

ラ「現在二回目で、コイツはライカだ……おい、動くなよ」

み「動いたらご褒美ですか！？動かなくてもご褒美ですか！？」

よ「……うわ〜」

エ「救いようが無いわ」

そ「……両方、ご褒美なんですか？」

ラ「で、何する？」

み「放置プレイ……ご褒美ですね！」

よ「……誰か呼んだら？」

ラ「じゃあ……河童」

エ「何故？」

ラ「妖怪皿洗い」

そ「良い妖怪ですね」

ラ「魔王ラ。ール」

よ「呼んだらただじゃおかないからな？」

ラ「じゃあどうしろってんだよ！もの。け姫のシ。神でも呼べってか！？」

よ「お主は偏りすぎなんじゃ！」

ラ「偏りすぎ？……魔法とかが使えて、話のできる、変態」

エ「何故変態！？」

ラ「ネギ。のアル？」

よ「絶対呼ぶなああああ！！！」

そ「どうしてそこまで拒絶を！？」

ラ「幼女好きだからじゃね？」

エ「それ、私も危ないじゃん！？」

よ「何故別作品からしか選ばうとしない！」

ラ「番外編的な感じだから」

よ「……それもそうじゃな」

ラ「と言うわけで、エヴァン。リオンのアス力でも呼ぶか」

よ「何故そのチョイス！？」

エ「誰よ？」

そ「ツンデレな気がしますね」

み「えへへ、ずっとこのまま……」

ラ「えゝこの魔方阵がこうなって、ここの術式をこうして、魔力を込めて……召喚！あ、間違えた」

第四回・連続は無いと思っただろ！（後書き）

水の精霊……どんだけ。

なにやてんだろ？

第三十八話（前書き）

さて、次はどうしよう？

アレだ、つまり、戦争どうしよう？

イレギュラー的なものを出さないと、絶対勝つんだが……

ちなみに、今回で、新キャラが二人増えました
拍手

第三十八話

「祭りだああああ!!!!」

俺は今!熱血してるうううう!!!!

(古いネタを持ってくるな!)

降臨祭らしいが、俺には関係ない!

祭りと付くものは、常に全力で荒らして行くのが俺だあ!!!

(傍迷惑な!)

即席でステージを作成して、魔法で声を大きくする。

「主役は、俺だああ!!!!」

(……まあ、お主だわな)

啞然としてる、一般人。

見ろ!人がゴミの様だあ!!!

(……主役?)

「俺の歌を聴けええええ!!!!」

(だからな……もう、いいか……今は、そっとしておこう)

・
・
・
・

（落ち着いたか？）

……俺、何してたんだろ。

あ、サイト君とルイちゃんだ。
言い争ってる。

よし、無視しよう。

（お主は、ホントにやる気が無いな）

あゝ偶には、家に帰るかなあゝ

（そう言えば……帰る場所があつたな）

俺、家無き子じゃないからな？

・
・
・
・
・

家に着きましたあゝ

途中、幼女が焦った様子で、仕事に向かっていった。
何しにいったんだろ？

まあ、それはさておき……

「……」
「……」
「……」
「……誰？」

こっちが聞きたいわ。

目の前には、純白のエプロンドレスを着た赤い髪の美女がいた。
誰やねん。

「リユーラ様に害なす者か！」
「は？」

訳も分からない状態で、襲われた。
反射的に、体が動き、地面に押さえつける。

「グッ！？……クソ……」
「今の動き、暗殺者だな……お前、なんでここにいる？」
「……貴様には、関係無い」
「……それもそうか」

女の拘束を解いて、家に入る。

「な！？貴様！」
「たっだいま」
「……え？」

俺の言葉が予想外だったらしく、固まってしまった。
そんなんで暗殺者なんて務まるのか？

・
・
・

ビオ・メンテ。

それが、彼女の名前らしい。
伝勇伝の一話限りのキャラじゃん。

見たこと無いと思ったよ。

「ライナ様だと知らず、申し訳ありませんでした!!」

「あゝいいいいよ、十数年も帰ってこなかった俺がいけないんだから」

「ですが!」

と、まあ、こんな感じが続いている。

誰かこの子止めて。

「とりあえず、今この話は終了!そして、父よ!」

「……な、何かな?」

「それは誰だ?」

父リユーラの背中に隠れる様に、こちらの様子を伺う少女。

黒曜石の様な髪と怯えの感情が見える蒼い瞳。

誰だよ……メイドはありえないだろ。

服は、どうやら俺のお古の様だ。

……昔の俺を見ている様だ。

「……えゝこの子は、その……イルナ!ヘルプ!」

「ライナ、妹のフェルナ・リユートルーよ」

簡潔な説明ありがとう。

妹、ね……まあ、あんなだけ仲良くしてれば、こうなるわな。
一瞬で我が妹の背後に移動する。

「ふあ!?!」

「あゝ今のは悪い、えゝフェルナちゃん、でいいのかな?」

「ひゃい!?!」

何故だ……メツチャ可愛い。

目線を合わせる為に、しゃがんで話しかける。

「俺は、ライナ……一応、君のお兄ちゃんだ」

「……お兄、ちゃん？」

「そ、よろしくね？」

安心させる様に、優しく頭を撫でてあげる。

気持ち良さそうに目を細めて、されるがままにしている。

兄って、何すればいいんだ？

（や、やっと終わった……あやつ等、我の事を信用していないな？）

幼女く助けて！

（ん？……ついに子を作ったか？）

違うから。

そろそろ撫でるだけじゃ持たない。

何か無いか！

（……抱っこするとか……違う意味なら得意であろう？）

抱っこ抱くは、違うからな？

フェルナを両手で抱える。

「……お兄ちゃん」

お気に召した様だ。

そして、父が言っではいけない事を言う。

「こうして見ると……親子だな（笑）」

・

・

・

父には、沈んでもらった。

あの発言は、今の俺には、いろいろと問題なんだよ。
気付いたら、裸の女が隣にいる俺にはな……

「あの、いいのでしょうか？」

「まあ、あの人なら大丈夫でしょ？」

「フェルナ、このダンゴのクッションをプレゼントしよう！」
「お兄ちゃんありがとう！フェルナ大事にする！」

とまあ、そんなこんなで、学園に帰ったら……

戦争が始まった。

え？何故に？

第三十八話（後書き）

「兄のライナと！」

「い、妹のフェルナの！」

「「兄妹漫才！」」

「お、お兄ちゃん……漫才って、何するの？」

「ふ、愚問だな、マイシスター！ただ会話すればいい！それだけだ！」

「つ、つまり……生徒。の。存見たいな感じだね！」

「何故知ってるんだ、我が妹よ？まあいい！例えるなら、僕。友達。が。ない。的な感じだ！」

「初期のネギ。見たいな感じだね！」

「完璧だ！さすが俺の妹だぜ！その凄さを例えるなら、俺の。が。こ。んな。可愛いわけ。ない！」

「ツツコミはどうしたああああ……！」

「ひゃう！？」

「おお、幼女……ツツコミがどうした？」

「漫才だろ！？ボケてただろ！？何故ツツコミが無い！？」

「そりゃ、お前、幼女の仕事だろ？」

「……次回予告」

「ぐれたか……俺に構うな！先に行け！……サイト君、カトレアに、伝えてくれ……ごめんと、な？……これが、神の啓示だ……！」

「……長い、てか、俺、死亡フラグ立ててるじゃん！？」

「お兄ちゃんならきつと大丈夫だよ！」

「そう言えば、エルザとライカがいないな……まあ、いいか」

「「「またね」」」

「……あの二人は……クク」

「なにをした！？」

第五回・祝500人記念!!……減ったり増えたりされても変えないよ? (前書

お気に入りが増えたり減ったりしたので、やってみた。

無視しても全然平気です。

ちなみに、続きが思いつかないからやるわけじゃありません。

第五回・祝500人記念！！……減ったり増えたりされても変えないよ？

ラ「ドンドンパフパフ！……言ってみただ、残念な奴にしか見えないな」

よ「なら何故やった！？」

フ「フェルナは応援してるよ！」

ビ「私も味方です！」

み「知らない奴が増えてるな……ああ、そこは、らめえ」

よ「……まあ、そいつを踏みつけるのはいいが、何するんじゃ？」

ラ「エリザベスもないしなあ」

よ「そういえば、何故いないんじゃ？」

ラ「イルククウと一緒に、プ。キュア的なことしてる」

よ「……そうか」

ラ「さて、読者諸君、この話もついに500人がお気に入りに見るほどになった！それを記念して——」

よ「他の作品は、なんだかんだでコラボとかをしているし、我らも

——」

ラ「笑いを取りに行く！」

よ「……なんでやねん」

フ「ツツコミだ！」

ビ「息ピッタリとはこのことですね！」

よ「……チェンジを要求する」

ラ「だが断る」

よ「ですよ〜で、なにをするんじゃ？」

ラ「もういつその事、子作りでもするか！」

フ「……お兄ちゃんと……子作り」

ビ「ライナ様と……」

よ「遠慮する」

ラ「バツサリ！？まあ、いいけど……じゃあ、天下。武道会、しり

とり、自分の昔の事を話すとか」
よ「偏りが……最後のでもいいと思うぞ?」
フ「でも、フェルナ……話せる事無いよ?」
ビ「聞いて後悔しないなら……」
ラ「俺は、天下——」
よ「よし、しりとりにしよう!」
ラ「……ゴミ幼女が……ゴミ」
よ「ミミズ男が……ミミズ」
ラ「寸胴が」
よ「薄汚れが」
ラ「レス」
よ「図々しい」
ラ「芋虫」
よ「死ね」
ラ「眠れ……永遠に」
よ「二回死ね」
ラ「根暗」
よ「ライナとかクソだな」
ラ「舐めんな、下種幼女」
フ「ビオは、なんでフェルナの耳を塞ぐの?」
ビ「言ってる事は悪口でも、しっかりしりとりになってる……フェルナ様は聞く必要ありませんから」
み「……羨ましい」
エ「あんたらは、折角の記念に何をしてるのよ?」
そ「そうだぞ? 醜い心は、争いしか生み出さない」
ラ・よ「「ああ!」?」
エ・そ「「すいませんでした!」」
ラ「おい、愚図幼女」
よ「なんだ、カス男」
ラ「向こうで決着つけようぜ?」

よ「良いだろう……貴様に神の力を思い知らせてやる」

エ「……え、どうする？」

そ「……さあ？」

フ「フェルナわかんない」

ビ「とりあえず、記念になりそうな事をすればいいのでは？」

み「今の状態が、いつものだし、普段やらないことすればいいと思うのだが？」

全「……おお！」

エ「ドMじゃなければ役に立つわね」

ビ「しかし、何をするのですか？」

全「……」

そ「ま、まあ、時間はあるんだ、ゆっくり考えよう」

エ「じゃあ、誰か呼ぶ？」

フ「勇者様に会いたい！」

み「では、ドラクエの勇者でも呼ぶか？」

ビ「あの、呼び出せるのですか？」

エ「……ライナと幼女なら」

み「では、この世界の人物でも呼ぼうか」

そ「それが良いな」

ふ「じゃあじゃあ、お兄ちゃんのこと好きな人！」

エ「たくさんいるから却下」

ビ「……呼べないほどいるんですか」

ラ「クツ……予想以上にやるじゃないか、幼女」

よ「グッ……本当にここまでの力を付けるとは、予想外じゃな」

エ「あ、帰ってきた」

み「とりあえず、私を殴って会話に参加してくれ」

ラ「よ」「分かった」

み「ありがとうございます！ゴフッ」

ラ「さて、殺し合いでもするか」

み「賛成！」

ラ「よし、やめよう」

全『異議無し』

み「そんな!？」

ラ「しょうがない……デュエルしようぜ!」

よ「良いだろう!我のターン!ドロー!」

エ「あんただけで何始めてんの!？」

よ「波動キャノンを二枚発動!貪欲な壺を三枚発動!六枚ドロー!ロード・オブ・ドラゴンを召喚!さらに!ドラゴンを呼ぶ笛を発動!手札より、レッドアイズ・ブラックドラゴンを二体特殊召喚!さらに、フィールド魔法闇を発動!そして、デッキからブルーアイズ・ホワイトドラゴンを墓地に送り、シン・ブルーアイズ・ホワイトドラゴンを手札から特殊召喚!一枚伏せて、ターンエンドだ」

エ「化け物か!？」

そ「禁止カードが入ってる気がします」

フ「公式の試合じゃないからいいんだよ!」

ビ「ライナ様のターンですね」

ラ「俺のターン、ドロー……俺は、サイバー・ドラゴン三体を融合、サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚だ」

よ「な、なんだと!？」

ラ「そして、装備カード、デーモンの斧を装備……モンスターを裏守備表示で召喚、一枚伏せて、ターンエンド」

よ「攻撃力5000か……だが!まだ始まったばかりだ!ドロー!」

フ「気になるけど……そろそろおしまい?」

エ「結局、記念らしい事してなかったね」

み「まあ、いいんじゃないか?何時も通りで……あれが、襲ってきたら……えへへ」

そ「私たちも何かします?」

ビ「五人で、ですか?」

エ「プ。キュア・ファ。ブ?」

そ「気に入ったの?」

フ「戦隊物！」

ビ「怪人はいませんよ？」

み「……次回も、見てくれるかな？」

全「いいとも!!」

み「……また……次回は、ぜひ罵倒してください」

エ「原作とは、見る影も無いわ……てか、今の一瞬だけあの二人も混ざったわね」

ラ「オネストを手札から墓地へ！」

よ「くっ！まだライフはゼロではないわ！」

フ「頑張れ」

ビ「負けないで」

そ「応援してるから」

ラ「フツ……そんなデッキで大丈夫か？」

よ「大丈夫だ、問題ない……波動キヤノンを発動して、6000のダメージ！」

エ「もうそろそろ終わるかな？」

そ「終わるまで待つか？」

フ「もう、眠い……」

ビ「フェルナ様が御休みの時間なので、そろそろ御暇させて頂きま
す」

エ「む！？誰かが助けを呼んでいる！」

そ「三人退場ですか……あれ？僕しかいない？」

み「いや、私もいるが？」

ラ「さあ、終わらせよう！」

よ「我は、このデッキを信じる！」

そ「……」

み「……」

そ「どうする？」

み「終わらせれば？」

そ「えーなんだかんだで、延びましたが、さようなら」

「バイ？」

「何故か、違う意味に聞こえたのですか？」

、終了後、

「バ、バカな!? この、俺が……負けるだ!?」

よ「カードを信じた、私の勝ちだ！消え去れえええええ！！！」

「グアアアアア……負けちったか」

よ「ふふん、我に勝とうなど一ヶ月早いわ」

そ・み「「みじか!？」」

「あれ？終わってるの？」

よ「何時の間に!?!?!?!全然出番がなかったのじゃ」

「それは、俺もだよ……」

そ（一番目立ってたと思うのは僕だけ？）

み「あ！そこ！そこいいの！もつと！もつと強く！ああ！！」

「もっと喘ぐがいい」

よ、「両者が納得してるなら、我は何も言わん」

「ラ、幼女はいい子だ、撫でてやるわ」

よ「わいつて、喜べるか！」

「ノリツツコミか……そんな幼女を、愛してる」

よ、「誰か、パトカー呼んでくれない？」

そ「言い方いい方」

よ「おっと、失礼……誰か、パトカーを呼んでくれぬか？」

「ククク、俺を警察ごとにかできるとでも？」

よ「よし、カリンを呼べ」

ラ「真剣と書いてマジすいませんでした！本気と書いてマジすい
 ませんでした！大事なことで、違う漢字で二回言いました！」

み「あ、あ、も、もう、ダメ……ふあ……」

よ、「そろそろ帰るかの」

「じゃな！」

よ「では！」

そ「僕達も帰ろっか？」

ラ「だな」

み「……………もう、一回」

ラ「フン！」

み「きゅ！？」

そ「…………潰れましたよ？」

ラ「水だから大丈夫だろ？」

そ「そ、そうですか…………」

第五回・祝500人記念!!……減ったり増えたりされても変えないよ? (後書

何、やってんだろ……まあ、書いてて楽しいからいいけど。

次はちゃんと続きだよ?

頑張って考えるから、戦争回。
どうしょ?

第三十九話（前書き）

納得のいかないで、かもしれない。

ま、戦争なんてこんなもんだろ。

……違うかな？

第三十九話

「エロ狸！」

「な、なんじゃ！？」

学園長室に殴り込みしてみた。

特に理由は無い。

何でも良かった。

今は反省している。

（嘘じゃな）

そうですが、何か？

（開き直るな）

学園長もとい狸が、何故俺が来たのか理解できないようで、かなり慌ててる。

俺がここに来た理由は、サイト君達がどこにいるかを聞く為だ！

……どっかで見た気がするんだけど？

「サイト君とルイちゃんが見えないが……どこだ？」

「……御主と一緒に、シティ・オブ・サウスゴータにいる筈なんじやが」

………おお！

そう言えば見たわ！

「ありがとうございます！」

それだけ言つて、ルーラを使う。
サイト君、一人で突っ込んだりしないよね？

・
・
・
・
・

着きました。

ルイちゃんが、ジユオに抱えられてる。
しかも、ルイちゃんに薬を使ったのか、微かに魔力が感じられる。

「ジユオ、お前……いくらルイちゃんが虚無だからって……ないわ
」

「ち、違う！！僕はやってない！」

「犯罪者はな、皆、そう言っただよ？」

「そんな目で見ないで！！」

まあ、どうせサイト君がルイちゃんを巻き込みたくないからとか、
そんなところだろ。

未だに叫んでるジユオを無視して、舞い上がる。
血の匂いがする方へ。

・
・
・
・
・

あゝサイト君、吹き飛んだね。
ゼロ魔終了のお知らせです！

（何勝手に終わらせてんの！？）

ノリ？

（そんなノリ要らん！）

吹き飛ぶ瞬間、魔力を感じたからデルフリンガーが何かしたんだろ。さて、どうするかな？

（お主の最後の使い魔の御披露目ではないのか？）

……忘れてないよ？

（……仕事が入った、通信終了）

終わったらまた掛けるわ。

（……電話じゃないんじゃないが）

空中で静止し、魔力を収束する。

コイツだけは、かなり集中しないと召喚できないんだよね。目の前に、魔方陣が構成される。

そして、最近忘れがちの想像具現を平行して使う。

魔方陣の周りに、賢者の石を六個ほど浮かべる。

魔方陣が徐々に複雑になっていく。

すでに、生きる者が到達できる領域を超えた構成を、薄く笑いながら創っていく。

「さあ……喰い散らかせ」

その言葉と共に、魔方阵から一つの影が這い出て、地面に落ちていく。

地面にはぶつからず、すれすれで停止する。

その姿は、黒い翼と三つの顔を無理矢理くっ付けた様な、歪な形。名をテューポーン。

ファイナルなファンタジーのテュポーンではない。

邪神や悪神の存在だ。

「逃げ惑うがいい……その恐怖が、その焦燥が、その絶望が……俺の渴きを潤す」

それらしい言葉を並べてるけど、たいして意味は無い。かつこ良さそうだから言った。

反省も後悔もしていない。

サイト君をリンチしていた兵士連中が、テューポーンに魔法を放つ……が、全ての魔法を食らってなお、傷一つ付かない。

神の名は、伊達ではない。

矢で攻撃したりしているが、一切効かない。

テューポーンが、攻勢に回った。

次の瞬間には、地獄絵図が出来上がった。

少々グロイので、魔法を使う。

テューポーンもといポーンごと巻き込むことにした。

てかさ、ポーンって名前、弱そうじゃね？

「ペンタゴンスペル！水水水水水のフリーズ・ディメンジョン！」

そして、大地は凍りつく。

氷を割ったポーンが、怒って突っ込んできた。

とりあえず、踵落としを決めて、地面にめり込ませる。

そつえば、サイト君どこ行ったんだろう？

魔力の残滓も、俺の魔法で消滅しちゃったし。

ま、いいか。

サイト君なら、その内出てくるだろ。

ポーンを放置して、帰ろうとしたら、近くにアンドバリの指輪の魔力を感じた。

しょうがないので、取りに行く事にした。

サイト君のこと、探した方がいいかな？

第三十九話（後書き）

「次回で、第二期終了かな？」

「のようだな」

「私の出番が無い！」

「僕も無いです」

「「所詮脇役だからな」」

「……うざ」

「……クスン」

「しかし、何故テューポーン？いつその事イザナギとかイザナミとかアンラ・マンユとかでよかったんじゃないのか？」

「だって、悪タイプが欲しかったんだもん！」

「ポケ○ン扱いか！神をなんだと思っておる！」

「命の恩人」

「……まあ、確かに」

「あんたも一緒にやる？」

「そうですね……他にやることもありませんしね」

「次回予告言つとくか！」

「うむ、次回！俺達の最終回が、こんなにシリアスな訳がない……なんじゃこれ？」

「酷いタイトルね」

「シリアスな最終回は、あると思うのだけど」

「……主人公、俺だぜ？」

「「……納得した」」

第四十話（前書き）

暴力の化身になってきてるぜ。

アニメ第二期終了って所ですね。

第三期、頑張るか。

第四十話

殴り倒して、指輪回収。
サイト君、どこだ〜

（端折り過ぎじゃろ）

いいじゃん。

魔法なんか効かないし。

トライアングルクラスなら何もしないで無傷ですが、何か？
スクウェアも切り傷が出来るぐらいだし。

（人間の強度じゃないと思うんじゃないかな……）

む！

神の啓示だ！

（……は？）

ティアの所に行かなくては！
何故かって？

そんなの、ノリに決まってるだろ？

（……あっそ）

・
・
・
・

「とりあえず死ね！」

「なんでグハアアアア！？」

ティアに看病されてたサイト君を蹴り飛ばした。

「ふ……ムシャクシャしてやった、サイト君が良かった、これから
もやり続ける」

「死んだらどうする！？」

「え？もう一回死んでんだろ？」

「……マジッスか？」

ティアの家宝？が無くなってたからな。

ちなみに、俺が改造したから通常の数倍の効力だ。

つまり、髪の毛一本残ってれば、生き返ることが出来るんだよ。

まあ、体あつたみたいだけど。

もう少し早く来てれば……勿体無い。

「もう一回死んでみない？」

「嫌ですよ！？」

面倒なサイト君だ。

ご主人様の所に帰すか？

……あ、シャル忘れてた。

俺も帰るか？

「サイト君、一緒に地獄に帰ろうか？」

「え！？……で、出来ればもう少し」

サイト君は、ティアを見る。

顔より視線が下だ。

十七分割にするぞ？

「俺の女を厭らしい目で見ろな」

「俺の、女……えへ」

「へ？俺の女？……カトレアさんじゃ？」

なんとなく視線を逸らしながら、呟く。

「……もてる男は、辛いぜ」

「……なんて、羨ましい」

「私は、ライナさんのモノ……きゃああああ……！」

何故かティアが逃げ出した。
いきなりどうしたんだ？

「……こういうのが、ハーレムを作るんだろうか？」

「君に言われたくないな」

ルイちゃん、シエスタ嬢は確定だし……他にも数人の女子と仲良いくせに。

生意気だ！

殴っておく。

「グヘ！？」

引き摺って持ち帰ることにした。

ティアの家から出ると、ポーンがいた。
そう言えば、召喚したまんまだっけ？

「帰るか？」

突っ込んででもあしらわれると理解したのか、頷く様に体を揺らす。
その姿が……キモかった。
踵落としを決めておく。
地面にめり込んでいたが、そのまま元の世界に帰した。

「さ、帰るぞサイト君」
「……」

へんじがない、ただのしかばねのようだ。
ズルズルと音を響かせながら、ルイちゃんの下にサイト君を引き摺
って行く。

（……血、出てるぞ？）
「あ」

・
・
・
・
・

「サイト！」
「ルイズ！」

感動の対面ですね。
シャルが近付いてくる。
そのまま杖で撲られた。
クリティカルヒット！
ライナは鼻血が出た！

「痛いって」

「……次から、一緒」

誰か訳せない？

誰か

（今度からは、一緒に行くと言っておるんじゃないのか？）

さすが幼女。

同じチミツ子同士通じるところがあるのか。

（神罰下すぞ？）

やってみろ、返り討ちにしてやる。

（すいませんでした）

まあ、幼女と話すのも良いが、早くシャルに返事しないとまた撲られるんだが。

てか、現在進行形で撲られてるんだが。

結構痛いんだぜ？

この杖、魔改造しようかな。

「悪かったな、今度からは一緒だ」

「……なら、いい」

なんとなく、お姫様抱っこしてみた。

ルイちゃんが、サイト君を爆破してるのが視界の隅に映った。

「んじゃま、帰りますかな……お姫様？」

「……ん」

巻き込まれる前に、退散退散。

この後、大勢に追いかけられる事も知らずに、のんびり歩いていた。

(……女難じゃな)

よー分からん。

はてさて、次はどんな厄介事が起きるのか、今から楽しみだ。

第四十話（後書き）

ラ「神は言っている！全力で逃げよと！」

カ「ライナ君！！」

ア「ライナアアアア！！！！」

マ「逃げんなああああ！！！！」

よ「……殺されるなよ」

そ「カトレアとアニエスとマチルダは、なんでライナを追いかけて
いるんだ？」

エ「ライカ、恋する乙女って言うのは、ああいうものの」

み「指輪、アンドバリの指輪を……返すと言う口実で罵って」

フ「皆集合だね！」

ビ「そうですね」

れ「帰っていいかしら？」

ル「母様、もう少し待って」

タ「お腹空いた」

イ「きゅいきゅい、何か食べたいのね！」

ラ「よし、終わらせよう！」

よ「よく生きてたな？」

ラ「墮としてきた」

よ「……まあ、いい……次回じゃ！」

ラ「次」

そ「回」

エ「！」

み「全」

フ「員」

ビ「集」

れ「合」

ル「！」

タ「崩
イ「壊
カ「す
ア「る
マ「よ
ラ「
よ「無駄に豪華!？」
全「またね」

第六回・皆で騒げ！（前書き）

ラ「作者の言葉は無い！」

よ「とうとう乗っ取った！？」

エ「いつかやると思ってた！」

そ「でも、そこに痺れる！」

み「憧れるう！！」

ラ「よし、始めるか……あ、俺あっちで寝てるから！」

全『却下だ』

第六回・皆で騒げ！

ラ「終焉のライナ！」

そ「蒼穹のライカ！」

れ「烈風のカリン！」

タ「雪風のタバサ」

ビ「影縫いのビオ」

ラ「五人揃って！」

ラ・そ・れ「「混沌の空！」「」「」

よ「……なんでやねん」

ラ「タバサにビオ、ノリが悪いぞ？」

れ「そうよそうよ！折角やってるんだから、もっとテンション上げなさいよ！！」

そ「上げ過ぎな気もするけどね……」

タ「……めんどくさい」

ビ「えっと、申し訳ありません？」

よ「とりあえず落ち着け」

エ「紅き月の使者！レッドムーン！！」

イ「蒼き月の使者！ブルームーン！！」

エ・イ「二人揃って！ムーンプリンセス！！」

よ「ギリギリアウトオオオオ！！！！！！」

フ「カトレアお姉ちゃん！」

カ「あらあら」

み「あゝ水が、足りない……グフツ！」

よ「何故ここにいるし！？」

マ「今度、飲みに行かないかい？」

ア「フム……まあ、仕事に支障が無い程度ならいいだろう」

よ「捕まえないの！？」

サ「ここ来たの初めてじゃね？てか、俺も異名ほしいなあ」

ル「ハン！ダサイ名前！普通にガンダーブルブのサイトでいいじゃない」

ル「何よ！」

ジ「君可愛いね、名前は？僕はジュリオ」

「よしジュオ少年、俺が地獄への片道切符をくれてやるう」

よ「ほどほどにしてやれよ」

ギ「まあ、銀を操れるように、死ぬほど、いや、死んでも特訓した

「キ、ねえ、タバサ……私の出番無くない？」

姫「ウェールズ、愛してるわ」

「これがバカップルって奴だな……初体験、終わったか？」

ラ「初々しいな……羨ましい」

「リア充爆発しろおおおお！！！！！！」

ス「ならば、私が充実させてあげるわ！」

! ? ? ?

デ
ライナに、
敬礼！

死「いやいや、死んでないから！」

よ「……じゃあ、こっちで」

ハ「このハはどういう意味かな？ハゲかな？ハゲなんだな？好きで禿げたんじゃない！！」

狸「まあまあ、人生そんなもんじゃ」

上「あの～上条さんは、なんでまたここにいるんでしょうか？」

な「また呼ばれたの」

フェ「似た名前だと、何かが変になるのね」

ラ「上条さんにタッチ！」

ス「あつら～ん！い・い・お・と・こ」

上「……不幸だああああ！！！！！！」

ラ「フウ、上条さんに……敬礼！！」

よ「……カオスになってきたな……というよりさ、別世界の住人呼ぶなし」

ラ「久しぶりだな、砲撃魔王のなのは嬢に露出型痴女のフェイト嬢
な・フェ「その呼び方やめて！！」

れ「あら、かわいいわね」

エ「三人バージョンどうする？」

そ「こうすれば……いや、むしろ……」

イ「水の精霊も入れた四人バージョンも作った方がいいのね！」

エ・そ「確かに！」

よ「皆、好き勝手やってんな～我も、好きにやろつかな」

ビ「そ、そのような……はう」

カ「ライナ君ったら激し過ぎて……ふう」

フ「？」

よ「帰っていいかな？」

ラ「皆でなんかやろうぜ！」

み「何、を……す、るん……だ？」

よ「消えかけてる！？」

ラ「……しりとり？」

よ「それしかないのか！？」

ラ「いいじゃん！最初は俺こと終焉のライナからな！アルファ・ステイグマ！」

よ「いきなり！？てか、何故名乗った！？」

れ「次は烈風のカリンこと私ね！マテリアル！」

そ「では、蒼穹のライカである僕が……ルーマスト」

よ「微妙にマニアック！？」

エ「次ぎ紅血のエルザ！ストラッシュ！」

ビ「影縫いのビオ、参ります……ユグドラシル」

よ「何この中二ども！？」

フ「創生のフェルナだよ！お兄ちゃんに考えてもらったの！ルールブレイカー！」

マ「土くれのフーケ、カーボン用紙」

よ「普通！」

マ「普通で悪かったな！！」

テ「えっと、虚空のティファニアです……零」

ギ「蒼銀のギーシュ！クルシェフスキー！」

よ「何故知ってる！？」

ル「虚無のルイズよ！九尾！」

シ「侍従のシエスタです！ビルゲイツ！」

サ「……打ち手のサイト、ツツジ」

よ「サイト……普通過ぎない？」

サ「他が以上なんだよ！！」

み「水の精霊、それ以下でも以上でもない……事項成立」

よ「何コイツ！？」

ジ「月影のジュリオ、鶴だ」

ア「メイジキラーのアニエス！ルーマニア！」

姫「嘆きのアンリエッタ、茜色……ウェールズ」

ウ「神託のウェールズ、ロールプレイングゲーム……アンリエッタ」

タ「雪風のタバサ……無理矢理……お腹空いた」

キ「微熱のキュルケ……リス……出番が欲しいわ」

全『またね』

よ「……今ならまだ間に合う！ 我の名は、全能なる——」

F a t eの世界に行ったら……パート？（前書き）

別世界バージョンをやつと書けた！

まずF a t eから。

たぶん、パート？ぐらいまでやるかも。

妄想が続けば。

ちなみに、原作なんて完全スルーします。

崩壊が当たり前の別世界編なんで、そこんところろしく！！

F a t eの世界に行ったら……パート？

「どこだここ！？私は誰！？カトレアはどこ行った！？」
「……え？」

カトレアとデート中、いきなり魔法陣に囲まれたと思ったら、次の瞬間には見知らぬ少女と教会の様な所にいた。
ん？少女？

良く観察する。

白い肌、綺麗な銀髪、血の様に赤い瞳。

そして、低身長。

「完璧だ！」

「な、何が！？」

ビクッ！？となる様子が、可愛い。

しかし、ここはどこなんだ？

ん？頭の中に情報が……聖杯戦争？

へー俺のクラスは、バーサーカーか。

狂化？

ああ、どうりでイライラする訳だ。

まあ、この程度で俺を縛れると思うなっ話。

「えっと、あなたは、バーサーカーでいいんだよね？」

「うむ、その様だぜ！」

「……これが狂戦士^{バーサーカー}？」

何か文句あんのか？

取り合えず、デコピンしておく。

「イタ！？いきなり何するの！？」

「ムカついたからやった、誰でも良かった、今は反省してない」

「反省してるなら……てっ反省してないんか！！」

「良いツツコミだ！」

この幼女とならやっていける！

「俺を従える存在など、存在しない！！」

「クツ！なんて自信なの！なるべく使いたくなかったけど、令呪を持って命令する！私に従いなさい！」

幼女の全身が赤く光る。

何かの強制力を感じる。

なので、俺は――

「だが断る！」

抵抗^{レジスト}してみた。

「……あれ？」

「聖杯だかなんだか知らないが、その程度の力で俺を縛ろうなどと

……片腹痛いわー！」

「……もう、いいや……諦めよう」

なんだか知らんが諦めてしまった。

「まあ、どうでもいいか……これからよろしく、マイ・マスター♪」
「はあ……よろしく、バーサーカー」

・
・
・

場所が変わって、多分ファイルの部屋。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言っらしい。
長いので、フィールと呼ぶことにした。

「とりあえず、ステータスを見せて貰うわ」

そう言って、俺のことを見つめる幼女。
数秒せず、何故か停止した。

「……………はい？」

「どうした？変なもんでも見たのか？」

俺もステータスとやらを確認する。

C L A S S ……バーサーカー

マスター…イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

真名…ライナ・リユートル

性別…男性

身長…体重・186cm・57？

属性…全能・終焉

筋力…A+

耐久…A-

敏捷…A++

魔力…∞

幸運…C

宝具…EX

クラス別能力

・狂化…EX

筋力・耐久・敏捷のパラメータを+3する代わりに、理性を消し去る。

保有スキル

・魔道の心理…EX

魔力を使うあらゆる技術を見ただけで理解する。

・身体強化…EX

最大で四段階強化できる。

簡易強化（魔力で強化）、下位強化^{スーパー}、中位強化（スーパー？）、上位強化（スーパー？）である。

・想像具現…EX

想像した物を創ることが出来る。

オリジナルのアレンジを加える事も可能。

・神性…EX

神と同等の存在。

宝具

・魔道王の証

魔力を使う技術を自在に操ることが出来る。

複合、派生する事が可能。

ランク…EX

種別…対人宝具

レンジ…、

最大捕捉…1人

・幻獣の頂点

契約した使い魔を召喚できる。

契約した使い魔は四体。

ランク…EX

種別…対軍宝具

レンジ…

最大捕捉…1体～4体

・終焉齋す救世主

固有結界。

詳細不明。

ランク…????

種別…????

レンジ…????

最大捕捉…????

うむ、確認した。

普通だよな？

てか、固有結界とか使えたんだ。

「アンタ何者よ！？」

「ライナだけど？」

「アナタホントに元人間！？」

「失礼な！」

「あ、ごめ——」

「元一般人だ！」

「いや、意味分らないから！！てか、バーサーカーなのに魔力無限ってどういう事！？」

「ほら、俺だから」

「どんな理由！？それにどうして理性を保ってるの！？」

「耐えられないほどじゃない」

「それがおかしいのよ！！」

この会話は、二日続いた。

二日徹夜がきつかったのか、マイ・マスターが倒れたのでのんびりしている。

という訳で、今日も寝る。

そういえば、この世界に来てから幼女に念話が繋がらない。暇だぜ。

・

・

・

なんだかんだで、アインツベルン城に来た。

「バーサーカー！どこにいるの！出てきなさい！」

我が麗しのマスターが御呼びだ。

霊体化をするのが面倒だったので、一部屋貰った。

そして、現在……両隣にリーゼリットとセラがいる。何故か全裸で。

「……また、やっちゃったか」

ため息を吐きながら、身嗜みを整える。

この二人は、マスターの世話係と教育係らしい。

それ以外知らん。

なのになんてしまった。

ベットの上だと、理性が無くなる。

ああ、だからバーサーカーなのかも。

僅かに残っている記憶を思い出す。

サラサラの髪。

柔らかい肌。

男を知らない体。

……忘れよう。

「バーサーカー！ここに、い……た……？ッ！？何やってんの！？」

顔を真っ赤にして、視線を彷徨わせるマイ・マスター。

「……大人の遊び？」

「これが英霊！？最低だ！！」

失礼なマスターだ。

ところで、何か用があつたんじゃないのか？

「ところで、何の用なんだ？」

「あ、そうだった！出かけるから運んで！」

散歩に行くらしい。

ちらちらベツトを見ながら言う、ムツツリなマスター。
エロイ幼女だ。

「じゃあ行くか？」

「……そうね」

なんで名残惜しそうなんだ？
最近の幼女は分らん。

・
・
・
・
・

「フッフ、こんにちは、お兄ちゃん」

知り合いらしい。

目の前には、正義感が強そうな少年、凛々しくて妙に輝いて見える美人、なんか偉そうな美少女、赤い外套を纏った中二病全開な青年の四人がいた。

俺は空気を呼んで黙っている。

しかし、肩車で登場したのが悪かったのか、視線が冷たい。マスターが変に強請るから。

「えっと……」（どう反応したらいいんだ？）

「……」（あの男……只者ではないですね）

「……イリヤ、よね」（あれ？あんな子だったかしら？）

「……」（何故ヘラクレスじゃない！？というより、イリヤがただの子供に見える！？）

「あれ？」（予想してた反応と全然違う……なんで？）

そろそろ空気を読むのに飽きてきた。

いつもみたいに、やつちゃうよ？

とりあえず、イリヤを降ろす。

「会話が面倒なので、さっさと戦闘しようぜ！」

皆啞然としてるな。

おいおいマスター、あの空気をどうにかするには、これしかなかったんだぜ？

とりあえず、先手必勝！

F a t eの世界に行ったら……パート？（後書き）

「別世界キターー！！そして、幼女に代わり我がマスターがツツ
「ミ役になったぜ！！」

「解説役とかじゃないの！？」

「そんな役、どうでもいいぜ！」

「微妙にキャラ変わってない？」

「これが俺の素だぜ！！」

「……そ、そつか」

「イリヤ様、ファイト」

「イリヤ様、挫けないでください」

「二人とも、やっぱ美人だよな！」

「……す、少し用を思い出しました……失礼します」

「二人とも顔赤かったけどどうしたんだ？」

「これが、鈍感なのね……」

「ま、いいか！次回予告だ！」

「えゝ次回、バーサーカーの実力！狂化の代償！見る！人がゴミの
様だ！……最後何？」

「気にしたら負けだZ E ♪」

F a t eの世界に行ったら……パート？（前書き）

出来た〜

……うん。

………いろいろ違う、もとい、いろいろ変わる作品だということを頭に置いて見て下さいな。

俺は、悪くない。

そう、カエルボックス……何か違うな……のMAINASUのリーダー的に。

「『僕は、悪くない』」

「何様!？」

「しいて言うなら……王様」

悪魔王です!

ちよつとクールに決めてみた。
キリッ!

「……キモイ」

ライナに∞の精神ダメージ!
ライナの精神は崩壊した!

「……い、生きて、る?」

「……その、様ですね」

「……どんな魔力してんのよ」

「……一発で熾天ロー・アイアス覆う七つの円環の花弁を全て砕くだと……化け物め」

四人が復活した。

てか、死なない様に調整したから当たり前なんだけどね。
多分だが、こいつらは主人公だろう。

だが、それがどうした?

「誰が最初に撲られたい?」

そう笑顔で言うと、全員の顔が青くなる。
マイマスターの顔も青くなっている。
出来れば赤くなって欲しかった。

「サーバントだろ？戦おうぜ！」

元気が足りなかったのかと、ちょっとテンション上げて言ってみた。
約二名、青を通り越して白くなった。
……何故だ。

「も、もういいから、ね？今日はもうやめよ？」

「どうしたマスター？キモいぞ？」

「失礼ね！」

腫れ物を扱うような態度だったので、からかって元に戻した。
帰ってもすること無いし……そうだ！遊んでいこう！

「折角現代に来たんだ……ゲームしようぜ！！」

『……え？』

く回想終了く

這い。れニヤル。さん、面白いな。

ん？おお、終わったか。

なんだかんだで、全員ヤケクソ気味に遊び始めた。

「くっそ、なんでこんなに強いんだ！」

「ここまでの戦力差とは……」

「ちよっ！？何やってんのよアーチャー！！」

「ワ、ワザとじゃないんだ！だ、大体が君とてミスしているだろ！」

「バーサーカー！アンタ何連鎖してんのよー！」

現在、ライトノベル片手にぶよぶよをやっている。
会話から分かる通り、圧勝中だ。

「基本十連鎖だけど？」

「片手でやってるのに何でよー！」

マスターは、相変わらずヒステリックだ。

ハンデは付けたよ？

衛宮士郎とセイバー、遠坂凜とアーチャー、マイマスター、俺の四
チーム。

俺だけファイバー無し。

俺だけ最初から大お邪魔ぶよ。

俺だけ五連鎖以下は、意味無し。

つまり、五連鎖以降からお邪魔ぶよが出る。

こんなにハンデをあげてるのに……弱いぜ。

マスターだけが、ギリギリ着いて来れる位だ。

一対一だと、五分と言った所だな。

ハンデなかったら瞬殺だけどな。

「……そう言えば、マスター」

「何よ！ちょ待った！そこはダメエエエエー！！！」

「俺ら、何で此処にいるんだっけ？」

「……あ」

今思い出したみたいな顔してんじやないよ、全く。

「誰だ、遊びだしたの！」

『お前だー！！』

え？俺なんかしたっけ？

「もういいわ……お兄ちゃん、楽しかったわ……また来るね？」

「えゝあそこ暇じゃん、俺散歩してくるわ」

「じゃあ、私はどうやって帰るのよー！」

「はいはい、バシルーラ」

マイマスターは、光となって、消え去った。

「き、消えたぞー！？」

「まさか、転移魔法！？」

「ホントにバーサーカーなの！？」

「……もう、疲れた……私の友人は、愛と勇気だけでいい」

うるさくなってきたな。

神社行ってみようぜ！

あと教会も！

ギャーギャー騒がしい四人を無視して、のんびりと空を歩く。

昔見たアニメの曲でも歌うか。

題名は、確か……きらめく涙は銀河に？

・
・
・
・

神社到着！

侍がいた。

サムライがいた。

SAMURAIがいた。

「私は、強者との戦いを求めた……だが、刃が当たっているのに、掠り傷一つ負わせられない相手をどうしろと？」

絶賛orzしている武士を眺める。

さっきの凄かったぜ！

斬撃が三つ出たぜ！

しかも同時に！

次元に干渉してるっぽいよな？

俺もやってみるぜ！

とりあえず、このアサシン……誰だ？

（や、やっと見つけた……）

帰れ。

（見つけてやったのに、何その言い草！？）

よし、アサシン（と少女）は無視しよう。

寺が見たいんだ。

他はどうでもいい！

（何故に！？）

さて、俺に解析の魔法……魔術を使ったのは、誰だ？
ボッコボコにするぞ♪

（その笑顔が怖い！！）

やっぱり、少女と言ったらツツコミだよな。

この世界の少女もツツコミ上手だったし。
……なんか、エロくね？

（死ね）

これを見ているであろう、ロリ。ン紳士に謝れ。

（D A M A R E！！）

そのセリフ俺が言おうと思ったのに！？
少女赦すまじ！！

「……聞いている？」

「ん？……怪しいローブの変態がいる！」

「うるさいわ！」

目の前に、紫のローブを着た変な人がいた。

女だな。

胸がある。

尻がエロイ。

声が綺麗。

口紅塗ってる。

そして、俺の勘だと好きな奴がいる！

「この指輪、二つで一つなんですけど……つけた者同士は、嘘がつけなくなるんですよ！浮気防止にピッタリ！奥さん、お一ついかがですか？」

「あら、なかなかいいわね！一つ貰おうかし……てっ違う！アంత何者よ！」

「……今なら、汚れた聖杯を綺麗な聖杯にするサービス付き」

「さて、協力しましょうか？」

これが、女か……スゲーぜ。

(……介入もほどほどにな)

了解だ。

「とりあえず、その指輪貰えるかしら？」

「代わりに、魔術教えてくれ」

「契約成立ね……アナタとなら、良い関係が築けそうだわ」

「関係？何の話だ？ただの等価交換だろ？まあ、今回だけじゃないかもしれないけどな」

「フフ、気に入ったは……私に出来る事があるなら言いなさい……」

私はキャスターよ」

「バーサーカーだ……ちょっとだけイレギュラーな」

……今、ちょっと(笑)にした奴……覚悟しとけ？

「……バーサーカー？」

「ああ、そうだけど？どうした？」

「……ま、まあいいわ」(なんでこんなに理性的なの？おかしいでしょ？狂化は？気になるわ……)

・
・
・
・

教会前。

さっきも来なかったっけ？

ほら、マスターがいた時に。

気のせいかな？

ん？キャスター？

あの人は、話分かる淑女だ。

小さくて、可愛い女の子が好きなんだと！

幼女好きの俺と相性ピッタリ！

え？どうでもいい？

あゝとりあえず、仲良くなった。

以上。

で、今――

「答える雑種……何者だ？」

ここである。

無視していいですか？

金の鎧が眩しいぜ。

F a t eの世界に行ったら……パート？（後書き）

「ハッ！我を出し抜こうなど……三ヶ月早いわ！」

「短くない！？」

「これが幼女クオリティ！」

「いきなり消えたと思ったら、別世界って……何処の主人公だ！」

「……これだけど？」

「ああ、バーサーカーの目が冷たい……」

「さ、さて！次回予告じゃな！」

「うえゝい……ん！次回！英雄王、暁に死す！プライド？名にそれ？美味しいの？また飛ばされた！？次回も見てくださいな！見よ！東方は赤く燃えて——」

「「やめい！！」」

F a t eの世界に行ったら……パート？（前書き）

F a t e編が一段落したよ！

最後に無理矢理伏線だぜ！

後悔はしていない、反省はしている。

てか、ゼロの使い魔やっとな期だよ。

そして、よくよく考えると、この作品、まだアニメで言う二期始まってないね。

……どうぞ見てください。

F a t eの世界に行ったら……パート？

「この我を無視するとは、いい度胸だ！」

「……それは、すいません？」

どう会話したらいいんだろうか？

とりあえず、褒めて、煽てて、担ぎ上げとく？

神よ！迷える子羊に選択肢を！！

(……子羊(笑)……フツ)

デメエ……

「フン！王の財宝！！」
ゲート・オブ・バビロン

その言葉と共に、金ぴかのオレ様イケメンの背後に剣や槍などの無数の武器が現れる。

なんか、カッケエ……

「命乞いをするなら、見逃してやっても良いぞ？」

この人、頭大丈夫？

とりあえず、銃刀法違反で警察に言った方がいいかな？

それとも、精神科に送った方が……

(いやいや、そいつ英霊だから)

なんと！？これが英霊！？

いいのか！？これが英霊で！？

(……その世界の神に言え)

ところで、完全に無視してるけど……いいのかな？
こういう人って、優しくした方がいいんじゃない？

(その優しさが、辛い時もあるのだよ……ぐす)

何か、あつたんだな……

偶には、休めよ？

「キサマアアアア……！^{オレ}我を無視するなと言っているだろうがあ
……」

剣やら槍やらが飛んでくる。

俺流ニフラム逝つとく？

それとも、俺流ザラキ？

いや、ここは……俺流マヌーサで……！

とりあえず、飛んでくる武器の数々を適当に受け流して、詠唱(?)
する。

「水水水風風土とマヌーサで、封じの靄」

「な、なんだこれは！？この！離れよ……！」

青が濃い紫の靄が、金ぴかさんを覆う。

「クソオオオ……！」

害は無いのに、なんで焦ってるんだらうか？

（……あの魔法に、どれだけの魔力を込めたか……思い出してみれば用ではないか？）

別に大した魔力じゃないぞ？

小島を吹き飛ばせる程度だぞ？

（……むしろ焦らない方が凄いわ）

あ、罹った。

これで、あの金ぴかは魔力も宝具とか言うのも使えない。ただ、喧嘩の強いチンピラだ！

（英雄王になんと言う事を……）

英雄王？

俺の尊敬する王は、魔の付く王だけだ。

（結構多くない？）

気のせいだ。

邪魔だったので、金ぴかさんに腹パンして気絶させた。そのまま教会に入る。

「おいおい、ちょっと待ってもらえるか？」

「ん？……変態だ！！全身タイツの変態がいる！！」

教会に入ろうとしたら、全身青タイツの変態が現れた。

「へ、変態？ちょ、ちょっと待て！！」

「イヤアア！！近付かないで変態！！」

「だ、だから待ってくれ！！俺は変態じゃない！！信じてくれ！！」

どうする！？

このままでは、穢される！？

そうだ！殺せばいいんだ！

「という訳で！！マダンテ！！」

「ちよっ！？」

そして、二度と青タイツの変態を見る者は……いなかった。

（……教会の隅で、黒焦げのアフロになってる奴は誰だ？）

さあ？俺には何の事だかさっぱりだよ？

さて、帰るか。

（何しに来たんだ？）

何しに来たんだっけ？

まあ、いいじゃない。

ん？おゝあの少女可愛いな。

（……まあ、頑張れ）

あいよ。

話しかけてみよ。

「ヘイ！ガール！」

「……え？私ですか？」

「オゝワタシ、トオクノクニカラヤツテキマシタ！」

「……ハア？」

「コノマチ、アンナイオネガイデキマスカ？」

「あ、その……はい」

「オーサンキュウ！」

似非外人風に話しかけたら、軽く引かれたんだが……どうしてだ？

完璧だったじゃん！？

何がいけなかった！？

・
・
・
・
・

・

町案内の前に用事があるらしいので、まずはそこに向かう事になった。

途中、少女の体内から虫の気配がしたので、消しておいた。
虫を中に入れるのが、流行っているのだろうか？

まあ、流行なんてどうでもいいけど。

「あ、先輩」

「ん？ああ、桜か……なんでアンタと一緒にいるんだ？」

「ナンノコトデスカ？ワタシ、ニホンゴ、ワカリマセン！」

「……何がしたいんだ？」

なんと、少女の用とは衛宮家に関係があったようだ。
さて、なんとなく似非外人を続けているが、飽きた。
なんだかんだ話していると……

「シロウ！お腹が空きました！」 腹ペコ王（私服版）。

「衛宮君、何か作りなさいよ！」 ツンデレさん。

「少しは大人しく出来んのか……」中二病（私服版）。

「さっきのことで少し聞きたいんだけど……」紫ローブさん（人妻版）。

「私には、あそこを守護するという役目が……」侍。

「ええい！あそこまでコケにされたのは初めてだ！八つ裂きにしてくれる！！」金ぴか王（私服版）。

「俺は、変態じゃねえ！！信じてくれえ！！」青タイツの変態。
アロハシャツ

「お前達は、何をしているんだ……」怪しい神父。

「バーサーカー！何時になったら帰ってくんよ！！」ロリ。

「運ぶに疲れました」ロリの付き人壱。

「一人で行けばいいのに……」ロリの付き人弐。

「……桜」ストーカー（私服眼鏡版）。

何か知らんがたくさん来た。

「……ん？」

「これって、英霊全員揃ったのか？」

俺の眩きを無視して、全員が戦闘体制にはいる。

これは、苛めか？

折角だし、聖杯でも引き摺り出すか？

とりあえず、空間を歪めて聖杯を取り出す。

「？……聖杯！？」

「くくく、これが欲しくば……えゝあゝそのゝまあ、あれだ、うん、武器を向けないでもらえるかな？」

「それを渡せ！！」

俺、嫌われてる？

衛宮君と桜嬢が呆然としてるよ？

どうしたらいいかな？

渡した方がいい？

まあ、アレだ。

何時も通りでいいか。

「願いを叶えたいのだろう？ならば、俺を倒してからにしてお
う！！」

とりあえず、狂化する為に、理性を薄くし、抵抗をやめる。

徐々に、世界が赤く染まる。

ただひたすらに、破壊衝動が湧き上がる。

「オオオオ、ガアアアア！！！」

そこからは、何も覚えていない。

ただ、本能のままに、蹂躪する。

・
・
・
・
・

理性を取り戻し、最初に目に入っただのが青タイトの犬神家コンクリ
バージョン。

普通に無視した。

とりあえず、一言。

「これって、俺のせい？」（笑）

なんだ、焦土と化してた。

うん、これが一番しつくり来る。

「バーサーカー！なんで狂化したのに魔法とか使ってんのよー！」

「え？普通じゃね？」

「普通じゃない！！金髪になったり、髪が伸びたり、速いは堅いは、
霊呪は無効化するは、誰も勝てるわけ無いじゃない！！馬鹿なの！
？アホなの！？死ぬの！？」

「落ち着けマスター」

「落ち着けるかー！」

面倒なマスターだ。

倒れている英霊の頭の中を覗いて、何を願っているのか見た。

一人一人願いを叶えるのが面倒だったので、完全に受肉させて簡単な
願いを叶えられるミニ聖杯を全員に持たせておく。

俺？ほら、そろそろ帰ってカトレアの相手をしないと……怒ってる
かな？

「マスター」

「……何よ」

「家族同士頑張れ」

「え？」

「じゃあな」

世界間の扉を無理矢理こじ開ける。

これで帰れんだろ。

マスターが何か言っていたが、まあ、無視しておいた。
さて、帰ろう帰ろう。

（散々荒らして帰りおった……）

うつせえ。

んゝ伏線張つとくか。

この時の俺は、知らなかった。

また、この世界に来る事を……

こう考えとけば伏線になんだろ。

（御主という奴は……）

Fateの世界に行ったら……パート？（後書き）

「また行かなきゃ行けないのか！」

「まあまあ、どうせ過去が崩壊した未来のどちらかしかやらんだろ」

「崩壊した未来ってどうゆうこと!？」

「俺が介入した、つまりこの後の未来に来るってことか?……めんどくさ」

「いくら飛ばされたからといっても、やりすぎたんじゃな」

「それより、固有結界……使わなかったね」

「……さて、次回予告でもするか」

「そうじゃな、次回!とりあえず行き当たりばったり!作者の気分次第!素直に何も考えていないといえればいいものを……」

「作者が忘れてただけじゃないの?固有結界の存在を作者が忘れてただけじゃないの?ねえ?ねえ?」

「……教えてやろう、何故固有結界が出なかったのかを……それは、俺が強くなりすぎたからだ」

「……納得できたか?」

「……納得した」

第四十一話（前書き）

あけおめ

ことよろ

今回はのんびり回。

第四十一話

「トリスティン魔法学院よ！カトレアの機嫌を取る為に！私は帰って来た！！」

「何やってるんですか、ライナさん？」

「いや、なに、核並みの威力がある魔法で消し飛ばそうかと……勿論、誰も死なない様にな！」

「帰ってきて早々何やってるんですか？やめてくださいよ……」

なんか、サイト君のテンション、低くね？

もうちょっと、テンション上げてくれないと寂しい。

「ん？あ、サイト君ルーンが消えてる」

「ええ、なんか、消えちゃったんですよ……ふう」

なんか、年老いて見える。

とりあえず殴っておくか？

「グハッ！？なん、で……」

「フ、決まっているだろう？……特に意味は無い！！」

さて、何処に行くかな？

ティアの所にでも行こうかな。

（カトレアはどうした？）

カトレア？

帰ってきた瞬間に、まあ、いろいろあったんだよ。

（そうか……サイトの首が変な方向に曲がっているのは、気のせい
か？）

気のせい気のせい。

（まあ、いいか）

一幼女（神）は、スルースキルを手に入れた。
これで、まだ戦える。

（……何とだ）

・
・
・
・

「ティア！やらないか！」

「とりあえず死んどけえええ！！！」

「だけど俺は諦めないiiiiiiii！！！！！」

そして、ライナは星になった。

・
・
・
・

なんだ、夢か。

（いや、今落下中だから）

HAHAHAHA!

何を言ってるんだい、子猫ちゃん！

（凄いウザイ）

最近幼女が冷たいな。
だがそこが良い！

（バカが）

墜落しました。

コンテニューする？

生憎、百円が無くてな……また今度にするわ。

（終わるな！）

冗談だよ、うん、冗談。

ここ何処だ？

しかし、マチさん随分と力強くなったな。

「おや、ライっちじゃないか」

「ん？ビーちゃん！ビーちゃんじゃないか！」

ビーちゃんもといビダーシャルに出会った。

つまりここは、ゲート近く？

どんだけ飛ばされたんだ？

（お前ら、仲良すぎだろ……）

当たり前だろ？

良い奴なんだぜ、ビーちゃんは。

「飛んできたみたいだけど、どうしたんだ？」

「いや、蹴り飛ばされちゃってさ！まあ、それはいいじゃん！良い神酒あるぜ！」

「おお！ライっちの持つてる酒は、かなり美味いからな！すぐに準備しよう！」

（神酒の部分に反応しないのか……）

世の中、順応したもん勝ちだ。

幼女も来る？

（……遠慮する）

そいつは残念だ。

「ほお、良い色をしているな」

「だろ？匂いも味も最高だぜ？」

そして、二人の酒盛りが始まった。

「音声だけでお楽しみください」

「最近どうよ？」

「そうだな……彼女が欲しい」

「あ、そう言えば、基本一人だっけか？」

「そうなんだよ！何でか皆、私に任せるんだ……もう、疲れたよ」

「あんまり人、来ないもんな……」

「それに比べて、ライっちはいいよな……綺麗な嫁さんに、可愛い女の子達に囲まれてるんだから」

「結構きついぜ？なんだかんだで、いろいろな所に飛び回ってるし……それと、嫁じゃねえ」

「もう、いつその事人間でもいいかなって……」

「さらうなよ？」

「さらわないよ」

「なら良かった……てかさ、ゲートなんて破壊すればよくね？」

「それが出来るなら、もうここにいないよ」

「それもそうか！」

「あつはつはつは！ライっちはバカだな！」

「ハッハッハッハ！よく言われる！」

「話は変わるんだけどさ、ガリアでなんかやらかした？」

「あゝそれね……まあ、過去の人の手紙を渡したんだよ」

「過去の人？ああ、死んでる人か」

「そうそう、でさ、まあ、いろいろあつたんだよ！」

「何時もそればっかだな、ライっちは！ハハハハハ！！」

「そう言えばそうだな！ハハハハハ！！」

「ハハハ……うえ、気持ち悪い」

「ハハハ……う、吐きそう」

「……う」

「綺麗なお花畑を想像してください」

「……飲みすぎたな」

「酒は適量に限る」

「そうだな……何本飲んだ？」

「俺は……三十七本」

「私は……三十四本」

「……うん、飲みすぎた」

「ビーちゃんも止めてくれれば良いのに……」

「私のせいかな？ライっちが出さなければ良かったじゃないか！」

「ハ？俺のせいだよ？ビーちゃんだって、喜んで飲んでただろ！」

「なんだと！？」

「やんのか！？」

「……う」「」

「ここからは、ちゃんとお送りします……あと、お花畑を想像してください」

「叫ぶの、やめよ」

「そう、だな」

お互い、顔を青くしながら横になる。

「ライっち、君の御蔭でスッキリしたよ……まだ気持ち悪いけど」

「ビーちゃん、俺も、今は良い気分だ……吐き気がするけど」

「……クク、ハッハッハ！うえ」「」

もう、酒見たくない。

（……何がしたいんじゃない？）

第四十一話（後書き）

ラ「あけましておめで……う」

よ「ここで吐くなよ」

エ「少し後書き、進化してない？」

よ「気のせいではないか？」

エ「気のせいじゃないわよ！というより、ライナ消えた？」

み「向こうで、花畑を作ってるぞ？」

よ「久しぶりじゃな」

エ「ところで、周りの人達はなんで何も言わないの？」

よ「最後の挨拶に乱入したいただけでは？」

エ「なるほどね……次回予告いつとく？」

よ「じゃな、次回、『その身に刻め……貴様の罪を、な』なんじゃこれ？」

み「阿毛馬志手御芽出途鵜」

よ・エ「……普通に言え」

み「あけましておめでとう」

よ「それでは！」

エ「最後に！」

全「今年もよろしくお願いします！」

よ「ではな」

エ「また次回」

み「……最近、お散歩プレイにはまってきた」

全「……おい」

ラ「……終わっちゃった？」

カ「ふふ、私の相手をして下さい」

ラ「彘？」

カ「ふふふふ、まだ、飲めますよね？」

ラ「いやいやいやいや！無理だから！無理だかガボ！？」

よ「……地上で溺死じゃな」

エ「……彼女に抱かれて、溺死しろ」

み「ワン」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336v/>

ゼロの使い魔 異常な力を持った普通な一般人？

2012年1月1日13時28分発行